

夫が他の女を抱くところを、
私はクローゼットから見ていた

—私が望んだ寝取られは、
もう私の手を離れていた—

第 1 話 見たくない願望

第 2 話 佳澄

第 3 話 スクリーンショット

第 4 話 小さな嘘

第 5 話 触れた指

第 6 話 撮影会

第 7 話 妻のいない夜

(体験版は第 7 話までとなります)

第 8 話 サークルを休んで

第 9 話 ここで終わりにしましょう

第 10 話 もう報告者ではいけない

第 11 話 扉の隙間から

第 12 話 ソファの上

第 13 話 夫の指

第 14 話 崩される声

第 15 話 夫の昂り

第 16 話 戻れない部屋

第 1 話

見たくない願望

真由は、シーツのしわに指先を沿わせながら、ゆっくり息を吐いた。

隣では、恒一が仰向けのまま目を閉じている。
まだ肌に熱が残っていて、胸が静かに上下していた。

さっきまで真由の上にあった腕は布団の外へ落ち、額にはうっすら汗がにじんでいる。少し疲れたような、それでいて満たされた男の顔だった。

真由はその顔を見るのが好きだった。

仕事の時の顔とも、休日にぼんやりしている時の顔とも違う。自分に触れ、自分を気持ちよくし、自分でもちゃんと満たされた男の顔。

真由だけが知っている顔だった。

「大丈夫？」

恒一が目を閉じたまま聞いた。

「うん」

「痛くなかった？」

「平気。今日も、すごくよかった」

そう言うと、恒一は小さく笑った。

それから真由の肩を軽く撫で、いつものように布団を整える。そういう何でもない仕草まで、恒一は雑ではなかった。

急がない。

独りよがりにならない。

真由がどうされたら気持ちいいのかを知っていて、その知っていることを慣れで雑に扱わない。

月に三回、多い時なら四回くらい。

二人のセックスは、四十代夫婦としては十分に続いている方だと真由は思っている。忙しい週には間が空くこともあるが、レスとは程遠い。

しかも恒一は、ただ回数をこなすような男ではない。ちゃんと真由を見て、毎回いかせてくれる。抱かれたあとは、真由も満たされる。

恒一を愛している。

こうして身体を預ける時間も好きだった。

だからこそ、自分の中にあるもうひとつの欲望は、どう考えても説明がつかなかった。

恒一は、しばらくして浅い寝息を立て始めた。

真由はその横顔を見つめながら、少しでも視線を天井へ逃がす。

「明日、朝早い？」

「いや、そこまででもない」

目を閉じたまま、恒一が返した。

「昼前くらいからサークル」

「外で撮るんだっけ」

「うん。天気よさそうだから」

恒一が通っているのは、地域の写真サークルだった。毎週末のどちらかに集まりがあり、公園や川沿いで撮影したり、市民センターの一室で作品を見せ合ったりする。

年齢層は高めで、恒一より年上の会員も多いらしい。

真由は一度も参加したことがない。だが、恒一がそこで過ごす時間を嫌ったこともなかった。仕事と家の往復だけでは息が詰まるだろうし、そういう外の時間がある方が、かえって夫婦の空気も落ち着くのだと、真由は思っていた。

「いい写真が撮れるといいね」

「まあ、がんばってみるよ」

そんな何でもない会話のあと、恒一は本格的に眠りへ落ちていった。

真由はその寝顔を見ながら思う。

自分はこの人を愛している。

この人とのセックスにも、ちゃんと満たされている。

それなのに、たぶん明日か明後日には、真由はまた一人で脚を開くだろう。

恒一ではない何かのために。

恒一そのもののなのに、恒一とのセックスでは埋まらない何かのために。

その二日後の夜、恒一は先に眠っていた。

仕事を立て込んでいたらしく、風呂を出るなり眠気に負けた。寝息は深く、規則正しい。真由は隣に横になったまま、暗い天井を見ていたが、眠気は来なかった。

スマホを手にする。

本当は、別にそういう掲示板を探そうとしたわけではない。

そういう欲望が自分にあることは、前から知っていた。

でも、だからといってネットで同じ趣味の女を探そうと思ったこともないし、掲示板を検索したこともなかった。何となく、そこへ踏み込んだら本当

に認めることになる気がしていたからだ。

今夜も最初は、ただ眠れなかったただけだった。

軽いエロ系の掲示板を流し見て、夫婦の夜の話だとか、下品な体験談だとか、そんなものを眺めているうちに、関連スレッドの一覧から、妙に目を引くタイトルを見つけてしまった。

開くつもりはなかった。

けれど、指は迷わず押していた。

最初の書き込みから、もう露骨だった。

旦那が他の女にフェラされてる想像で濡れる。口

の中に出してしまうところまで考えると止まらない

真由の喉が少し乾く。

そのまま次を読む。

夫が他の女をクソニしてイカせてるのが一番くる。
自分にはそこまで夢中な顔しないくせにって思うと
余計に濡れる

その下。

若い美人より、なんでそんな年増に欲情してんの
って方がたまらない。

しかもちゃんと勃ってるのが最悪

さらに。

挿入そのものより、その前が好き。乳首吸って、
脚開かせて、指入れて、もうこの女を抱く気満々
になってるところ

もう一つ。

他の女の顔に出すのも好きだし、中出しも好き。
とにかく妻じゃない女に気持ちよくなってるっての
がだめ

真由はスマホを持つ指に少し力を入れた。

下品だった。なのに、一つひとつの文章が、自分

の中にあるものとあまりにも近かった。

自分だけではない。

こういうことで濡れる女が、他にもいる。

安心ではなかった。

むしろ、逃げ場が消えていく感じに近かった。

スクロールしていくと、少し雰囲気の違いの違う投稿が目に入った。

露骨な単語は使っている。だが、書き方だけが妙に落ち着いていて、読んでいる側の隠したい部分だけを静かに暴くような文章だった。

投稿者名は、佳澄。

取られたいんじゃないくて、旦那が他の女に欲情してるところを見たいだけの妻もいる。

しゃぶられてるところでも、舐めてるところでも、挿れてるところでも。

しかも若い美人じゃなく、女として自分より明らかに劣って見える相手にちゃんと興奮してる方がだめな人もいる。

真由の指が止まる。

続きがあった。

前に一人だけ、そういう奥さんを知ってる。

旦那が他の女を舐めてる想像とか、中に出してる想像で濡れるくせに、自分では嫉妬だと思い込みたがってた。

でも違った。見ただけだった。

息が詰まった。

顔も知らない、名前も知らない女なのに、妙に見抜かれた感じがした。

さらに、それはこう続いていた。

ただ話を聞いただけじゃない。

その人が見たがっていたものに、少しだけ手を貸したことがある。

だから、どこから現実になるのかは知ってる。

真由の指は、画面の下にある小さな入力欄の上で止まった。

送るつもりはなかった。

ただ読んで、閉じて、それで終わるはずだった。
こんな掲示板を見てしまったこと自体、今夜限りの
気の迷いとして押し流すつもりでいた。

それなのに、佳澄の文章だけが、何度読んでも胸
の同じ場所に引っかかった。

取られたいんじゃないくて、旦那が他の女に欲情し
てるところを見たいだけの妻もいる。

旦那が他の女を舐めてる想像とか、中に出してる想像で濡れるくせに、自分では嫉妬だと思い込みたがってた。

そこまで言い当てられると、もう画面を閉じても遅い気がした。

自分が長いこと見ないふりをしてきたものに、他人の言葉で勝手に輪郭を与えられてしまった感じがする。

送るのか。

本当に。

こんなことを、顔も知らない相手に。

真由は一度、スマホを胸の上に伏せた。

このまま寝てしまえばいいと思った。明日になれば、こんな夜は馬鹿みたいに思えるかもしれない。

けれど、そう考えた直後に、また佳澄の投稿の文面が頭の中で浮かぶ。

見ただけだった。

その一言が、妙に離れなかった。

真由は唇を噛んだ。

こんなことを誰かに打ち明けるつもりなどなかった。これまで一度もなかったし、これからは

ずだった。

なのに、いまだけは、文字にして外へ出してみたい気持ちがあった。肯定してほしいわけではない。ただ、自分の中にあるものが本当に自分だけの異常なのか、それだけでも知りたかった。

画面を開く。

閉じる。

もう一度開く。

それでもすぐには打てなかった。

打ってしまえば、ただ読んだだけの女ではいけない。本当に、この欲望の側へ足を踏み入れることになる。

しばらくそうしてから、真由はようやくメッセージ欄を開いた。

あなたの書いていることが、少しだけわかる気がします。でも、まともじゃないと思っています。
夫を失いたいわけではありません。

送ったあとで、後悔が来た。
何をしているのだろう、と思う。
こんなことを、見ず知らずの相手に。

だが、返事は思ったより早かった。

失いたくないのはわかる。
でも、旦那が他の女に欲情してるところを見たい

んでしょう。

しゃぶられてるところでも、舐めてるところでも、挿れてるところでも。

真由は、すぐには返せなかった。

ここまで直接言われると、もうごまかせない。

若い子相手だと、悔しい気持ちが勝ってしまうかもしれません。

そう打つと、佳澄はすぐに返してきた。

じゃあ年上？

若さや綺麗さで負ける相手じゃない方がだめ？

真由はしばらく画面を見つめた。

そこで否定すれば終われる気がした。

でも、そんな嘘はもう通らない。

.....たぶん、そうです。

どうしてそっちを見るのか、わからない方がだめです。

どこが一番だめなの？

真由の胸が少し詰まった。

質問が、一気に具体的になる。

他の女にフェラされてるところ。

他の女を舐めていかせるところ。

挿れる前からもう興奮してる顔。

あと……最後まで。

送ったあと、消したくなった。

自分が何を打ったのか、画面を見てから遅れてわかった。

ただの想像ではない。

順番まで、もう頭の中にある。

けれど佳澄は、それを淡々と受け取った。

やっぱりそういう人なのね。

真由は返事ができなかった。

否定したかった。

でも、どの言葉も自分で打ったものだった。

佳澄から、もう一通届いた。

見たいものが、かなりはっきりしてる。

真由は、無意識に唇を舐めた。

頭の中にはもう、映像が浮かび始めている。

夫が、自分ではない女に触れている。

その女の反応を見て、少し戸惑いながらも、結局は男の顔になっていく。

それを想像している自分が、ひどく嫌だった。

けれど、嫌だと思うより先に、身体の奥が熱くなっている。

少し迷ってから、真由は打った。

前に一人だけ、そういう奥さんを知ってるって書いていましたよね。

その人には、どういうふうに手を貸したんですか。

送ってから、心臓が強く鳴った。

これはもう、ただ共感を求める質問ではない。

自分が何を聞こうとしているのか、真由自身にもわかっていた。

佳澄からの返事は、少し間を置いて届いた。

最初は話を聞いただけ。

その人も、自分では嫉妬だと思っていた。

でも、話しているうちに違うってわかった。

違う、という言葉に、真由の指が止まる。

佳澄は続けた。

旦那を取られたいわけじゃない。

離婚したいわけでも、壊したいわけでもない。

ただ、旦那が他の女に欲情して、女として扱っ

て、気持ちよくなっていくところを見たい。それを見

たら自分がどうなるのか、知りたかったの。

真由は息を詰めた。

その文章は、あまりにも近かった。

自分がまだ言葉にしていない部分まで、先に書かれてしまった気がした。

その奥さんは、実際に見たんですか。

打ってから、消そうとした。

けれど、指は送信を押していた。

見たわ。

全部じゃないけど。

最初は連絡を取り合うところ。

次に二人で会うところ。

そのあと、触れるところまで。

真由の喉が乾いた。

画面の文字が、急に温度を持ったように見える。

知らない誰かの話のはずなのに

、真由の中ではすでに、そこに夫の姿が重なり始めていた。

どうやって、そんなことに。

自分で打ちながら、真由は胸の奥がざわつくのを感じた。

佳澄はすぐには返さなかった。

その沈黙の数分が、やけに長かった。

急に何かしたわけじゃない。

まず、旦那さんの生活の中に自然に入る場所を作った。

あとは、少しずつ。

連絡を取って、相談して、会話を増やして、二人で会ってもおかしくない理由を作った。

真由は、スマホを持つ手に力を入れた。

自然に入る場所。

連絡を取る。

相談する。

二人で会ってもおかしくない理由を作る。

それはもう、ただの妄想の話ではなかった。

やり方の話だった。

その人は、それを望んでいたんですか。

望んでた。でも、自分では頼んでるつもりじゃなかったと思う。

話を聞いてほしい。

自分が変じゃないか知りたい。

本当にそんなことが起きるのか知りたい。

最初はそういう言い方をしてた。

真由は、画面から目を離せなかった。

それは、自分と同じだった。

自分もいま、まったく同じ言い方をしようとしている。

話を聞いてほしい。

自分が変じゃないか知りたい。

文字だけだとうまくわからない。

でも、その奥ではもう、違うものが動き始めている。

佳澄さんは、どうやってその人の旦那さんに会ったんですか。

最初は偶然みたいに。

でも本当は偶然じゃない。

奥さんから聞いた情報をもとに、自然に会える場所を作った。

真由の胸の奥が、どくりと鳴った。

夫にも、そういう場所がある。

写真サークル。

週末に出かける場所。

真由が一度も入ったことのない、夫の外側の時間。

そこまで考えて、真由は自分が何を連想したのか

に気づき、慌てて目を伏せた。

まだ何も言っていない。

佳澄も、夫のことなど知らない。

それなのに、もう自分の中では、その場所へ佳澄が入り込む光景が薄く浮かんでいた。

怖い。

でも、その怖さの奥に、たしかに熱がある。

真由は、少し時間を置いてから打った。

私は、夫を失いたいわけではありません。

夫のことは好きです。

セックスも、嫌じゃないです。

むしろ、ちゃんと満たされています。

送ったあと、真由は息を止めた。

こんなことまで言うつもりはなかった。

けれど、一度打ち始めると、止まらなかった。

夫は優しいです。

私のことも大事にしてくれます。

だから余計に、自分が気持ち悪いんです。

佳澄の返事は、短かった。

そこが重要なよ。

真由は画面を見つめた。

不満だから見たいんじゃない。

愛されてないからじゃない。

満たされてるのに、別のところが疼く。

だから自分で自分を許せない。

真由は、喉の奥が熱くなるのを感じた。

その通りだった。

誰にも言えなかったことを、佳澄はあっさり言葉
にしてしまう。

真由はさらに打った。

たぶん私は、若さや綺麗さに負けるところを見たいわけじゃないんです。

それだと、ただ傷つくだけだと思います。

悔しくて、惨めで、たぶん興奮どころではなくなる。

でも、どうしてその人なの、と思う相手なら。

夫が選ぶ理由がすぐにはわからないような相手なら。

それでも夫がちゃんと女として見て、触って、気持ちよくなっていたら.....たぶん、だめです。

送信したあと、真由はスマホを伏せそうになっ

た。

だが、伏せられなかった。

佳澄の返事を待っている自分がいる。

否定してほしいのか、肯定してほしいのか、自分でもわからない。

ただ、受け止められたいとは思っていた。

少しして、佳澄から返事が来た。

かなりはっきりしてるわね。

真由の胸が強く鳴った。

でも、そこまでわかってるなら、話だけで終わるかどうかは怪しいわ。

真由は、その一文を何度も読み返した。

怪しい。

たしかにそうだった。

話を聞いてもらいたい。

文字だけではうまくわからない。

自分が変なのか知りたい。

そういう言葉は、嘘ではない。

でも、全部ではない。

佳澄が本当にそういうことに手を貸せる人なら。
前にも、同じような女の欲望を現実へ近づけたこと
がある人なら。

この人なら、自分の中にあるものを、ただ聞いただけ
ではなく、動かしてしまえるのかもしれない。

その考えが浮かんだ瞬間、真由の身体の奥がまた
熱くなった。

少し迷ってから、真由は打った。

佳澄さんは、おいくつなんですか。

送ってから、自分でも嫌な質問だと思った。

年齢を聞くなんて、失礼かもしれない。

でも、どうしても知りたかった。

若い女ではないことは、文面から何となくわかって
いた。

落ち着いた言い方。

こちらの隠したい部分を、急がずに剥がしてくる
ような距離感。

若さで押してくる女を感じではなかった。

少し間を置いて、佳澄から返事が来た。

五十二よ。

真由は、その数字を見つめた。

五十二。

自分より、十一歳も上。

その瞬間、胸の奥に、ひどく醜い安心が広がった。

若い女ではない。

瑞々しい肌でも、張りのある身体でもない。

服を脱げば、きっと年齢の出た肉がある。

二の腕も、腹も、太腿も、自分よりゆるんでいるはずだった。

容姿で負けているとは思えない。

少なくとも、夫が若さや綺麗さに惹かれて奪われ

る相手ではない。

だからこそ、だと思った。

そんな女に夫が触れる。

そんな女を、ちゃんと女として見る。

若さでも、美しさでもない何かに反応して、男の顔になっていく。

それを想像した瞬間、真由は喉の奥が熱くなった。

悔しいのとは違う。

負けたくないのとも違う。

なぜその人なのか、わからない。

わからないのに、夫がその女に欲情してしまう。

そのわからなさが、真由にはたまらなかった。

すぐに佳澄からもう一文が届く。

あなたの条件には合っているのかもしれないわね。嫌味で言っているわけじゃないのよ。

真由は、その一文を見て息を止めた。

条件。

そんな言い方をされると、自分が相手の年齢や身体を値踏みしていたことまで、見透かされた気がした。

違います、と打とうとして、指が止まった。

違う。

少なくとも、完全には違う。

若い女なら嫌だった。

綺麗な女なら、悔しさの方が勝った。

自分より年上で、容姿では負けていないと思える相手だからこそ、そこに夫が反応したら見てみたいと思った。

その残酷さを、佳澄はもうわかっている。

真由は少し迷ってから、短く返した。

すみません。

そういう意味が、なかったとは言えないです。

佳澄からの返事は、すぐだった。

責めてないわ。

そういう見方をしてしまうから、あなたは興奮する
んでしょう。

真由は返事ができなかった。

その通りだった。

佳澄から、さらに続けて届いた。

あなたとご主人は、いくつなの？

真由は少し迷ってから打った。

私は四十一です。

夫は四十三です。

なるほどね。

その短い返事のあと、また少し間が空いた。

真由はスマホを握ったまま、次の言葉を待った。

自分より十一歳も年上の女。

夫より九歳も年上の女。

その女が、もし夫の前に現れたら。

もし夫が、その年齢を知ったうえで、それでも女として見てしまったら。

そう考えるだけで、胸の奥がじわじわ熱くなった。

佳澄から、次のメッセージが届いた。

まあ、話くらいは聞いてあげられるかもしれない。
メッセージで続けてもいいし、もし住んでいる場所が近いなら、直接聞くこともできるわ。

真由は画面を見つめた。

直接。

その言葉で、佳澄がまた一段、現実近づいた。

匿名の向こうの誰かではない。

年齢もわかった。

自分より十一歳も年上の、実在する女。

その女と会って、この話をする。

もしかすると、その先にあることまで話してしまう。

佳澄から、もう一通届いた。

ちなみに私は都内よ。

真由は、画面を見たまま動けなくなった。

都内。

その二文字で、佳澄が急に実在の女として立ち上がった。

匿名の向こうの誰かではない。

会おうと思えば会える距離の女。

そして、もしかすると夫の生活の中にも入り込めるかもしれない女。

真由は少し迷ってから打った。

私も都内です。

送った瞬間、もう一段、何かが近づいた気がした。

佳澄の返事は早かった。

場所によっては、思ったより近いかもしれないわね。

その一文を読んだ時、真由は初めて、はっきりと想像してしまった。

自分が佳澄と会うこと。

目の前に座った佳澄に、いま打ったようなことを直接話すこと。

そしてその先に、まだ言葉にしていない何かがあること。

真由は、ゆっくり打った。

こういう話を、もう少し聞いてみたいです。
文字だけだと、自分でもうまくわからなくて。

少し間が空いた。

話だけなら、会ってもいいわよ。
急がなくていいけど。

真由はその文を見つめた。

話だけ。

その言葉に、少しだけ救われる。

まだ何かを頼むわけではない。

まずは会って、話を聞いてもらうだけ。

自分がどこまで話せるのか、この女がどういう人間なのかを確かめるだけ。

そう思おうとした。

けれど、胸の奥ではもう別のこともわかっていた。自分はただ、話を聞いてもらいたいただけではない。佳澄が本当に手を貸せる人間なのかを、確かめたいのだ。

会いたいです。

直接、少し話したいです。

いいわ。

仕事帰りでも大丈夫。

そのやり取りが終わったあとも、真由はしばらく
スマホを握ったまま動けなかった。

隣では夫が寝返りを打つ。

真由はその気配にびくりとして、画面を暗くした。

何も知らない夫。

こんなやり取りが、そのすぐ横で行われていたな
んて思いもしない夫。

最低だと思う。

なのに、身体の奥はすでに熱かった。

真由はそっと布団をずらし、音を立てないように脚を開いた。

今夜、本当はもっと先まで想像したかった。

夫が佳澄の脚を開かせる。

夫が佳澄の胸や腹に触れ、脚のあいだを舐める。
指を入れて掻き回し、濡らし、もう挿れたくてたまらない顔になる。

そのまま押し倒して挿れて、腰を振って、最後に

は中に出す。

本当はそこまで想像して果てたかった。

けれど、そこまで行く前に、もう身体の方が我慢できなくなっていた。

想像の中では、佳澄が夫の前に膝をついている。

若い女ではない。五十二歳の女。

真由の目には、女として自分より明らかに劣って見える相手。

その女が、夫をしゃぶる。

唇でくびれを擦るように舐め、上目づかいで手を動かし、じわじわと強くしごく。

夫は戸惑いながらも勃っていき、やがて気持ちよ

さを隠せなくなる。

その顔を想像するだけで、真由はもうだめだった。

「……っ」

声を噛み殺す。

本当はもっと先まで見たかった。

他の女を舐めるところも、挿れるところも、中に出すところも。

でも、佳澄にしゃぶられて、しごかれて、気持ちよさそうにしている夫を想像すると、もうだめだった。

もういきたい。

真由の想像は、そのまま夫が佳澄の口の中に激しく射精する流れへ切り替わる。

あまりの気持ちよさに、夫は情けない声を漏らす。眉を寄せ、快楽に負けた顔で、十歳近く年上の女の口の中へ出してしまう。

その瞬間、真由も同じタイミングで身体を震わせた。

「……いく、っ、……」

夫に聞かれないよう、喉の奥で押し殺した、小さくかすれた声だった。

隣では、夫が静かに眠っている。

この夫が、想像の中では他の女にしゃぶられ、気持ちよさそうな顔で口の中に出している。

その背徳が、そのまま真由の絶頂と重なる。

しばらく動けなかった。

胸が苦しく、脚のあいだにはまだ熱が残っている。

スマホの画面は暗いままだった。だが、その向こうに佳澄が実在していることだけは、もう消えない現実だった。

真由は、眠る夫の横顔を見た。

愛している。

ちゃんと気持ちいい。

それなのに、別の女にしゃぶられて、気持ちよさそうにして、口の中に出してしまう夫を想像すると、もっと濡れる。

その最低な事実を、真由はもうずっと前から知っていた。

そして今夜、とうとうそれを現実へ近づける約束までしてしまった。

もう戻れない。

そう思いながら、真由はようやく目を閉じた。

第 2 話

佳澄

佳澄と会ったのは、木曜の夜だった。

仕事を終えて駅に向かうころには、空はもうすっかり暗くなっていた。真由は会社の入ったビルを出たあと、いったん立ち止まってスマホを見た。待ち合わせの時間まではまだ少しある。引き返すなら今だった。

一度会うだけ。

話をするだけ。

そう自分に言い聞かせても、身体の内側では別のものがじわじわと熱を持っていた。

本当に話だけなら、わざわざ仕事帰りに時間を作る必要などなかったのかもしれない。

掲示板の中でやり取りを続けるだけでもよかった。

それでも真由は、佳澄に会おうとしている。

佳澄が前の奥さんにどう手を貸したのか。

どこから現実になり、どこで後戻りできなくなったのか。

そして、自分の場合にもそんなことが起こり得るのか。

聞きたいのは、たぶんそれだった。

話を聞いてもらうだけ。

そういう形にしておけば、まだ自分をぎりぎり許せる。

けれど、真由の奥ではもう、佳澄がただの聞き役では終わらないかもしれないことを期待していた。

数日前の夜、夫の隣で自慰してから、真由は妙に落ち着かなかった。仕事中でも、会議中でも、帰りの電車の中でも、ふいに頭に浮かぶ。

想像の中で、佳澄が夫に触れている。

夫が、自分ではない女の前で、少しずつ男の顔になっていく。

そんなものを自分で勝手に見て、勝手に熱くなって、しかもその相手と現実におおうとしている。

まともではない。

そう思うたび、胸の奥が少しひりついた。

待ち合わせは、駅から少し歩いた場所にある喫茶店だった。チェーン店ではないが、特別しゃれた店でもない。木の看板が出ていて、照明は落ち着いた。仕事帰りの客が二、三組いるだけで、店内は静かだった。

佳澄は窓際の席にいた。

真由は一目でわかった。

写真を見せ合ったわけでもないのに、妙に迷わなかった。

五十二歳。

昨夜、画面に表示されたその数字を、真由は思い出した。

自分より十一歳も年上の女。

夫よりも、九歳上の女。

その年齢を知ったうえで見る佳澄は、やはり若い女ではなかった。

若作りはしていない。けれど、くたびれているわけでもなかった。黒に近い深いグリーンのブラウスに、細いチェーンのついた小さなピアス。髪は肩にかからない長さで、少しだけ外に流している。

シックで、感じがいい。

それは真由も認めざるを得なかった。

ただ、その一方で、服の上からでも、その体つき

には若い頃の張りや瑞々しさがもう抜けているのがわかった。

ややふっくらしているというより、年齢とともに少しずつ締まりを失っていった輪郭が、そのまま残っているような身体だった。

真由の感覚では、女として張り合う相手には思えなかった。

少なくとも、自分が脅かされるような種類の相手には見えなかった。

だからこそ、ここまで来られたのだと思う。

若さで負ける相手ではない。

綺麗さで奪われる相手でもない。

容姿で脅かされるような女ではない。

そう思えるから、見てみたい。

その残酷な安心を、真由は自分の中に感じていた。

けれど、目の前の佳澄は、ただ劣っている女ではなかった。

男が近くにいても無理をせず、気を張らせず、そのまま相手の力を抜かせてしまいそうな静けさがある。

そのことが、真由には少しだけ嫌だった。

もし夫が、この女に気を許したら。

そう考えた瞬間、胸の奥がじわりと熱くなった。

佳澄は真由を見ると、小さく会釈した。

「杉原さん？」

声は、思っていたよりも低かった。

「……はい」

真由も軽く頭を下げ、向かいに座った。

水の入ったグラスが二つ置かれている。佳澄はすでに一口飲んでいたらしく、表面にだけ小さな水滴がついていた。

「会ってしまったわね」

冗談めいた調子ではなかった。

ただ事実を確認するような言い方だった。

真由はすぐには返せなかった。

こういう話を、生身の相手とするのは初めてだ。

掲示板や DM の画面越しなら打てた言葉が、目の前に人がいるだけで急に重くなる。

店員が注文を取りに来たので、真由はコーヒーを頼んだ。佳澄はすでに同じものを注文していたらしい。店員が離れると、また沈黙が戻る。

真由は自分の手元を見た。

指先が少し強張っている。

「……やっぱり、来るべきじゃなかったかもしれません」

ようやく出た言葉は、それだった。

佳澄は、すぐには否定しなかった。

その間が、かえって真由には堪えた。

「まだ、やめられるわよ」

佳澄は静かに言った。

「会ったからといって、必ず何か進めなきゃいけないわけじゃないの。ここで終わりにしてもいい」

真由は視線を上げた。

脅すような顔ではない。

試すような顔でもない。

だからこそ、逃げ道に見せかけて、実際には逃が

さない言葉に聞こえた。

「でも、来たってことは、少なくとも文字だけじゃ足りなかったんでしょう」

真由は膝の上で指を重ねた。

その通りだった。

掲示板を読んで終わるつもりなら、ここにはいない。

DM だけで済ませるつもりなら、仕事帰りの時間を使ってまで会いに来ない。

「……話を聞いてもらうだけのつもりです」

自分で言ってから、その言葉が少し空々しく聞こえた。

佳澄は小さくうなずいた。

「そういう形にしておきたいのね」

真由は返事に詰まった。

責められているわけではない。

ただ、言い訳の形をそのまま見られた気がした。

「責めているわけじゃないわ」

佳澄はグラスに触れながら言った。

「最初は、そういう言い方になるのも当然よ。話を聞いてほしいだけ。自分が変じゃないか知りたいだけ。本当に起きるのか知りたいだけ」

真由は、先日の DM を思い出した。

前の奥さんも、最初はそうだったと佳澄は言っていた。

話を聞いてほしい。

自分が変ではないか知りたい。

本当にそんなことが起きるのか知りたい。

それが、少しずつ現実になった。

「前の奥さんのこと、まだ少し引っかかってます」

真由は言った。

「ええ」

「その人も、最初は本気で頼むつもりじゃなかったんですよね」

「たぶんね」

佳澄は淡々と答えた。

「でも、聞いているうちに、自分が何を見たいのか

はっきりしていった。あなたと同じように」

あなたと同じように。

その一言で、真由は喉の奥が熱くなるのを感じた。

同じなのだ。

自分はもう、佳澄から見れば前の奥さんと同じ場所に立っている。

まだ何も頼んでいない。

まだ何も始まっていない。

そう思いたいだけで、本当はもう入り口に立っている。

「……私は、まだ何もお願いしていません」

「ええ」

佳澄はあっさりうなずいた。

「でも、お願いするかもしれないとは思っている」

真由は返事ができなかった。

否定したかった。

けれど、否定すれば嘘になる。

佳澄の年齢を知り、実際に会ってしまった時点

で、真由の中ではもう、ただの相談では終わらない可能性が膨らんでいた。

「昨日のメッセージで、あなたはかなり話してくれたわ」

佳澄は言った。

「……はい」

「若い女では嫌だということも。私くらいの年齢だから、会ってみようと思ったことも」

真由は顔が熱くなるのを感じた。

文字で打ったことを、目の前で声にされる。

それだけで、羞恥が一段深くなる。

「……言葉にされると、困ります」

「自分で打ったことでしょう」

佳澄の声は静かだった。

その通りだった。

すべて自分で打った。

「それに、ここではそこを曖昧にしない方がいいわ」

「……え」

「曖昧にしたままだと、あなたはずっと“話を聞いてもらっているだけ”という顔をするから」

真由は言葉を失った。

佳澄は続けた。

「あなたが見たいのは、ただご主人が他の女と話すところだけじゃない。連絡を取るところ。二人で会うところ。少しずつ距離が近くなるところ」

真由はカップに視線を落とした。

コーヒーはまだ口をつけていない。

表面に、店の照明が小さく揺れていた。

「……そこまで、言いましたか」

「言ったわ。言葉を少し弱めていただけで」

真由は唇を噛んだ。

「でも、いきなり最後だけ見たいわけではないんでしょう」

佳澄の声は低かった。

「むしろ、そこへ行くまでを見たい。違う？」

真由はしばらく黙っていた。

違う。

そこが一番、恥ずかしいところだった。

ただ夫が別の女に触れるところだけを見たいのではない。

佳澄と連絡を取り、会話をし、少しずつその女を気にするようになり、境目が曖昧になっていく過程を見たい。

夫が自分の知らないところで変わっていくところを、知りたい。

傷つきながら、興奮したい。

「……たぶん」

ようやく真由は言った。

「結果だけじゃ、足りないと思います」

佳澄は黙っていた。

急かすでもなく、ただ続きを待っている。

その沈黙に押されるように、真由は小さく息を吸った。

「夫が、どう変わるのかを見たいんだと思います」

声にすると、胸の奥がきゅっと縮んだ。

「最初は普通に返事をしているだけなのに、少しずつ相手を気にするようになって、言葉が柔らかくなって……自分でも気づかないうちに、少しだけ楽しみにするようになって」

そこまで言って、真由は口を閉じた。

ひどいことを言っている。

夫がそうになっていくところを想像して、傷つくはずなのに、胸の奥が熱くなる。

「そういうところを、見たいのかもしれませんが」

佳澄は小さくうなずいた。

「そこが見たいのね」

真由は返事ができなかった。

「前の奥さんも、少し似ていたわ。最後だけじゃなくて、そこへ行くまでに、自分の旦那がどう変わるのかを見たがっていた。どの言葉で返すのか。どこで迷うのか。どこから少し嬉しそうになるのか」

真由の胸の奥が、じわりと熱を持った。

どの言葉で返すのか。

どこで迷うのか。

どこから少し嬉しそうになるのか。

それを、夫で見たいと思ってしまった。

佳澄は少し間を置いてから言った。

「じゃあ、ご主人のことを聞かせて」

真由は顔を上げた。

「夫のこと、ですか」

「そう。進めるかどうかは別として、相手がどういう人かを知らないと、何も見えないもの」

真由はカップに視線を落とした。

「穏やかです。真面目で……優しいと思います。あまり押しの強いタイプじゃないです。頼まれると断りきれないところは、あるかもしれません」

佳澄は、少しだけ目を細めた。

「女性に慣れてる人？」

「いえ。たぶん、そういう感じではないです」

「自分から強く口説くような人でもない？」

「ないと思います。そういうことを軽くできる人ではないです」

真由は少し迷ってから続けた。

「でも、相手から頼られたり、相談されたりすると、放っておけないところがあります。優しいというか……断る方が苦手なのかもしれません」

佳澄はうなずいた。

「じゃあ、急に女として近づけば引くでしょうね」

真由は小さく息を呑んだ。

「……はい」

「でも、相談なら返す。趣味の話なら続く。相手が困っている形なら、少しずつ距離を許す」

佳澄の言葉が、ひとつずつ夫の輪郭に重なっていく。

真由は、否定できなかった。

「だから、もし本当に進めるなら」

佳澄はそこで少しだけ声を落とした。

「大事ななのは、最初の入り方よ」

「入り方……」

「自然な場所がある。会ってもおかしくない場所。
連絡を取っても不自然じゃない理由。ご主人が警戒せずに返せる話題」

真由の頭に、ひとつの場所が浮かんだ。

夫の写真サークル。

週末に出かける場所。

真由の知らない夫の外側の時間。

年齢層が高く、佳澄のような女が入ってもおかしくない場所。

「……写真サークルがあります」

真由は言った。

佳澄は少しだけ顔を上げた。

「写真サークル？」

「はい。夫が週末に、ときどき参加していて。年齢層も少し高めです。女性の参加者もいます」

「あなたは行ったことがあるの？」

「ありません。夫の趣味なので」

佳澄は少し考えるように視線を落とした。

「それなら、入り口にはなるかもしれないわね」

その言葉に、真由の胸が強く鳴った。

入り口。

ただの趣味の場所だったものが、佳澄の口からそう言われた瞬間、別の意味を持ち始める。

「……本当に、そんなことができるんですか」

「できるとは、まだ言えないわ」

佳澄は静かに言った。

「でも、自然に近づく場所としては悪くない。写真なら、話題も作れる。教えてもらう理由もある。相談することもできる」

真由は黙って聞いていた。

佳澄が夫のいる場所に入る。

夫と同じ空間に立つ。

写真の話をして、言葉を交わす。

それだけで、もう想像が勝手に動き始めていた。

「どうして、そこまでしてくれるんですか」

真由は言った。

言ったあとで、自分の言葉に引っかかった。

そこまでしてくれる。

まだ何も始まっていない。

佳澄が本当に写真サークルへ行くと決まったわけでもない。

自分はまだ、頼んだつもりではなかった。

けれど、その言い方はもう、佳澄が夫に近づくことを前提にしていた。

佳澄は、少しだけ首を傾けた。

「してくれる、ね」

その言葉を確認するように、静かに繰り返す。

真由は顔が熱くなった。

「……すみません。そういう意味で言ったつもりじゃ」

「いいのよ」

佳澄は遮るようには言わなかった。

ただ、淡々と受け取った。

「でも、そういう言葉が先に出たということは、あなたの中ではもう、少し始まっているのかもしれないわね」

真由は返事ができなかった。

始まっている。

その言葉が怖かった。

けれど、否定はできなかった。

何も頼んでいない。

まだ何も決めていない。

そう思いたいのに、佳澄が写真サークルに入っていくところを、真由はもう想像してしまっている。

夫がいつものようにカメラを持って出かける。

その場所に、佳澄がいる。

夫は何も知らないまま、佳澄をただの参加者として見る。

同じ趣味を持つ、少し年上の女性として。

写真の話をする相手として。

それだけのはずなのに、真由の胸の奥は熱を持っていた。

佳澄はコーヒーを一口飲んだ。

カップを置く音は小さかった。

「今日は、ここまでにしておきましょう」

真由は思わず顔を上げた。

「ここまで、ですか」

自分でも、声にわずかな落胆が混じったのがわかった。

そのことに、すぐ恥ずかしくなる。

佳澄はその反応を見逃さなかったように、少しだけ目を細めた。

「今すぐ決めることじゃないわ」

「……はい」

「あなたはたぶん、帰ってご主人の顔を見たら、また怖くなる。やっぱりこんなこと考えるべきじゃなかったと思うかもしれない」

真由は何も言えなかった。

その通りだと思った。

夫の顔を見たら、きっと胸が痛む。

いつものように優しく声をかけられたら、きっと自分がしていることのひどさに耐えられなくなる。

何も知らない夫の隣で、自分は今日、何を話してきたのだろうと思うはずだった。

それでも。

それでも、完全にやめたいとは思っていない。

「見たいと思うことと、現実近づけることは違うわ」

佳澄は静かに言った。

「あなたが今、頭の中で見ているものは、まだ想像よ。でも、情報を渡せば少し現実近づく。場所を教えれば、私はそこへ行けるかもしれない。曜日を教えれば、同じ時間に合わせられるかもしれない。参加の仕方を教えれば、偶然ではなくなる」

真由は息を止めた。

偶然ではなくなる。

その言葉が、胸の奥に重く落ちた。

まだ佳澄は何もしていない。

夫は何も知らない。

真由も、具体的に頼んだわけではない。

けれど、情報を渡せば違う。

真由が渡した情報によって、佳澄は夫のいる場所
へ近づく。

それはもう、ただの相談ではなくなる。

「だから、急がない方がいい」

佳澄は言った。

「勢いで教えるものじゃないわ」

その言葉は優しくかった。

けれど、真由には優しさだけには聞こえなかった。

急がなくていい。

渡したくなったらでいい。

そう言われるほど、選んでいるのが自分になる。

誰かに押されたわけではない。

強引に誘われたわけでもない。

真由が考え、迷い、それでも差し出したことになる。

その逃げ場のなさが、真由の胸を締めつける。

「もし、それでも続けたいと思ったら」

佳澄は続けた。

「写真サークルのことを、もう少し教えて」

真由は小さくうなずきかけて、止まった。

「もう少し、というのは」

「場所。曜日。時間。参加の仕方。ご主人がどれくらい通っているのか。いつも誰と話しているのか。女性の参加者がいるなら、その雰囲気も」

佳澄の声は淡々としていた。

その淡々とした調子が、かえって現実味を持っていた。

場所。

曜日。

時間。

参加の仕方。

言葉はどれも普通だった。

ただの予定確認のようにも聞こえる。

けれど、そのひとつひとつが、夫へ近づくための線になる。

「そんなに詳しくは、知らないかもしれません」

真由は言った。

「知っている範囲でいいわ」

「夫のスマホを見たりは、したくありません」

言ってから、自分でも少し驚いた。

そんなことは聞かれていない。

佳澄も求めている。

それなのに、先に言い訳のように口にしてしまった。

佳澄は表情を変えなかった。

「見なくていいわ。無理に探る必要はない」

その言い方に、真由は少しだけ息をついた。

「あなたが普通に知っていることだけでいいの。
ご主人が自分から話したこと。家で見聞きしたこ

と。予定として知っていること。その範囲で十分」

真由はカップの中を見つめた。

夫は、写真サークルのことを隠しているわけではない。

休日の予定として、普通に話していた。

場所も、おおよその時間も、次の活動日も、真由は知っている。

知っているのだ。

それを佳澄に送れば、佳澄は近づける。

「……私が送ったら」

真由は小さく言った。

「送ったら？」

「本当に、行くんですか」

佳澄はすぐには答えなかった。

真由はその沈黙に、少しだけ怯えた。

行くと言われても怖い。

行かないと言われても、どこかで落胆する。

自分がどちらの答えを望んでいるのか、もうわからなかった。

「行けるかどうかは、見てから決めるわ」

佳澄は言った。

「無理に入れば不自然になる。参加条件が合わないかもしれないし、空気が合わないかもしれない。ご主人の近くに行く前に、場を見ないとわからない」

「場を、見る」

「そう。急にご主人へ近づくわけじゃない。まずは、そこに私がいてもおかしくないか。ご主人が私をどう見るか。その場所で自然に話せる理由が

あるか」

真由は黙って聞いていた。

佳澄は、もう夫を男として直接誘う話をしている
のではない。

もっと手前の話をしている。

同じ場所にいる。

同じ空気の中に入る。

夫に、佳澄という女の存在を一度見せる。

それだけなのに、真由の身体の奥は熱くなってい
た。

「最初は、ただの参加者でいいの」

佳澄は言った。

「写真に興味がある人。少し教えてほしい人。わからないことを聞く人。そのくらいで十分」

真由の中に、画面のように浮かんた。

夫が、佳澄にカメラの使い方を説明している。

佳澄が少しだけ身を寄せて、覗き込む。

夫はいつもの穏やかな顔で、丁寧 to 答える。

まだ何も悪いことは起きていない。

けれど、真由だけが知っている。

佳澄がなぜそこにいるのかを。

その距離が、ただの偶然ではないことを。

その始まりを作ったのが、自分かもしれないことを。

「……怖いです」

真由は言った。

「でしょうね」

佳澄は否定しなかった。

「でも、怖いだけじゃない」

真由は顔を上げられなかった。

怖いだけではない。

その通りだった。

怖い。

苦しい。

いけないことだと思う。

夫に申し訳ないと思う。

なのに、想像すると身体が反応してしまう。

「帰って、よく考えなさい」

佳澄は言った。

「本当に送るかどうかは、あなたが決めることよ」

あなたが決める。

その言葉は、静かに真由を追い詰めた。

真由は、誰かに命令されたいわけではない。

強引に進められたいわけでもない。

でも、自分で選んだと言われるのは怖かった。

自分が夫を差し出すようなことを選ぶ。

自分が佳澄に情報を渡す。

自分が、見たいものに近づいていく。

その事実を、まだまっすぐには見られなかった。

「……考えます」

やっと、それだけ言った。

佳澄は小さくうなずいた。

「それでいいわ」

会話はそこで一度途切れた。

店の中には、カップの触れる音と、遠くの席の低い話し声だけがあった。

真由はコーヒーを一口飲んだ。冷めていた。苦味だけが舌に残る。

こんな話をしているのに、外から見ればただの女二人の会話にしか見えないのだろう。

仕事帰りに会って、コーヒーを飲んで、静かに話しているだけ。

その普通さが、かえって恐ろしかった。

店を出るところには、雨が降り始めていた。

細かい雨だった。

傘を差すほどではないようにも見えたが、街灯の下では白く線になって見える。

佳澄はバッグから折りたたみ傘を出した。

真由も慌てて自分の傘を探したが、指先が少しも
たついた。

「杉原さん」

呼ばれて顔を上げる。

佳澄は、店の灯りを背にして立っていた。

深いグリーンのブラウスが、夜の色に少し沈んで
見える。

「無理に送らなくていいわ」

真由は何も言えなかった。

「でも、送ってきたら、その時は少しだけ現実の話
として受け取る」

現実の話。

真由の喉が詰まった。

「……はい」

声は小さかった。

佳澄はそれ以上何も言わなかった。

軽く会釈して、駅の方へ歩いていく。

真由はしばらく、その背中を見ていた。

五十二歳。

自分より十一歳も年上の女。

その女が、夫のいる場所へ行くかもしれない。

まだ何も始まっていない。

そう思っていた。

けれど、佳澄の言葉が耳に残っている。

送ってきたら、現実の話として受け取る。

真由は傘を開いた。

雨の音は小さい。

それなのに、妙にはっきり聞こえた。

家に帰ると、夫はリビングでテレビを見ていた。

「遅かったね」

いつもの声だった。

真由は靴を脱ぎながら答えた。

「うん。少し、話し込んで」

嘘ではない。

けれど、本当のことでもない。

夫はそれ以上聞かなかった。

「お疲れ。ご飯、温める？」

その優しさに、胸が痛んだ。

真由は首を振った。

「大丈夫。軽く食べてきたから」

夫は「そっか」と言って、またテレビに視線を戻した。

その横顔を見ながら、真由は思った。

この人は、まだ何も知らない。

自分の妻が、仕事帰りに佳澄と会っていたことも。

その女が、いつか自分の趣味の場所に現れるかもしれないことも。

妻がそれを怖がりながら、どこかで待ってしまっていることも。

夫は何も知らない。

そのことに安心して、同時に、ひどく苦しくなった。

「お風呂、先に入る？」

夫が振り向いて聞いた。

「うん。あとでいい」

「そう？」

「うん」

短いやり取りだけで、胸が詰まる。

夫はいつも通りだった。

何も変わっていない。

優しくて、穏やかで、真由を疑わない。

その夫に、自分は何をしようとしているのだろう。

真由はバッグを置き、寝室へ入った。

着替えるふりをして、しばらくベッドの端に座った。

スマホを取り出す。

佳澄との DM 画面を開いた。

まだ何も送らない。

送ってはいけない。

そう思いながら、指は画面の上で止まっていた。

写真サークルの名前。

開催場所。

次の活動日。

参加方法。

知っていることはいくつかあった。

送れば、進む。

送らなければ、まだ戻れる。

真由は一度、画面を閉じた。

リビングから、夫の笑い声が小さく聞こえた。

テレビの何かに反応しただけの、いつもの声だった。

その声を聞いた瞬間、胸が痛んだ。

やめた方がいい。

こんなこと、するべきではない。

佳澄にも、もう連絡しない方がいい。

そう思った。

思ったのに、少ししてまたスマホを開いていた。

佳澄の名前が、暗い画面の中で静かに光っている。

真由は息を止めたまま、文字を打った。

写真サークルの名前。

開催場所。

次の活動日。

そこまで打って、指が止まる。

これを送ったら、佳澄は本当に行くかもしれない。

夫と同じ場所に立つかもしれない。

夫が、何も知らずに佳澄へ笑いかけるかもしれない。

胸の奥が熱くなった。

最低だと思った。

それでも、消せなかった。

真由はしばらく画面を見つめた。

まだ戻れる。

まだ、夫には何もしていない。

そう思った。

けれど次の瞬間、指は画面に触れていた。

送信済み

その小さな表示を見た瞬間、真由の胸の奥で、何か静かに落ちた。

もう、ただの相談ではなかった。

第 3 話

スクリーンショット

送信済み。

その小さな表示を、真由はしばらく見つめていた。

写真サークルの名前。開催場所。次の活動日。

送った内容だけを見れば、何も特別なことは書いていない。夫の趣味の予定を、知人に教えただけ。そう言い訳しようと思えば、できないこともなかった。

けれど、真由にはわかっていた。
それはもう、ただの情報ではない。

佳澄が夫のいる場所へ近づくための道だった。
その道を、真由が自分の手で渡した。

画面の中で、「送信済み」の文字は静かに残っている。見ていると、胸の奥が少しずつ冷えていくようでもあり、反対に身体の奥だけが熱を持っていくようでもあった。

消したい。

そう思った。

でも、もう送ってしまった。

送信を取り消せるかどうかを考えた瞬間、真由は自分が本当に取り消したいのかどうかもわからなくなった。取り消せば、まだ戻れる。佳澄は何も知らないままになる。夫の写真サークルは、ただの夫の趣味の場所に戻る。

そう思うのに、指は動かなかった。

リビングから、夫の笑う声が聞こえた。テレビに向かって、何か短く反応しただけの、いつもの声だった。その普通さに、胸が痛む。

夫の知らないところで。

夫が信用している妻の手で。

夫の趣味の時間に、別の女を近づけるかもしれない情報を送った。

最低だと思った。

思ったのに、胸の奥はまだ熱かった。

しばらくして、佳澄から返信が来た。

日曜なら行けるわ。

まずは、自然に入ってみる。

真由は、その文を何度も読んだ。

日曜なら行ける。

思っていたより早かった。送ってしまったとはいえ、佳澄が実際に動くまでにはもう少し時間があるような気がしていた。参加の仕方を確認して、予定を見て、どこかで踏みとどまる余地があるような気がしていた。

でも、佳澄はもう日曜に行けると言っている。

三日後。

夫がいつも通り家を出て、いつも通りサークルへ行く。その場所に、佳澄がいる。

真由は返信欄に指を置いた。

まだ早いです。

そう打とうとした。

けれど、文字にはならなかった。

早いと思う。怖いと思う。けれど、早いからやめてほしいのかと聞かれたら、答えられない。

佳澄が夫を見る。

夫が佳澄を見る。

まだ何も知らない夫が、佳澄をただの参加者として受け入れる。

その最初の一瞬を想像すると、胸の奥が苦しくなる。

苦しいのに、見たい。

真由はゆっくり返信した。

わかりました。

それだけだった。

佳澄から、すぐに返事が来た。

無理に近づかないわ。

でも、話せそうなら少し話す。

最初は写真のことだけ。

最初は写真のことだけ。

その言葉に、真由は少しだけ息を吐いた。

写真のことだけなら。

サークルで、新しい参加者が夫に写真のことを尋ねるだけなら。

それは不自然ではない。

不自然ではないからこそ、怖かった。

その夜、寝室の夫はいつも通りだった。週末のサークルの話を少しして、午前中から出ると言い、帰りは昼過ぎになるかもしれないと言った。

「最近、ちゃんと続いてるね」

真由がそう言うと、夫は少し笑った。

「まあ、写真は続いてる方かな。上手くなってるかは別だけど」

「楽しいならいいんじゃない」

「うん。人に見てもらおうと、ちょっと違うしね」

人に見てもらおう。

その言葉が、真由の胸に小さく刺さった。

日曜には、佳澄もそこにいるかもしれない。夫の
写真を見るかもしれない。夫がどんなふうに撮る
のか、どんな顔で写真を見るのか、真由が知らない
外の場所で見るともかもしれない。

夫は何も知らずに、布団へ入った。

電気を消すと、部屋はすぐに暗くなった。隣で夫

が寝返りを打つ気配がする。すぐ近くに夫の体温がある。いつもの夜だった。

けれど、真由だけがいつもの夜ではなかった。

夫がカメラバッグを肩にかけて出かける。

その場所に、佳澄がいる。

夫は、佳澄を知らない。

だから普通に見る。

ただの参加者として見る。

写真に興味のある年上の女性として見る。

その最初の一瞬を、真由は見られない。

自分が渡した情報で起こることなのに、真由だけがその場にいない。

そのことが、悔しいような、怖いような、不思議な熱を持っていた。

日曜の朝、夫はいつも通りに出かけていった。

「じゃあ、行ってくる」

「行ってらっしゃい」

真由は玄関で見送った。普通の妻の声で。いつもと同じように。

ドアが閉まると、部屋の中が急に静かになった。
夫の足音が遠ざかり、エレベーターの動く音がして、それも消えた。

真由はしばらく玄関に立っていた。

今日、夫は佳澄に会う。

そう思った瞬間、胸の奥がきゅっと縮んだ。

リビングに戻り、洗濯機を回した。朝の食器を片づけ、テーブルを拭き、掃除機を出した。何かをしていないと落ち着かなかった。けれど、何をしてもスマホが気になる。

佳澄から連絡はまだない。

まだ着いていないのかもしれない。

行くのをやめたのかもしれない。

夫と会わずに終わるのかもしれない。

そう考えると、ほっとする。

でも、ほっとしたあとに、少しだけ物足りなさが残る。

真由はその物足りなさに気づいて、掃除機のコードを握る手に力を入れた。

本当に最低だと思った。

十一時を少し過ぎたころ、スマホが震えた。

佳澄からだった。

来たわ。

ご主人、すぐわかった。

真由は息を止めた。

ご主人、すぐわかった。

その一文だけで、身体の奥が熱くなった。

佳澄が夫を見た。

同じ場所で。

同じ空気の中で。

真由が送った情報をたどって、佳澄が本当に夫を見つけた。

続けて、佳澄から届いた。

思っていたより穏やかな人ね。

写真を見ている時、少し顔が柔らかくなる。

真由は画面を見つめた。

佳澄が、夫の顔を見ている。

真由が知っている夫の柔らかい顔を、佳澄も見ている。

胸の奥に、嫉妬に似たものが刺さった。けれど、それはすぐに熱へ変わった。

しばらくして、また通知が鳴った。

話したわ。

写真の明るさについて、少しだけ。

ご主人、丁寧に教えてくれたわ。

真由はスマホを握ったまま、動けなかった。

話した。

夫が、佳澄に言葉を返した。

写真の明るさについて、少しだけ。

丁寧に。

それだけだった。

それだけなのに、真由の呼吸は浅くなっていく。

夫が少し身体を向ける。佳澄の写真を見る。専門的すぎない言葉を選ぶ。相手を困らせないように、わかる範囲で答える。

想像できた。

それは、真由の知っている夫だった。

そして今、その夫を佳澄も少し知った。

夫は、どんな感じでしたか。

真由は、気づけばそう送っていた。

送ったあとで、少し恥ずかしくなる。

どんな感じでしたか。

それは、ただ様子を聞いているだけのよう
で、そうではなかった。夫が佳澄にどう見えたの
か。佳澄が夫をどう受け取ったのか。夫が、佳澄

の前でどんな顔をしたのか。

それを知りたいと言っているのと同じだった。

佳澄からの返事は、少しして届いた。

あなたが言っていた通りね。

押しが強くない。

でも、話を聞く時はちゃんと相手を見る人。

真由は唇を噛んだ。

夫が、佳澄を見ている。

佳澄も、夫を見ている。

ただ外見だけではなく、話し方や表情まで見ている。真由が知っている夫を、佳澄も少しずつ知り始めている。

昼過ぎ、夫からもメッセージが来た。

少し撮ってから帰る。

夕方前には戻らと思う。

いつもの夫からの、何でもない予定の共有だった。

夫は何も知らない。

自分が今、別の女から夫の様子を知らされていた

ことも、その女が同じ場所で夫を見ていたことも、何も知らずに、いつも通り妻に連絡している。

真由は短く返した。

わかった。気をつけてね。

送ったあと、真由はソファに座ったまま、しばらく動けなかった。

佳澄が夫を見た。

夫が佳澄に返事をした。

夫はまだ、何も知らない。

この三角形が、もうできてしまっている。

夕方、夫が帰ってきた。

「ただいま」

「おかえり」

夫は少し疲れた顔をしていたが、機嫌は悪くなさそうだった。カメラバッグを置き、手を洗い、リビングへ戻ってくる。

「今日、どうだった？」

真由はできるだけ自然に聞いた。

「まあまあ。今日は新しい人が来てたよ」

真由の胸が小さく跳ねた。

「新しい人？」

「うん。まだ始めたばかりみたいで、写真の明るさのこと聞かれた」

「どんな人？」

「うん。僕より年上かな。落ち着いた感じの女の子」

落ち着いた感じの女の子。

夫の口から佳澄の印象が出た。

それだけで、胸の奥が熱くなる。

「ちゃんと教えてあげたんだ」

「ちゃんとしてほどじゃないよ。僕も詳しいわけじゃないし。でも、わかる範囲で」

わかる範囲で。

その言葉が、真由の中に残った。

佳澄のメッセージと、夫の声が重なる。

ご主人、丁寧に教えてくれたわ。

夫は本当に何も知らずに、佳澄へ丁寧に接したのだ。妻がその報告を待っていたことも、その言葉で胸を熱くしていることも知らずに。

「親切だね」

真由が言うと、夫は少し笑った。

「普通だよ。聞かれたら答えるでしょ」

普通。

夫にとっては、普通。

でも、真由にとっては普通ではなかった。

その夜、夫が眠ったあとも、真由はなかなか目を閉じられなかった。

隣から、いつもの寝息が聞こえている。

今日も夫は何も知らないままだった。夕食の時も、風呂上がりに髪を拭いている時も、寝る前に「明日ちょっと早いんだ」と言った時も、いつもと何も変わらなかった。

けれど、真由の中だけが違っていた。

話したわ。

写真の明るさについて、少しだけ。

ご主人、丁寧に教えてくれたわ。

佳澄から届いた言葉が、何度も頭の中で繰り返される。

夫が佳澄に教えた。

丁寧に。

ただそれだけのことだった。サークルに新しく来た人に、写真の明るさについて聞かれて、夫が答えた。ただの親切。ただの趣味仲間としての会話。

それなのに、真由の身体はその「ただの親切」を、
普通のものとして受け取れなかった。

夫が佳澄を見た。

佳澄の声を聞いた。

佳澄に向かって、穏やかに言葉を返した。

その場面を想像するだけで、胸の奥が苦しくな
る。

真由は布団の中で、小さく身じろぎした。

だめだと思った。

隣には夫がいる。何も知らずに眠っている。自分

が今、何を思い出しているのかも知らない。

今日、夫が別の女に向けたほんの短い親切を、妻がこんなふうに反芻していることも知らない。

最低だと思った。

でも、思えば思うほど、身体の奥に熱が残った。

真由は唇を噛んだ。

声を出してはいけない。

夫を起こしてはいけない。

そう思うことで、かえって自分が何をしようとしているのかがはっきりした。

夫が佳澄に丁寧に教えた。

その一文だけで、真由はもう逃げられなかった。

布団の中で息を殺しながら、真由は自分の中に溜まった熱を、ゆっくりと逃がしていった。

頭の中には、夫の顔があった。

けれど、その前に座っているのは自分ではなかった。

佳澄だった。

五十二歳の、落ち着いた女。

若くもない。派手でもない。

それなのに、夫はその女に向かって、丁寧に言葉を返した。

そのことが苦しくて、悔しくて、たまらなく見たかった。

サークルで佳澄が、夫に近い距離で話しかけたのかもしれない。

夫もその距離で、嬉しそうに説明してあげたのかもしれない。

その事実だけで、真由の身体はもうだめだった。

「……っ、……」

その夜、真由はその場面を想像するだけで果てた。

キスの想像すらいらなかった。

セックスなんて、もっといらない。

昼間、写真サークルで笑顔で話していた二人。
ただそれだけの現実が、真由には十分すぎた。

身体の力が抜けたあと、すぐに罪悪感が来た。

隣には、何も知らない夫が眠っている。

真由は暗闇の中で、夫の背中を見た。

ごめんね。

声にはならない言葉が、真由の口から漏れた。

翌日、佳澄から連絡が来たのは、夜だった。

昨日の印象だけど。

ご主人は、押しの強い人ではないわね。

真由はスマホを見つめた。

こちらから急に近づけば、たぶん引く。

でも、ただ写真の質問だけをしていたら、ずっと親切
な人のままで終わると思う。

親切な人のままで終わる。

その言葉に、真由は反応した。

本来なら、安心するべき言葉だった。夫が佳澄に何も特別な感情を持たない。ただ親切に答えるだけ。ただ趣味仲間として関わるだけ。

その方がいいはずだった。

それなのに、真由はその言葉に物足りなさを覚えてしまう自分に気づいていた。

佳澄から、続けて届いた。

次は、少しだけ女として見られる余地を作る。
服装でも、話し方でも、距離の取り方でも。
ご主人が警戒しない範囲でね。

真由は息を止めた。

女として見られる余地。

その言葉が、画面の中で静かに光っていた。

それは、夫に女として近づくということですか。

送ったあと、胸が冷えた。

佳澄からの返事は、少し間を置いて届いた。

そうね。

でも、押すわけじゃない。ご主人が自分から少し意識する入口を作るだけ。

真由は、喉の奥が詰まるのを感じた。

夫が佳澄を、女として少し意識する。

それは、真由が見たかったものに近かった。

でも、実際に言葉にされると、怖かった。

佳澄から、さらに一通届いた。

ここから先は、あなたが決めることよ。

やめたいなら、次はただの参加者として終わらせる。続けたいなら、私は少しだけ踏み込む。

真由は、その文を何度も読んだ。

やめたいなら。

続けたいなら。

佳澄は命令しない。進めろとも言わない。止めるなとも言わない。

選ぶのは、自分。

真由は返信欄に指を置いた。

やめてください。

そう打てばいい。

それで終わる。夫は何も知らないまま。佳澄も、ただのサークルの新しい参加者のまま。自分だけが、昨日のことを忘れればいい。

けれど、指は動かなかった。

見たい。

夫が、佳澄にどう返すのか。

佳澄が、夫の中にどんなふうに入っていくのか。

夫が、いつただの親切ではない返事をするのか。

見たい。

真由は、ゆっくり打った。

まだ、見たいです。

でも、急にではなく。

送信済み。

その表示を見た瞬間、真由は自分がもう一段、深いところへ降りてしまったことを知った。

その週、真由は何度か、佳澄から送られてきた短い報告を開いたまま一人で果てた。

夫が何も知らずに隣で眠っている夜もあった。昼間、仕事の休憩中に画面を見てしまい、慌てて閉じた日もあった。

まだ何も起きていない。

夫と佳澄は、日曜に一度話しただけだ。連絡先も交換していない。二人きりで会ったわけでもない。佳澄が夫に触れたわけでもない。

それでも、真由の中では、すでに何かが始まっていた。

夫が佳澄に丁寧に教えた。

佳澄が夫を穏やかな人だと言った。

次は、少しでも女として見られる余地を作る。

それだけの言葉が、何度も身体の奥に戻ってくる。

そのたびに真由は、自分が夫を裏切っているような気持ちになった。

けれど、裏切っていると思うほど、次の報告を待ってしまう。

その矛盾の中で、一週間は静かに過ぎていった。

翌週の日曜、夫はまた写真サークルへ出かけた。

真由は朝から落ち着かなかった。

今日は、佳澄が少し踏み込む日だった。

女として見られる余地を作る。

夫が警戒しない範囲で。

その言葉が頭から離れない。

「今日はこの前の人、来るのかな」

朝食の片づけをしながら、真由は何でもないふう
に聞いた。

夫はコーヒーを飲みながら首を傾げた。

「どうだろう。来るんじゃないかな。代表の人と話してみたいだし」

「そう」

「写真、始めたばかりって言ってたから、続くかどうかはわからないけど」

夫は何も知らない。

佳澄が今日、どんなつもりで来るのか。

真由がそれを知っていることも。

そのことを朝からずっと考えていることも。

何も知らずに、いつも通りカメラバッグを肩にかけた。

「じゃあ、行ってくる」

「行ってらっしゃい」

ドアが閉まる。

真由はその場でしばらく立ち尽くした。

今日、佳澄は夫の前に立つ。

前回より少しだけ、女として。

十一時を過ぎたころ、佳澄からメッセージが来た。

来ているわ。

ご主人もいる。

真由は画面を見つめた。

短い文なのに、胸が強く鳴った。

しばらくして、次のメッセージが届く。

今日は、前回より近くに座れた。

向こうも覚えていると思う。

覚えている。

真由はその言葉を見ただけで、息が浅くなった。

夫が、佳澄を覚えている。

ただの新しい参加者として。写真の明るさを聞いてきた人として。落ち着いた感じの、年上の女として。

何でもないことだ。

でも、何でもないことではなかった。

昼過ぎ、佳澄から届いた。

話したわ。

先週教えていただいたことを試したんですけど、ま

だ少しわからなくて、と聞いたの。

真由は、スマホを握る手に力を入れた。

続けて、佳澄から届く。

ご主人、覚えていたわ。

「前に言っていた明るさのことですね」って。

真由は動けなかった。

夫が覚えていた。

佳澄との前回の会話を。

佳澄が何を聞いていたのかを。

それを今日、思い出して返した。

何でもないことだ。

ただの趣味仲間として、前にした会話を覚えていただけ。誰にでもすることかもしれない。

でも、それだけで真由の胸は熱くなった。

佳澄が、夫の中に少し残っていた。

また通知が来る。

今日は、少し柔らかく話してみた。

服も、前より少しだけ明るいものにしたわ。

ご主人は、見ないふりをするのが上手ね。

真由はその文を読み、胸の奥が冷えるような感覚を覚えた。

見ないふり。

つまり、見たのだろうか。

夫は佳澄を、女として見たのだろうか。見ていないふりをしたのだろうか。

それとも、佳澄がそう読んでいるだけなのだろうか。

わからない。

わからないから、苦しい。

わからないから、もっと知りたくなる。

少しして、また佳澄から届いた。

今日は、前より少し長く話せた。

私が住んでいるあたりを聞かれて答えたら、

「あの辺りなら、よく撮りに行きますよ」って。

川沿いの道がきれいだとか、夕方の光がいいとか、いくつか教えてくれたわ。

私が「今度行ってみます」と言ったら、

「ぜひ。たぶん佳澄さんも好きだと思います」

って言ってた。

真由は、画面を見つめたまま動けなかった。

住んでいる場所を聞いた。

その近くの景色を思い浮かべた。

そして、佳澄も好きだと思う、と言った。

どれも、ただの写真の話だと言えばそうなのかもしれない。

けれど、先週の短いやり取りとは違う。

夫は、佳澄のいる場所を少しだけ知った。

佳澄の方も、夫の知っている景色をひとつ受け取った。

ほんの少し。

けれど、二人の間に、先週にはなかった近さが生まれている気がした。

佳澄から、さらに続く。

そのあと、私が少し冗談を言ったら、ご主人も笑った。先週より、だいぶ話しやすくなってる。たぶん、ご主人もそれは感じてると思う。

真由は、スマホを握る手に力を込めた。

先週より、話しやすくなっている。

夫と佳澄のあいだに、自分の知らない一週間分の近さが生まれている。

それが、たまらなく嫌だった。

けれど同時に、その先を知りたいと思ってしまう
自分もいた。

午後になって、佳澄からまた届いた。

今日なら、連絡先を聞いても不自然ではないと
思う。

真由は、その一文を何度も読んだ。

今日なら。

一度話して、次にまた会って、前回の続きを聞き

ている。夫もそれを覚えていた。

さらに踏み込んで、佳澄の住む場所についても話し、冗談で笑い合う。

先週よりも確実に話しやすい空気が生まれている。

だから、今なら聞ける。

自然に。

真由は返信欄を開いた。

やめてください。

そう打ちかけた。

けれど、指は止まった。

聞いてほしくない。

でも、聞いてほしい。

その矛盾が、胸の奥でほどけないまま熱を持つ。

真由は結局、何も送れなかった。

しばらくして、スマホが震えた。

佳澄からだった。

交換したわ。

たった一文。

真由は、その文字を見た瞬間、呼吸が止まった。

交換した。

夫と佳澄が、連絡先を交換した。

サークルの場ではなく、これからは画面の向こうでつながる。佳澄のスマホの中に、夫が入った。夫のスマホの中に、佳澄が入った。

もう、同じ場所にいる時だけではない。

いつでも、言葉を送れる。

続けて、佳澄から画像が届いた。

スクリーンショットだった。

真由は、指先が震えるのを感じながら、それを開いた。

佳澄

今日はありがとうございました。

さっきのお話、楽しかったです。

教えていただいた場所、今度行ってみますね。

もしよかったら、撮った写真をまた見ていただいてもいいですか。

恒一

こちらこそ、楽しかったです。

ぜひ行ってみてください。

写真も、僕でよければいつでも。

たったそれだけだった。

それだけなのに、真由の呼吸はゆっくり浅くなっていく。

楽しかったです。

僕でよければいつでも。

普通の文だ。何もいやらしくない。何も始まっていないようにも見える。

でも、その普通さが、そのまま生々しかった。

夫が佳澄に返している。

佳澄はもう、夫のスマホの向こうにいる。

真由はもう一度、最初から読み直した。

三回。

四回。

そのたびに、胸の奥が熱くなっていく。

サークルのあと、佳澄が夫に向かって、笑いながら礼を言ったのかもしれない。夫も、あの穏やかな調子で応じたのかもしれない。

その続きを、画面の中で交わしている。

ただそれだけの現実が、真由には十分すぎた。

夕方、夫が帰ってきた。

「ただいま」

「おかえり」

真由はキッチンから顔を出した。夫は少し疲れた顔をしていたが、機嫌は悪くなさそうだった。

「今日もサークル、楽しかった？」

「うん。まあまあ」

夫はバッグを置きながら答えた。

「この前の新しい人、今日も来てたよ」

真由は、できるだけ自然にうなずいた。

「そうなんだ」

「うん。今日は前より少し話したかな」

夫は何でもないことのように言った。

「住んでるあたりの話になってさ。あの辺なら、僕もたまに撮りに行くから、川沿いの道がきれいだよって教えたんだ」

昼間に見た佳澄からの報告が、真由の中によみがえる。

あの辺りなら、よく撮りに行きますよ。

川沿いの道がきれいだとか、夕方の光がいいとか、いくつか教えてくれたわ。

同じ会話を、今度は夫の口から聞いている。

そのことが、真由の胸の奥を静かに熱くした。

「そうなんだ」

「うん。今度行ってみるって言ってた」

夫はそこで少し笑った。

「それで、向こうが少し冗談を言ってきてさ。思ったより、話しやすい人かも」

真由の指先が、箸の上でわずかに止まった。

話しやすい人。

夫が、佳澄をそう感じている。

ただ親切にただけではない。

ただ写真の話をしたただけでもない。

今日の会話そのものが、夫の中に少し残っている。

「へえ。気が合いそうなんだね」

なるべく軽く言ったつもりだった。

夫は、味噌汁を一口飲んでから、少し考えるようにして答えた。

「どうだろう。まだそんなに話していないけど。
でも、前よりは話しやすくなったかな」

前より。

その言葉が、真由には刺さった。

夫も感じているのだ。

先週より、佳澄との距離が少し近づいたことを。

昼間に見たスクリーンショットが、頭の中に浮かぶ。

佳澄

今日はありがとうございました。

さっきのお話、楽しかったです。

教えていただいた場所、今度行ってみますね。

もしよかったら、撮った写真をまた見ていただいてもいいですか。

恒一

こちらこそ、楽しかったです。

ぜひ行ってみてください。

写真も、僕でよければいつでも。

その同じやり取りをした夫が、今は目の前で、何でもないことのように食事をしている。

「また写真を見せてもらうの？」

真由が聞くと、夫は少し笑った。

「そうなるかも。今度その川沿いの道で撮ってみるって言ってたし、撮れたら見せてくれるんじゃないかな」

知っている。

その言葉を、真由はもう画面の中で見ていた。

写真も、僕でよければいつでも。

夫は、あの文章をただ自然に打ったのだ。

特別な意味などなく。

何も知らずに。

今日の会話が少し楽しかったから、その続きとして。

その無自覚さが、真由には苦しかった。

たった一週間。

会ったのは、まだ二度だけだった。

それなのに、夫と佳澄のあいだには、もう先週にはなかった空気が生まれている。

少し話しやすくなった。

冗談を言い合えた。

連絡先を交換して、会話の続きを画面の中へ持ち帰った。

ここまで早く近づくとは、真由は思っていなかった。

もっと時間がかかるものだと思っていた。

夫はもっと慎重で、佳澄ももう少し遠くから近づ

いていくのだと。

けれど、このまま進めば、自分が考えているよりずっと早く、何かが動いてしまうのかもしれない。

そう思った瞬間、胸の奥がひやりと冷えた。

怖い。

本当に、怖いと思った。

それなのに、その先を想像すると、身体の奥の熱は少しも収まらなかった。

その夜、真由は夫が眠ったあとで、もう一度スクリーンショットを開くつもりだった。

けれど、ベッドに入ると、夫の手がいつもより少し早く真由の腰に触れた。

「疲れてる？」

そう聞かれて、真由は首を振った。

疲れているわけではなかった。

むしろ、身体の奥には昼間から消えない熱が残っていた。

佳澄から届いた報告。

住んでいるあたりの話をして、夫が撮影に向いた場所を教えたこと。

冗談を言い合って、前より話しやすくなったと夫が感じていたこと。

そして、画面の中に残っている言葉。

写真も、僕でよければいつでも。

それらが、真由の中にずっと残っていた。

夫に触れられた瞬間、真由はほっとした。

これは自分の夫だと思った。

自分を見ている。

自分に触れている。

自分を求めている。

そのことが嬉しかった。

けれど、夫の顔が近づいた時、真由の中に別の考えがよぎった。

今日、佳澄と少し長く話した夫。

佳澄の住むあたりを聞き、その場所のことを思い浮かべながら話した夫。

佳澄の冗談に笑い、前より話しやすくなったと感じていた夫。

今、この人の中に、今日の佳澄との会話が少しでも残っているのではないか。

そんなはずはない。

夫は何も知らない。

佳澄のことを、まだ女として意識しているわけではない。

ただサークルで知り合った新しい人と、写真の話をして、少し会話が弾んだだけだ。

そう思うのに、一度浮かんだ疑いは消えなかった。

夫の手がやさしく動くたびに、真由は夫の目を見ようとした。

自分だけを見ているのか、確かめたかった。

けれど、見れば見るほど、わからなくなる。

このやさしさは、今日、佳澄にも向けられたものではなかったか。

自分に触れながら、ほんの一瞬でも、佳澄の明るい服や、笑った顔や、画面の中で続くはずの会話を思い出してはいないだろうか。

真由の胸が苦しくなる。

たった一週間。

会ったのは、まだ二度だけ。

それなのに、夫と佳澄のあいだには、もう自分が

想像していたより早く、何かが生まれ始めているように見えた。

このまま進めば、夫は自分が思っているより早く、佳澄を女として見るようになるのかもしれない。

そう思うと怖かった。

本当に怖いと思った。

けれど、その怖さが胸の奥へ沈むほど、身体は逆に熱を増していった。

夫の手が肩に置かれ、髪に触れ、首筋へ移る。い

つもの流れ。いつもの温度。

真由はその手を知っている。触れられ方を知っている。どこに触れられると身体が緩むのかも、どんなふうに呼吸が浅くなるのかも、全部知っている。

だからこそ、その夜は余計にだめだった。

夫に触れられるたび、真由の頭のどこかで、別の場面が勝手に立ち上がる。

今日の昼間、佳澄はその手の届く距離にいた。

夫は笑いながら、佳澄に近い距離で立っていた。

もしそのまま、趣味の話ではなく、女としての身体へ手を伸ばしたら。

もし今、自分に向けているのと同じ丁寧さで、佳澄の肩に、首筋に、胸元に触れたら。

「……っ」

真由の呼吸が小さく乱れた。

夫は気づかない。

あるいは、気づいてもいつもの反応の延長だと思っている。

指先はそのまま真由の身体をたどり、少しずつ熱を引き出していく。

真由は目を閉じた。

閉じるしかなかった。

夫に触れられている。

その現実の快感と同時に、頭の中では夫が佳澄に触れている。

佳澄の、年齢の出た少しゆるんだ身体へ、夫が同じように手を伸ばす。

自分の妻にするみたいに、急がず、雑にもせず、相手がちゃんと反応するまで触れていく。

僕でよければいつでも

夫の言葉が胸の奥を乱してくる。

そんな想像をしている自分が最低だと思う。

それなのに、身体はいつもより早く熱を持った。

夫が真由を求める動きに合わせて、真由の頭の中では別の女の姿が重なる。

舌先の感触を受けるたびに、夫が佳澄に同じことをしているところを思ってしまう。

佳澄の脚を開かせ、丁寧に反応を引き出し、あの落ち着いた顔を少しずつ崩していく場面が、勝手に頭に浮かぶ。

「今日、どうしたの」

少しだけ驚いたように、夫がそう言った。

真由は答えられなかった。

自分でもわかっていた。

今夜の自分は、いつもより反応が早い。呼吸も浅く、身体の強張りがほどけるのも早すぎる。

「……わかんない」

それだけ言うのが精一杯だった。

本当は、わかりすぎるほどわかっている。

夫に触れられながら、夫が他の女に触れている想像をしているからだ。

そのことに興奮してしまっているからだ。

「びっくりするくらい、濡れてるよ……」

夫の舌が濡れた溝をなぞるたびに、その同じ舌が

佳澄の溝をなぞる。

夫の舌が敏感な突起を擦るたびに、その同じ舌が
佳澄の突起を擦る。

もう限界だった。

いつもよりもずっと早く、激しく。

「……あ、っ……もう…」

「……だめっ、……っ、…いくッ……」

真由は肩を震わせて激しく絶頂してしまう。

夫は少し驚いた表情で顔を上げる。

夫の口元が、真由の濡れた熱で広く濡れている。

「すごく……早かったね…」

それだけ言うと、夫は体勢を変えて真由の中に入ってくる。

そこでも真由の頭の中では同じことが続いていた。

今、自分の身体に起きていることが、そのまま佳澄の身体にも起きるかもしれない。

夫がこのまま佳澄を抱くとしたら、こんなふうに距離を詰め、こんなふうに受け入れさせ、最後には自分のものとしてしまうのだろうか。

夫が真由を奥まで満たしてくる。

すぐにそれは、佳澄に覆いかぶさって腰を振る夫の姿に置き換わる。

その想像が重なった瞬間、真由はもう耐えられなかった。

いつもより早かった。

いつもより深かった。

自分でも意識が追いつかないうちに、身体の方が先に持っていかれる。

僕でよければいつでも

「……や、っ……」

声が漏れる。

夫の肩に指先が強くかかる。

「え、ちょっと……」

夫が本当に驚いたように、そこで一瞬だけ動きを止めかけた。

「今日、なんか……」

最後まで言い切らない。

だがその声に、真由ははつきり気づいた。

いつもと違うと思われている。

「止めないで、っ……」

佳澄が夫に突かれて絶頂する。

こんなふうに顔を歪めて、声を漏らして。

その想像は真由を身体の奥底から震わせる。

「……あぁっ、……もう……いくっ、！」

夫に抱きかかえられたまま、真由は激しく痙攣するように絶頂してしまった。

何も知らない夫が真由の中で果てると、真由は顔

を背けるように枕へ頬を寄せた。

理由を言えるはずがない。

あなたが今日ほかの女と話していたことを思い出している、なんて。

「ごめん……」

思わずそう言うと、夫は小さく笑った。

「なんで謝るの」

その返しがまた、真由にはつらかった。

優しい。

何も知らない。

それなのに、自分だけがこんなふうに汚れている。

その夜、真由は夫に抱かれたあと、しばらく動けなかった。

身体はたしかに満たされている。気持ちよかった。

夫のことも愛している。

それは本当だ。

でも、今夜の絶頂の奥にあったのは、佳澄の影だった。

夫に抱かれているのに、夫が佳澄を思い出しているかもしれない。

その疑いが、真由の中で痛みになり、熱になり、また別の想像につながっていった。

自分が触れられながら、佳澄が同じように触れられるところを思う。

自分が抱かれながら、佳澄が同じように夫を受け入れるところを思う。

その想像が、真由をいつもより早く、深く連れていった。

隣で夫が浅く息を整えている。

真由は天井を見つめたまま、自分の胸の奥に残っているいやな熱を感じていた。

夫は今夜、自分を見てくれていた。

それなのに、真由の頭には、別の言葉が浮かんでいた。

佳澄は、今日、夫にどう見えていたのだろう。

身体はまだ夫の余韻を残している。

隣には、何も知らない夫が眠っている。

さっきまで自分を抱いていた夫。

その夫のスマホの中には、佳澄がいる。

夫婦の関係は、今もちゃんとある。

それなのに、その寝室の中にまで、佳澄はもう入り込んでいる。

それがどうしようもなく気持ち悪くて、どうしようもなく甘かった。

第4話

小さな嘘

月曜の朝、夫はいつも通りだった。

昨日のサークルのことも、佳澄のことも、特別なことのように話さなかった。

朝食を食べ、コーヒーを飲み、仕事へ行く支度をする。

ネクタイを結ぶ手つきも、鞆を持ち上げる仕草も、何も変わらない。

けれど真由は、夫のスマホがテーブルの上に置か

れているだけで、胸の奥が落ち着かなかった。

あの中に、佳澄がいる。

昨日、連絡先を交換した女。

夫が、

「写真も、僕でよければいつでも」

と返した女。

サークルの日ではない。

会う日でもない。

それでも、今日から二人は連絡を取れる。

真由の知らない時間に、夫の画面に佳澄の名前

が浮かぶかもしれない。

夫が仕事の休憩中にそれを開き、少し考えて、あの穏やかな言葉で返すかもしれない。

そのことを考えるだけで、真由は朝から少し息苦しかった。

夫を送り出したあと、真由はしばらく玄関に立っていた。

ドアの向こうで足音が遠ざかる。

エレベーターの音がして、静かになる。

昨日の夜、自分は怖いと思ったはずだった。

たった一週間。

二度会っただけ。

それなのに、夫と佳澄のあいだには、自分が思っていたより早く柔らかい空気が生まれていた。
このまま進めば、自分が考えているよりずっと早く、何かが動いてしまうのかもしれない。

そう思って、胸の奥が冷えた。

それなのに今朝にはもう、その先を待っている自分がいる。

佳澄からの連絡を。

夫が佳澄に、どんな言葉を返すのかを。

そのことが、真由には自分でも少し怖かった。

しばらくして、スマホが震えた。

佳澄からだった。

ご主人、思っていたより早いかもしれないわ。

真由は、その一文を見つめたまま動けなかった。

続けて届く。

押しの強い人ではないと思う。

でも、昨日の感じを見る限り、文字のやり取りだと案外こちらへ返してくる気がする。

会っている時は慎重でも、LINE なら少し本音が出やすい人なのかもしれない。

こちらから少し女を見せれば、ご主人の方からも男が出てくると思う。

そうすると、次に会うまでの数日の方が、意外に距離を縮めるかもしれないわ。

このまま写真の話の延長で、ゆっくり近づくこともできる。

でも、あなたがその先を見たいなら、今週は少しこちらから女を見せる。

どうする？

真由は、何度も読み返した。

文字のやり取りだと、案外こちらへ返してくる。

昨日の夫を思い出す。

佳澄の住んでいるあたりを聞き、その近くの撮影場所を教えた夫。

佳澄の冗談に笑い、前より話しやすくなったと口にした夫。

そして夜、自分を抱きながら、その日の会話を少しでも思い出しているのではないかと、真由に疑わせた夫。

確かに、思っていたより早いのかもかもしれない。

慎重で、押しが強くなって、誰かに踏み込む時には少し間を置く。

真由の知っている夫は、そういう人だった。

けれど、佳澄の前では。

佳澄が少しだけ女として寄れば。

会っていない日の文字の中で、夫は自分でも気づかないまま、少しずつ男を見せていくのかもしれない。

このまま、ゆっくり近づくこともできる。

そう言われているのに、真由の目はその先の言葉から離れなかった。

あなたがその先を見たいなら。

見たい。

怖いのに、そう思ってしまった。

ここで止めれば、まだ夫は昨日までの夫のままでいられるのかもしれない。

佳澄とのやり取りも、写真の話の延長にとどまるのかもしれない。

けれど、真由はその先を知りたかった。

夫が、佳澄にどこまで返していくのか。

佳澄が少し女を見せた時、夫の中からどんな男が出てくるのか。

指先が少し震えた。

それでも、真由は打った。

お願いします。

送った瞬間、胸の奥がひやりと冷えた。

自分で、夫をもう一歩先へ進ませたのだと思った。

けれど、その冷たさの底で、身体はもう小さな熱を持ち始めていた。

月曜の昼過ぎ、佳澄から最初のスクリーンショットが届いた。

真由は職場の休憩室で、誰にも見られないように画面を少し傾けて開いた。

佳澄

昨日教えていただいた川沿いの道、
あとで少し調べてみたら、やっぱりきれいですね。
今度行ってみたくなりました。

恒一

夕方が特にいいですよ。

光が低く入るので、川面がきれいに見えると思います。

佳澄

やっぱり恒一さんは、そういう静かな景色がお好きなんですね。

恒一

そうかもしれません。

人が多いところよりは、落ち着きます。

佳澄

少しわかる気がします。

私も、賑やかな場所より落ち着くところの方が好きです。

恒一

それなら、気に入ると思いますよ。

佳澄

恒一さんがそう言うなら、行ってみたくありませんね。

恒一

そう言われると、少し責任を感じますね。

でも、本当にいい場所なので。

真由は、最後の数行を何度も読んだ。

写真の話だった。

昨日教えてもらった場所。

夕方の光。

人の少ない景色。

どれも、まだ不自然なものではない。

けれど、その中に、昨日までより柔らかいものが
混じっていた。

恒一さんがそう言うなら。

そう言われると、少し責任を感じますね。

佳澄が少しだけ寄る。

夫が、それを受けて返す。

本当に小さなやり取りだった。

けれど、真由にはわかった。

これは、ただ写真の場所を教えているだけではない。

佳澄は、夫の言葉だから行ってみたくなる、と伝えている。

夫は、それを照れたように受け止めている。

昨日、佳澄が言った通りだった。

対面では慎重に見える夫が、文字の中では、思っていたより自然に近づいている。

少しして、佳澄からスクリーンショットではないメッセージが届いた。

今日はまだ写真の話の中。

でも、ご主人は終わらせようとしていないわ。

こちらが少し寄ると、ちゃんと受けて返してくる。

たぶん、思っていたより早い。

真由はすぐには返せなかった。

終わらせようとしていない。

その言葉が、胸の奥に残った。

夫が佳澄に優しいから苦しいのではない。

夫が、佳澄とのやり取りを少し心地よく感じ始めているように見えるから苦しい。

真由は、短く返した。

そう見えます。

佳澄からの返事は、すぐに来た。

でしょう。

文字の方が、少し前に出やすい人なのかもしれ

ないわね。

真由は、画面を伏せた。

その通りだと、思ってしまった。

夫の優しさが、夫の隙になる。

それだけではない。

夫の慎重さの裏にあった男の部分が、文字の中で少しずつ表へ出てくる。

そう考えた自分が嫌だった。

けれど、午後、仕事をしていても、真由は何度も同じスクリーンショットを思い出した。

恒一さんがそう言うなら、行ってみたくくなります

ね。

そう言われると、少し責任を感じますね。

本当に何でもない言葉だ。

けれど、その中にはもう、昨日から続いている二人だけの空気があった。

夜、夫はいつも通りに帰ってきた。

味噌汁を飲みながら、何も知らない顔でテレビを見ている。

真由はその横顔を見て、胸が痛んだ。

この人は自分の夫だ。

今日も帰ってきた。

自分の作った夕食を食べている。

夜になれば、同じベッドで眠る。

なのに、夫の今日の言葉の一部は、佳澄のスマホに残っている。

そして、その残った言葉を、真由は佳澄から見せられている。

その事実が、胸の奥をじわじわと熱くした。

その夜、夫が眠ったあと、真由はまたスクリーンショットを開いた。

佳澄

恒一さんがそう言うなら、行ってみたくくなりますね。

恒一

そう言われると、少し責任を感じますね。

でも、本当にいい場所なので。

そのやり取りを何度も読んだ。

写真の話だ。

でも、写真だけではない。

夫の言葉に、佳澄が少しだけ寄っている。

そして夫が、それを嫌がらずに受け止めている。

真由はスマホを閉じた。

今日はだめ。

そう思った。

昨夜、夫に抱かれたばかりだ。

まだその余韻が身体に残っている。

なのに、夫が別の女に送った数行を見て、また熱くなっている。

最低だと思った。

それでも、眠る前にもう一度だけ画面を開いた。

夫の言葉は、やはりそこに残っていた。

その事実が、どうしようもなく真由を乱れさせる。

一度身体の内奥で燃えた熱は、簡単には消えてくれなかった。

真由はスクリーンショットを読み返しながら、ひとりで果てた。

火曜日の朝、真由は少し寝不足のまま起きた。

夫はいつも通りだった。

シャツに袖を通し、コーヒーを飲み、今日は少し帰りが遅くなるかもしれない、と言った。

真由は「わかった」と答えた。

普通の朝だった。

けれど、真由の中ではもう、昨日のスクリーンショットが普通のものではなくなっていた。

月曜は、まだ写真の話の中だった。

けれど、その写真の話の端々に、夫と佳澄がお互いの好みを少しずつ知ろうとしている気配が見えた。

火曜は、何が届くのだろう。

その考えが頭に浮かんだ瞬間、真由は自分に嫌気がさした。

届いてほしいと思っている。

佳澄からのスクリーンショットを。

夫と佳澄のやり取りを。

昨日より少しだけ先へ進んだものを。

昼前、佳澄からスクリーンショットが届いた。

佳澄

昨日、教えていただいた場所の写真を見ていたんですが、夕方の光って、少し難しそうですね。

恒一

そうですね。

でも、佳澄さんなら暗めの写真も合いそうな気がします。

佳澄

私に、ですか。

恒一

はい。

明るすぎる写真より、少し落ち着いた雰囲気の方が合いそうです。

佳澄

そんなふうに見えているんですね。

恒一

勝手な印象ですけど。

日曜に少し話した感じでは、そう思いました。

真由は、その文を見た瞬間、胸の奥が小さく跳ねた。

佳澄さんなら、暗めの写真も合いそうな気がします。

夫は、写真の話をしている。

けれど、その奥で佳澄本人を見ている。

明るすぎる写真より、少し落ち着いた雰囲気が出

う。

そう言えるくらいには、夫の中に佳澄の印象が残っている。

日曜に少し話した感じでは、そう思いました。

つまり夫は、日曜の佳澄を覚えている。

ただの新しい参加者としてではなく、話した時の雰囲気まで含めて。

真由は画面を閉じかけて、閉じられなかった。

さらに続きが届く。

佳澄

落ち着いて見えるなら嬉しいです。

自分では、年齢の分だけ地味に見えているのかなと思うこともあるので。

恒一

地味だなんて、ぜんぜんそんなことないですよ。

佳澄

本当ですか。

恒一

はい。

佳澄さんは、落ち着いているけど、地味とは違います。

話していると、ふと目がいくというか。

そういう意味では、かなり印象に残っています。

真由は、その一文から目を離せなかった。

ふと目がいく。

かなり印象に残っています。

夫は、佳澄を見ていた。

年齢のことを慰めているだけではない。

写真の話をしているだけでもない。

佳澄のことを、女性として見てしまっている。

地味ではない。

落ち着いているけど、印象に残る。

話していると、ふと目がいく。

それは、褒め言葉だった。

しかも、ただの親切ではなかった。

夫の中に、佳澄が女として残り始めている。

そう思った瞬間、真由の胸の奥が冷たくなった。

けれど同時に、身体の奥はじわりと熱を持った。

佳澄から、メッセージが届く。

ご主人の方から、私の印象に触れてきた。

写真の話をしているようで、もう私自身を見てい

るわ。

文字だと、思ったより男が出る。

真由は喉の奥が熱くなるのを感じた。

思ったより男が出る。

月曜の朝、佳澄が言ったことが、目の前で形になっていく。

夫は、慎重な人だ。

押しの強い人ではない。

でも、佳澄が少し女を見せた時、夫は引かなかった。

それどころか、佳澄を見ていることを、自分の言葉で少しだけ出してしまった。

午後、さらにスクリーンショットが届いた。

佳澄

そう言っただけだと、少し救われます。

年齢を重ねると、どう見られているのか気になる時があるので。

恒一

僕は、年齢だけで見る感じではないです。

その人の雰囲気の方が大きいと思います。

佳澄

恒一さんは、そういうところを見てくださいるんですね。

恒一

見ているつもりはないんですけど。

でも、話していると雰囲気は伝わる気がします。

佳澄

では、少しは伝わっているなら嬉しいです。

恒一

伝わっていますよ。

真由は、職場のトイレの個室でその画面を開いていた。

伝わっていますよ。

たった一文なのに、真由の胸を強く締めつけた。

佳澄が、自分をどう見られているのかを夫に差し出している。

夫は、それを受け止めている。

年齢だけでは見ていない。

雰囲気伝わっている。

印象に残っている。

夫は、佳澄の不安をなだめているだけではない。

佳澄という女を、見ている。

昨日までは、佳澄が夫の言葉を必要としていた。
今日は、夫の方が佳澄を女性として見始めている。

真由の胸の奥が苦しくなる。

慎重な夫が、どこかへ消えていく。
いや、消えたわけではないのかもしれない。

ただ、真由が知っている慎重さとは別の場所で、
佳澄に向かって少しずつ開いている。

夕方、佳澄から短い報告が来た。

今日は、返事の中にご主人の男が少し混ざった。

まだ本人は自覚していないと思う。

でも、私を女として見始めているわ。

真由は、その文を見て喉の奥が詰まった。

女として見始めている。

その通りだと思った。

見ればわかる。

文が少し長い。

返す時間も昨日より早い。

そして何より、夫がただ答えているだけではなく
なっている。

佳澄の雰囲気に触れ、佳澄がどう見えるかを言葉にし、佳澄の不安を自分の言葉で受け止めている。

それは、真由が予想していたより早かった。

佳澄の見立ては、もう当たり始めている。

その夜、夫は帰宅が少し遅かった。

「ごめん、ちょっと仕事が長引いた」

「大丈夫。お疲れさま」

真由はいつものように答えた。

夕食を温め直し、向かいに座る。

夫は少し疲れているように見えた。

それなのに、食事中、スマホが一度小さく震えた時、真由は反射的に夫の手元を見てしまった。

夫は画面をちらりと見ただけで、すぐ伏せた。

仕事かもしれない。

ニュース通知かもしれない。

佳澄かもしれない。

わからない。

わからないから、胸が騒いだ。

「どうかした？」

夫が聞いた。

「ううん。何でもない」

真由は首を振った。

夫はそれ以上聞かなかった。

その普通の距離が、今は苦しかった。

夫が風呂に入ったあと、真由はリビングでスマホを開いた。

佳澄から、またスクリーンショットが届いていた。

佳澄

今日は少し話しすぎてしまいましたね。

でも、いろいろ聞けて楽しかったです。

恒一

僕もです。

普段あまり話さないことなので、少し新鮮でした。

佳澄

よかった。

私ばかり聞いていたらどうしようと思っていました。

恒一

そんなことないです。

佳澄さんは聞き方が自然なので、話しやすいです。

真由は、ソファに座ったまま動けなかった。

佳澄さんは聞き方が自然なので、話しやすいです。

夫が、佳澄のことを評している。

単に親切に答えているのではない。

佳澄と話すことそのものを、心地よく感じている。

しかも、そのことを夫自身が言葉にしている。

話しやすい。

日曜の夜、食卓で夫は佳澄をそう言っていた。

その言葉が、今度は本人へ向けられている。

真由は、胸の奥が冷たくなるのを感じた。

佳澄から、スクリーンショットではないメッセージが届いた。

やっぱり、文字だと、ご主人の方からも少し出てくるわね。

真由は、画面を伏せた。

怖い。

本当に怖いと思った。

夫が自分の思っていたより早く、佳澄に向かって男を出し始めている。

まだ、露骨なものではない。

まだ、誰が見てもそうとは言えない。

けれど、真由にはわかった。

夫は、佳澄とのやり取りを終わらせたくないと思
い始めている。

佳澄に話しやすいさを感じ、佳澄に見られることを
少し心地よく感じ、佳澄へ少しずつ自分を返して
いる。

その変化が、真由の身体の奥をまた熱くした。

その夜、真由は夫が寝たあと、布団の中で静かに
自分の熱を逃がした。

声は出さなかった。

夫を起こしたくなかった。

起こしてしまえば、どうしてそんなふうになっているのか説明できない。

頭の中には、夫の声があった。

佳澄さんは、落ち着いているけど、印象に残る方だと思います。

話していると、ふと目がいくというか。

でも、その言葉を向けられているのは自分ではなかった。

佳澄だった。

終わったあと、真由はしばらくスマホを見られなかった。

見れば、また戻ってしまうと思った。

それでも数分後には、結局画面を開いた。

佳澄からの最後のメッセージが残っていた。

今日は、ご主人の方から少し近づいてきた。

思ったより早いわ。

真由はその文を見つめた。

思ったより早い。

月曜の朝、佳澄が言った言葉だった。

その言葉が、今はもう予測ではなく、現実になり始めていた。

水曜日。

朝から、真由は落ち着かなかった。

月曜は、写真の話の中に、互いの好みが少し混ざった。

火曜は、夫の方から佳澄を女性として見る言葉が混ざった。

今日はまた先に進むかもしれない。

昼前、佳澄からスクリーンショットが届いた。

佳澄

昨日はありがとうございました。

少し恥ずかしい話をしてしまった気がします。

恒一

そんなことないです。

僕が少し余計なことを言ったかもしれませんが。

佳澄

余計なことではなかったです。

むしろ、少し嬉しかったです。

恒一

それならよかったです。

佳澄

恒一さんは、会って話している時より、
文字の方が少し話しやすかったりしますか。

真由は、その一文を見た瞬間、息を止めた。

佳澄が、そこへ触れた。

月曜の朝に自分へ言ったことを、今度は夫本人へ
向けている。

次のスクリーンショットが届くまでの間が、真由に

は長く感じられた。

やがて、画面が更新される。

恒一

そうかもしれません。

会っている時は、少し考えすぎるところがあるので。

佳澄

そうなんですね。

でも、こうして話していると、そんなふうには見えません。

恒一

文字だと、一度考えてから返せるので。

その分、少し話しやすいのかもしれませんが。

佳澄

それなら、こうして話せるのは嬉しいです。

恒一

僕もです。

真由は、その最後の一文から目を離せなかった。

僕もです。

短い。

それだけの言葉。

けれど、今までの夫なら、そこまで返しただろうか。

ただ質問に答えるだけではない。

佳澄とこうして話せることが、自分にとっても嬉しいと、夫は返した。

佳澄の見立ては、完全に当たっていた。

会っている時は慎重に見える夫。

けれど、文字の中では、佳澄が少し女として寄れば、夫の方からも男が出てくる。

真由は、スマホを持つ指に力を込めた。

怖い。

でも、その怖さの中で、胸の奥は熱くなっていく。

佳澄から、メッセージが届いた。

もう十分かもしれないわね。

次に会えば、ご主人は昨日までよりずっと私を意識すると思う。

真由は、すぐには返せなかった。

次に会えば。

その言葉が、胸の奥へ沈んでいく。

まだ二人は会っていない。

でも、会わない数日のあいだに、確かに何かが整ってしまった。

夫はもう、日曜に連絡先を交換したばかりの時の夫ではない。

佳澄と話すことを楽しみ、佳澄へ自分を少し返し、佳澄と文字を交わすことで、自分でも気づかないうちに男を見せ始めている。

そして、次に二人だけで会えば。

真由は、その先を考えるのが怖かった。

けれど、考えずにはいられなかった。

昼休みが終わるころ、次のスクリーンショットが届いた。

佳澄

そういえば、駅前のギャラリーで写真展があるみたいですね。

案内を見かけました。

恒一

ああ、たぶん新しいギャラリーのやつですね。

僕も少し気になっていました。

佳澄

写真展って、どう見ればいいのかまだよくわからなくて。

ただ順番に見ていけばいいものなんじゃないかな。

恒一

難しく考えなくていいと思います。

気になる写真をゆっくり見ればいいので。

佳澄

気になる写真を、ですか。

恒一

はい。

全部ちゃんと見ようとしなくてもいいと思います。

気になるものがあれば、少し長めに見るくらいで。

佳澄

そういう見方なら、少し行ってみたいです。

真由は、画面を握りしめた。

ここで終わるのかと思った。

けれど、まだ続きがあった。

恒一

もしよかったら、一緒に行きますか。

僕も少し気になっていたので。

真由の身体の奥が、強く跳ねた。

誘った。

夫が、佳澄を誘った。

佳澄ではない。

夫の方から。

たった三日だった。

日曜に連絡先を交換して、月曜、火曜、水曜。

会っていないあいだに、文字だけでここまで来た。

月曜の朝、佳澄は言った。

文字のやり取りだと案外こちらへ返してくる気がする。

こちらから女として寄れば、ご主人の方からも男

が出てくると思う。

その通りになった。

真由が知っている慎重な夫は、もうそこにはいなかった。

少なくとも、佳澄との画面の中には。

夫は、自分から時間を差し出した。

佳澄から、すぐにスクリーンショットの続きが届く。

佳澄

ご一緒していただけるんですか。

恒一

はい。

僕でよければ。

佳澄

嬉しいです。

では、お願いしてもいいですか。

恒一

もちろんです。

金曜の夜なら少し時間あります。

真由は、息を止めたまま画面を見つめていた。

金曜の夜なら少し時間あります。

夫が、自分から差し出した時間。

佳澄に頼まれて仕方なく、ではない。

佳澄が誘ったから応じた、でもない。

自分から、一緒に行きますかと聞いた。

そして、金曜の夜を出した。

その事実が、真由の胸の奥を深く刺した。

佳澄から、スクリーンショットではないメッセージが届いた。

決まったわ。

金曜の夜、二人で写真展に行く。

真由は、その文を見つめた。

二人で。

その言葉が、胸の奥へ深く沈んでいく。

サークルの中だけでは、もうなくなった。

夫は、佳澄と二人で会う。

しかも、夫の方からその一步を踏み出した。

真由は乱れた呼吸をゆっくり整えようとした。

けれど、画面を伏せても、文字は消えなかった。

もしよかったら、一緒に行きますか。

金曜の夜なら少し時間あります。

そして、その奥にもう一つの言葉が残っていた。

二人で。

その夜、夫が眠ったあと、真由は暗い寝室で何度もそのスクリーンショットを開いた。

隣には夫がいる。

金曜の夜に佳澄と会う約束をした夫。

でも、そのことをまだ真由には話していない夫。

真由は、夫の寝息を聞きながら、画面の文字を見つめた。

もしよかったら、一緒に行きますか。

夫らしくないわけではなかった。

押しつけがましくなく、相手に逃げ道を残す言い方。

それは確かに、真由の知っている夫の言葉だった。

でも、真由の知っている夫なら、そこまで自分から踏み出しただろうか。

日曜に連絡先を交換したばかりの女と。

まだ二度しか会っていない女と。

サークルの外で、二人きりで会うことを。

真由は目を閉じた。

だめだと思った。

今夜はもう、見ない方がいい。

夫の隣で、夫が別の女に送った言葉を見ながら、
自分が何をしようとしているのか、わかっていた。

でも、画面を閉じられなかった。

もしよかったら、一緒に行きますか。

金曜の夜なら少し時間あります。

その文字を見ながら、真由は静かに崩れていった。

夫を起こさないように、息を殺す。

声を出さないように、唇を噛む。

頭の中では、何度も同じ場面が浮かんた。

金曜の夜。

駅前のギャラリー。

隣に立つ夫。

その横で、少し柔らかく笑う佳澄。

夫が、佳澄に写真の見方を教える。

佳澄が、夫の声を聞く。

夫が、佳澄の反応を見て、少しだけ表情をやわら

げる。

それを想像するだけで、真由の身体は熱を増していった。

嫌だった。

夫が佳澄と二人で会うことが。

佳澄がそこまで近づいたことが。

自分が、それを許したことが。

嫌なのに、見たい。

苦しいのに、知りたい。

真由は、夫の隣で息を乱した。

抑えていた声が、小さく漏れる。

「……いく、っ……」

終わったあと、しばらく動けなかった。

暗い部屋の中で、夫の寝息だけが聞こえている。

ごめんね。

真由は心の中で言った。

でも、その謝罪の奥で、まだ同じ言葉が消えなかった。

二人で。

木曜の朝、夫はいつもより少しだけ言いにくそうに見えた。

気のせいかもしれない。

でも、真由にはそう見えた。

朝食のあと、夫はコーヒーを飲みながら、何度かスマホを見た。

それから、少し間を置いて言った。

「金曜、少し遅くなるかも」

真由は、箸を洗う手を止めそうになった。

知っている。

けれど、知らないふりをする。

「仕事？」

夫は一瞬だけ迷ったように見えた。

ほんの一瞬だった。

「いや、写真展があってね。サークルの人たちと行くことになった」

サークルの人たち。

真由の胸の奥が冷えた。

人たち。

そう言った。

佳澄と二人で行くことを、夫は言わなかった。

完全な嘘ではない。

写真展は本当。

サークル関係の人と行くのも本当。

でも、二人で行くとは言わなかった。

言えなかったのか。

言わなかったのか。

その差が、真由にはわからなかった。

「そうなんだ」

真由は、できるだけ普通に言った。

「何時くらい？」

「そんなに遅くならないと思う。見て、少し話して
帰るくらい」

少し話して。

誰と。

その言葉が喉まで出かかった。

でも、真由は飲み込んだ。

「わかった」

夫は少し安心したように、コーヒーを飲み干した。

真由はその横顔を見ていた。

夫が自分に佳澄のことを隠した。

そう思った。

いや、隠したというほどではないのかもしれない。

夫にとっては、まだ何もやましいことではないのかもしれない。

ただ細かく説明しなかっただけ。

妻に余計な心配をかけるようなことではないと思っただけ。

それでも、真由には刺さった。

サークルの人たち。

その曖昧な言葉の中に、佳澄が隠された。

夫が家を出たあと、真由はキッチンに立ったまま、しばらく動けなかった。

水は出しっぱなしになっていた。

木曜の昼、佳澄からスクリーンショットが届いた。

佳澄

明日、少し緊張しますが、楽しみです。

恒一

僕も楽しみにしています。

そんなに構えなくても大丈夫だと思いますよ。

真由は、その二行で息を止めた。

僕も楽しみにしています。

夫が、楽しみだと言った。

昨日までは、少しずつ言葉の中にしか見えていなかったものを。

今日は、もう自分からはっきり書いている。

それは、真由が朝に聞いた、

サークルの人たちと行く

という説明よりも、ずっと生々しかった。

佳澄と二人で行くことを、夫は楽しみにしている。

真由は画面から目を離せなかった。

続けて、新たなスクリーンショットが届いた。

佳澄

ありがとうございます。

急をお願いしてしまったような形になってしまいましたけど、ご予約は大丈夫でしたか。

恒一

はい、大丈夫です。

金曜は特に予定もなかったので。

佳澄

ご家族とのご予定など、無理をさせていなければいいのですが。

恒一

家の方は大丈夫です。

少しくらい遅くなっても問題ないので。

真由は、その一文を見つめた。

家の方。

その中に、自分が入っている。

妻である自分が、夫の画面の中では「家の方」として片づけられている。

けれど、まだそこに明確な嘘はない。

ただ、少し曖昧にしているだけ。

妻とは言わない。

真由とも言わない。

予定があるかどうか、細かくは言わない。

ただ、家の方は大丈夫。

その言い方が、真由には妙に引っかかった。

夫にとっては、何でもない返事なのかもしれない。

佳澄を安心させるために、余計なことを言わず、

穏やかに答えただけなのかもしれない。

でも、真由にはもう、その曖昧さが苦しかった。

佳澄から、スクリーンショットではないメッセージが届いた。

まだ、ご主人は逃がしているわね。

真由は、その文を見つめた。

続けて届く。

家の方は大丈夫。

そう言えば、嘘ではない。

でも、あなたのことをはっきり出してもいない。

真由は唇を噛んだ。

佳澄はやはり、そこを見ている。

恒一が何を言ったかだけではない。

何を言わなかったかを見ている。

佳澄から、また届く。

まだ自分でも、深く考えたくないのだと思う。

でも、明日二人で会えば、そこは変わるかもしれないわ。

真由は、すぐには返せなかった。

明日二人で会えば、そこは変わるかもしれない。

その言葉が、胸の奥に重く沈んだ。

夫はまだ、佳澄と二人で会うことを、自分の中で大きなこととして扱っていないのかもしれない。

ただ写真展に行く。

サークルで知り合った人に少し付き合う。

家の方は大丈夫。

それくらいの意識でいるのかもしれない。

けれど、真由はもう知っている。

夫は、佳澄をただのサークル仲間として見ているだけではない。

火曜日には、佳澄のことを
落ち着いているけど、印象に残る。
話していると、ふと目がいく。
そう言っていた。

水曜日には、佳澄と文字で話せることを
僕もです。
と返していた。

そして、自分から写真展へ誘った。

その夫が、明日、佳澄と二人きりで会う。
会ってしまえば、今まで文字の中だけにあったもの
が、実際の距離になる。

真由は画面を見つめたまま、小さく息を吐いた。

怖い。

でも、その怖さの底には、もう熱があった。

その夜、夫はいつもと変わらない顔で帰ってきた。

「ただいま」

「おかえり」

真由はいつも通りに答えた。

夫は手を洗い、着替え、リビングで少しテレビを見た。

真由は夕食を並べた。

何も変わらない木曜の夜だった。

でも、真由の中では朝の言葉が何度も戻ってきた。

サークルの人たちと。

そして、昼間のスクリーンショット。

家の方は大丈夫です。

少しくらい遅くなっても問題ないので。

家の方。

その言葉が、真由の中に残っていた。

妻でもなく。

真由でもなく。

家の方。

夫に悪気はないのかもしれない。

けれど、その言い方の中で、自分は夫と佳澄の会話の外側に置かれていた。

真由は食卓の向かいにいる夫を見た。

この人は、明日の夜、佳澄と二人で写真展に行く。
そのことを、自分には曖昧にしている。
そして佳澄には、家の方は大丈夫だと伝えている。

「明日、何時くらいに帰るの？」

真由は、何でもない声を作って聞いた。
夫は箸を止めた。

「うーん、八時半とか九時くらいかな。そんなには
遅くならないと思う」

「そうなんだ」

真由はそれ以上は聞かなかった。

本当は聞きたかった。

誰と行くの。

本当にサークルの人たちなの。

誰かと二人じゃないの。

でも、聞けなかった。

聞けば、夫はまた何かを選んで答えるかもしれない。
い。

本当のことを言うかもしれない。

あるいは、また少しだけ曖昧にするかもしれない。

どちらも怖かった。

夫は何も知らない顔で食事続けている。

真由は、その手元を見つめた。

その手が、明日、佳澄の隣でパンフレットを持つのかもしれない。

展示の前で、写真を指し示すのかもしれない。

佳澄が少し迷えば、自然に隣で足を止めるのかもしれない。

想像が勝手に広がっていく。

止めたい。

でも、止まらない。

その夜、夫が眠ったあと、真由はスマホを開いた。

今日のスクリーンショットをもう一度見る。

明日、少し緊張しますが、楽しみです。

僕も楽しみにしています。

家の方は大丈夫です。

少しくらい遅くなっても問題ないので。

一つ一つの言葉が、ゆっくり刺さった。

家の方は大丈夫。

その「家の方」にいる妻は、今、夫の隣で眠れずにいる。

夫が佳澄と二人で会うことを知っている。

夫が自分に全部を言わなかったことも知っている。

けれど、夫は何も知らない。

自分が佳澄と二人で会うこと。

そのことを妻に細かく話していないこと。

それが何を意味するのか。

まだ夫は、深く考えていないのかもしれない。

ただ写真展に行くだけ。

サークルで知り合った人に、自分から一緒に行こうと声をかけただけ。

家の方は大丈夫。

その程度のことだと、自分に言い聞かせているのかもしれない。

でも、真由にはもう、その程度ではなかった。

夫が佳澄に向けた「楽しみ」。

佳澄が夫に見せた「緊張」。

夫が佳澄へ返した「家の方」。

その全部が、絡まり合って、真由の中でほどけなくなっていた。

明日、夫は佳澄と二人で会う。

真由はその事実を、何度も胸の中で繰り返した。

苦しい。

そう思った。

でも、その苦しさの底に、また熱があった。

真由はスマホを閉じた。

閉じても、明日は来る。

夫は佳澄と会う。

佳澄からは、きっと報告が来る。

その報告を、自分は待ってしまう。

真由は目を閉じた。

眠れないまま、金曜の夜を想像した。

駅前のギャラリー。

隣に立つ夫。

夫を見上げる佳澄。

そして、そこにいない自分。

いないのに、すべてを見たいと思っている自分。

真由は暗闇の中で、静かに息を吐いた。

もう戻れない。

その言葉は、昨夜よりもはっきりしていた。

第 5 話

触れた指

金曜の朝、夫はいつも通りだった。

朝食を食べ、コーヒーを飲み、スマホで天気を確認している。

真由は向かいに座りながら、夫の指先を見ていた。

箸を持つ手。

カップを取る手。

スマホの画面を軽く払う手。

その手が、今夜、佳澄の隣でパンフレットを持つかもしれない。

展示の写真を指し示すかもしれない。

佳澄に向かって、静かな声で何かを説明するかもしれない。

そう考えるだけで、胸の奥が落ち着かなかった。

「今日、少し遅くなると思う」

夫が、思い出したように言った。

「写真展？」

「うん。駅前のギャラリー。サークルの人たちと」

サークルの人たち。

また、その言い方だった。

真由は湯気の立つ味噌汁を見つめながら、ゆっくりうなずいた。

「わかった」

夫はそれ以上、何も言わなかった。

佳澄の名前を出すのか。

二人で行くと言うのか。

少しだけ待った。

けれど、夫は何も言わなかった。

真由はその横顔を見ながら、胸の奥が冷えていくのを感じた。

夫が会う相手は、佳澄だ。

二人で行く。

しかも、最初に誘ったのは夫の方だった。

もしよかったら、一緒に行きますか。

僕も少し気になっていたのです。

その言葉を、真由はもう見ている。

なのに夫は、妻には言わない。

完全な嘘ではない。

写真展は本当。

サークルで知り合った人と行くのも本当。

でも、全部ではない。

女と二人で会うこと。

自分から誘ったこと。

その夜を少し楽しみにしていること。

そこは言わない。

その曖昧さが、真由にはもう十分に痛かった。

夫は何も知らないまま、いつも通り出勤の支度をした。

玄関で靴を履き、振り返る。

「じゃあ、行ってくる」

「行ってらっしゃい」

ドアが閉まる。

真由はその場に立ったまま、しばらく動けなかった。

今夜、夫は佳澄と会う。

サークルではない場所で。

他の人たちの中ではなく、二人で。

それを止めることもできたはずだった。

昨日の夜でも。

今朝でも。

「本当にサークルの人たち？」と聞けばよかった。

「誰と行くの？」と聞けばよかった。

「誰かと二人なの？」と聞けばよかった。

けれど、聞かなかった。

聞かなかったのは、夫を信じたかったからなのか。

それとも、見たかったからなのか。

真由にはもう、自分でもわからなかった。

昼過ぎ、佳澄からメッセージが来た。

今日は、こちらから無理に押す必要はないと思う。

真由は、その一文を見つめた。

続けて届く。

この数日の文字のやり取りで、ご主人の中にはもう少し準備ができている。

今日見るのは、実際に二人きりで会った時に、その男の部分がどこまで出るか。

私は、少し女としてそこにいるだけでいいと思う。

真由は、何度も読み返した。

少し女としてそこにいるだけ。

それが、かえって怖かった。

強く迫るわけではない。

わざとらしく誘うわけでもない。

ただ、夫の前に女として座る。

それだけで、夫の中から何かが出てくるかもしれない。

LINE で少しずつ育ったものが、実際に向かい合った瞬間に形を持つかもしれない。

真由は返信欄に指を置いた。

もし、夫が男の部分を見せてきたら、どうしますか。

送信済み。

すぐに既読がついた。

それなら、私も女として受けていくわ。

真由は、その文を見つめたまま動けなかった。

女として受けていく。

その言葉だけで、胸の奥が冷たくなる。

けれど、佳澄の返事はそこで終わらなかった。

ただ、そうなれば本当に一気に進むかもしれない。
ご主人が自分でも思っていなかったところまで、前
に出てくるかもしれないわ。

少し間を置いて、もう一通届く。

それでも、いいの？

真由は、画面を握る手に力を込めた。

それでも、いいの。

佳澄は、ただ許可を取っているのではなかった。

ここから先に進めば、夫が自分の知っている夫ではいられなくなるかもしれない。

佳澄が女として受ければ、夫も男として返してしまふかもしれない。

その責任を、真由に選ばせている。

怖かった。

今なら、まだ戻れるのかもしれない。

佳澄に、今日はそこまでしないでください、と言えればいい。

写真展を見て、少し話して、それで終わらせてもらえればいい。

けれど、真由の指は動かなかった。

見たい。

夫が、佳澄の前でどこまで男になるのか。

佳澄がそれを女として受けた時、二人のあいだに

何が生まれるのか。

見たいと思ってしまった。

真由は、震える指で打った。

お願いします。

送ったあと、胸の奥がひどく冷えた。

自分で、また一つ先へ進ませた。

それなのに、その冷たさの奥で、身体はもう熱くなり始めていた。

夕方が近づくにつれ、真由は何度も時計を見た。

夫はもう会社を出ただろうか。

佳澄はもう駅前に着いているだろうか。

二人は、どこで待ち合わせるのだろうか。

真由には何も見えない。

なのに、全部が頭の中に浮かんでくる。

駅前の小さな広場。

仕事帰りの人たち。

少し薄暗くなった空。

その中で、夫が佳澄を見つける。

佳澄はどんな服で行くのだろう。

派手ではないはずだ。

若い女のような強さではなく、落ち着いた、でも前より少しやわらかい服。

夫がすぐには女として見たと自覚しないくらいの、静かな違い。

夕方、佳澄から一度だけメッセージが来た。

着いたわ。

今日は少し明るいグレーにした。

近くで見た時に、顔色が沈まないように。

真由は画面を見つめた。

佳澄はもう、夫にどう見えるかを考えて服を選んでいる。

自分がそう頼んだのだ。

お願いします。

そう送った。

あの言葉の結果として、佳澄は夫の前に立つ準備をしている。

続けて短く届いた。

ご主人が来たら、しばらく連絡はしない。

終わったら話すわ。

真由は、その文を読み、妙な現実感に胸を押された。

そうだ。

夫と佳澄が二人でいる間、佳澄は真由に連絡などできない。

展示を見ている最中に、真由へ逐一報告するわけがない。

喫茶店に入ったとしても、夫の目の前で真由へメッセージを送ることはできない。

だから、これからしばらく真由には何も見えない。
自分が見たいと言ったのに。

その結果、今この時間は見えない。

その見えなさが、急に怖くなった。

真由は返信した。

わかりました。

それだけだった。

既読がついたあと、佳澄からの連絡は途切れた。

それからの時間は、長かった。

真由は仕事を終え、家へ戻った。

夫は帰ってから軽く食べるかもしれないと言っていた。

いつものように急いで準備する必要ななかった。

それでも、真由はキッチンに立った。

何かをしていないと、じっと待つだけになってしまう。

包丁を持ち、野菜を切り、味噌汁を温める。

いつもの動作をしている間も、頭の中ではずっと夫と佳澄のことを考えていた。

今、二人は並んで歩いているのだろうか。

展示室に入ったのだろうか。

夫はパンフレットを見ているのだろうか。

佳澄は夫の隣で、少し緊張した顔をしているのだろうか。

真由にはわからない。

わからないまま、時間だけが進んでいく。

見たいと言ったのは自分だった。

けれど、本当に見えているわけではない。

見えているのは、あとから送られてくる佳澄の言葉だけ。

そして今は、その言葉すらない。

夫と佳澄は、真由の知らない時間を過ごしている。

その事実が、真由をじわじわと追い詰めた。

八時を過ぎても、夫から連絡は来なかった。

帰りが遅くなることは聞いている。

写真展を見て、少し話せば、そのくらいの時間にはなる。

そう頭ではわかっている。

でも、スマホが鳴らないたびに、胸の奥がざわついた。

夫は今、何をしているのだろう。

佳澄とまだ一緒にいるのだろうか。

話しているのだろうか。

笑っているのだろうか。

佳澄は、どこまで踏み込んだのだろう。

真由は、何度もスマホを見た。

何も来ていない。

それが、余計に苦しかった。

夫が帰ってきたのは、九時少し前だった。

「ただいま」

いつもの声だった。

真由はリビングから立ち上がった。

「おかえり。遅かったね」

「うん。思ったよりゆっくり見てた」

普通だった。

あまりにも普通だった。

佳澄と二人で写真展を見ていた人には見えなかった。

まして、その場で何かが起きたようには見えなかった。

「どうだった？」

「よかったよ。小さいけど、見やすかった」

夫は靴を脱ぎながら、鞆を置いた。

真由はその横顔を見る。

そこに、何かが残っているのか知りたかった。

けれど、見てもわからない。

「サークルの人たちは？」

真由は、つい聞いていた。

夫の表情が、ほんの少しだけ動いた。

「え？」

「写真展。サークルの人たちと行ったんでしょ」

夫は一瞬だけ間を置いた。

それから、何でもないことのように笑った。

「うん。みんな、それなりに楽しんでたよ」

真由は、胸の奥が冷たくなるのを感じた。

みんな。

夫は、そう言った。

本当は佳澄と二人だったはずなのに。

スクリーンショットの中では、ほかの誰かが来る流れなど一度もなかった。

夫が佳澄を誘い、金曜の夜を差し出し、佳澄がそれを受けた。

それだけだった。

なのに、夫は今、目の前で「みんな」と言った。

「そうなんだ」

真由は、それだけ返した。

声が震えなかったか、自分ではわからなかった。

夫はそれ以上、詳しく話さなかった。

それがまた、真由には痛かった。

もし本当に何もなかったのなら、もっと普通に話せるはずだった。

いつもの夫なら話しているはずだった。

誰が来ていたとか。

どんな写真があったとか。

誰が何を言ったとか。

そんな何でもない話が、自然に出てもいいはずだった。

でも夫は、出さなかった。

みんな。

その一言だけで、話を通り過ぎようとしている。

夫は、佳澄と二人で過ごした時間に、妻の前で別の名前をつけた。

嘘だ。

そう思った。

少なくとも、真由が知っている限りでは。

夫は、佳澄と二人で会った。

自分から誘い、二人で写真展に行き、そのあとも時間を過ごした。

それなのに今、何もなかったように、複数人で行った話にしている。

ただ余計な心配をかけたくなかっただけなのかもしれない。

まだ自分でも、そこにやましさがあると認めたくないだけなのかもしれない。

でも、真由にはもうわかってしまった。

夫は、隠した。

佳澄と二人だったことを。

そして、隠そうとした時点で、夫の中でもそれはもう、ただの写真展ではなくなっている。

夜、夫はすぐに眠った。

真由はしばらく目を閉じていたが、眠れなかった。
隣には夫がいる。

今夜、佳澄と二人で会った夫。

でも、真由には「みんな、それなりに楽しんだよ」
と言った夫。

何もなかったように風呂に入り、何もなかったよ
うに布団に入った夫。

真由は、暗い天井を見つめていた。

スマホが震えた。

心臓が跳ねた。

佳澄からだった。

ここから、今日の話を話すわ。

あなたが思っているより、たぶん進んだ。

真由はスマホを握り直した。

もう十分だった。

そう思った。

夫が帰ってきた時の顔。

「みんな」とごまかした声。

それだけで、胸の奥はもう乱れていた。

けれど、佳澄の報告はまだ始まったばかりだった。

展示では、ご主人はずっと普通だった。

丁寧で、穏やかで、距離を間違えない人。

真由は画面を見つめた。

普通だった。

それは夫の帰宅した様子と同じだった。

でも、続きが届く。

でも、サークルの時より距離は近かった。

写真の前で私が聞くと、横に来て説明してくれた。

声を少し落とすのね。近くで聞くと、思っていたより落ち着く声だった。

真由は唇を噛んだ。

佳澄が、夫の声を近くで聞いている。

夫の説明そのものより、その距離が刺さった。

展示の前で、二人が肩を並べる。

周囲には他の客もいる。

けれど、写真を見るために自然に距離が近づく。

夫は声を少し落とす。

佳澄はそれを横で聞く。

夫の声。

真由が毎日聞いている声。

朝に「行ってきます」と言う声。

夜に「疲れた」と言う声。

ベッドの中で、真由の名前を呼ぶ声。

その声を、佳澄が「落ち着く声」として受け取っている。

私が少し近づいても、ご主人は下がらなかった。

展示を見る距離としては自然。

でも、サークルの時より近い。

真由は目を閉じた。

サークルの時より近い。

まだ、触れてはいない。

まだ、何もしていない。

それでも、距離が近くなっている。

佳澄は何が起きたかだけではなく、何が変わったかを伝えてくる。

その報告の仕方が、真由を逃がさなかった。

続けて届いた。

展示を出たあと、ご主人の方から「少し休めますか」と言ってくれた。

正確には、私が少し迷うようにした。

このまま帰るには少し名残惜しい、でも自分から誘うほどではない、という顔をした。

ご主人は、それを拾ったわ。

真由は、画面を握る手に力を込めた。

夫から。

夫が、時間を延ばした。

もちろん、ただの気遣いかもしれない。

展示会を歩いて、佳澄が少し疲れたように見えたのかもしれない。

年上の女性だから、夫は休ませようとしただけなのかもしれない。

それでも、夫から言った。

少し休めますか。

佳澄はうまい。

夫が自分で誘った形にしている。

でも、その手前に佳澄が隙を置いている。

夫は、それを拾った。

その事実が真由を苦しくさせた。

夫は佳澄の表情を見ていた。

佳澄が少し迷うようにしたことに気づいた。

そして、休むことを提案した。

夫の優しさが、佳澄の置いた隙に触れている。

近くのカフェに入った。

向かいではなく、斜めに座ったわ。

正面より、少し話しやすいから。

真由はその文を見て、テーブルの配置を想像した。

向かい合うより、斜め。

距離が近すぎず、遠すぎない。

視線を合わせても逃がしても自然な位置。

佳澄は、その位置まで考えていたのだろう。

考えていたのだ。

そして真由は、それを止めなかった。

報告は、少し間を置いてから続いた。

カフェでは、少し踏み込んだ話をした。

私が独身だと言ったわ。

真由は息を止めた。

独身。

佳澄が、その言葉を夫に渡した。

五十二歳。

独身。

夫の目の前に座っている女。

こだわって独身でいるつもりはない。

でも、この年齢になると、今さら誰かと新しく関係

を作ることなんて、あまり考えなくなる。
そう言ったの。

真由は画面を見つめる。

佳澄が、弱さを見せている。

年齢。

独身。

女として見られることへの不安。

それは若い女の媚びではなかった。

守ってほしいという露骨な甘えでもなかった。

けれど、夫のような男には効く。

誠実で、穏やかで、相手を急がせない男には。

佳澄から次が届く。

ご主人は、少し驚いたように私を見た。

それから、こう言った。

「そうなんですね。すみません、勝手にご家庭がある方だと思っていました」

私は笑って、

「そう見えますか」と聞いたわ。

ご主人は少し困ったように笑って、

「落ち着いていらっしゃるの」

と答えた。

真由は、その一文で胸の奥が小さく疼くのを感じた。

落ち着いていらっしゃる。

夫らしい言葉だった。

失礼にならないように選んだ、穏やかな言い方。

けれど、佳澄はそこで少しだけ踏み込んでいる。

私が、

「落ち着いているというのは、女としてはあまり褒め言葉ではないかもしれませんね」と言ったの。

ご主人は、すぐに首を振った。

「そんなつもりで言ったんじゃないです」

少し慌てていたわ。

真由は、スマホを握る手に力を込めた。

夫が、佳澄を傷つけないようにしている。

ただのサークル仲間としてではなく、目の前の女の気持ちを確認めながら言葉を選んでいる。

そこで、ご主人も自分のことを話したわ。

「僕は結婚しています。妻がいます」

ちゃんと、そう言った。

真由は、息を止めた。

夫が、自分の存在を佳澄に告げた。

妻がいる。

結婚している。

当然のことはずだった。

けれど、今このやり取りの中で読むと、妙に胸に刺さった。

佳澄は、その夫の言葉を受け止めている。

私は、

「そうですね。落ち着いていて、奥さまを大事にされていそうな方だと思いました」

と言った。

ご主人は少し照れたように笑って、
「そんなに立派なものではないです」
と答えた。

私は、
「でも、安心しました」
と言った。

ご主人が、
「安心？」
と聞いた。

私は、こう答えた。

「既婚の方だとわかると、こちらも変に期待しなくて済みますから」

真由は、画面から目を離せなかった。

変に期待しなくて済む。

それは、引いた言葉のようでいて、逆に夫へ何かを渡している言葉だった。

期待する可能性がある。

でも、あなたは既婚者だから、それを自分で抑える。

佳澄はそういう形で、自分が夫を男として見ている可能性を、ほんの少しだけ置いたのだ。

ご主人は、そこで少し黙った。

私は、すぐに話を軽く戻したわ。

「この年齢になると、独身といっても、もう女として見られることから少し外れてしまったような気がするんです」

ご主人は、少しだけ真面目な顔になった。

「そんなことはないと思います」

私が、

「そんなふうに言ってくださるんですね」

と言ったら、ご主人はすぐに答えた。

「本当にそう思います」

真由は、その一文を見つめた。

本当にそう思います。

夫は、軽く流さなかった。

年齢を重ねた独身の女の弱さを、ただの社交辞令として片づけなかった。

佳澄から、さらに続く。

私は少し笑って、

「この年齢になると、そんなふうに言ってもらえるだ

けで、少し救われます」
と言ったの。

ご主人は、困ったように笑った。
でも、目は逸らさなかった。
「救われるなんて、大げさですよ」

私は、首を振った。

「大げさではないんです。五十二歳で、独身で、
誰かに女として見られることなんて、もうあまり考
えなくなりますから」

ご主人は、少し黙った。

その沈黙を、真由は画面の向こうに想像した。

佳澄は、ただ寂しい女を演じているわけではない。
自分がまだ女として見えるのか。

その問いを、少しずつ夫の前に置いている。

そして夫は、そこから逃げていない。

私は、少しだけ間を置いて聞いた。

「では、私はまだ、女性として見えるということですか」

真由は、画面を見つめたまま固まった。

女性として。

佳澄は、そこまで聞いた。

でも、唐突ではなかった。

独身であること。

五十二歳であること。

女として見られることから外れてしまった気がする
こと。

そして、夫がそれを否定したこと。

その流れの先に置かれた問いだった。

ご主人は少し黙った。

でも、目を逸らさなかったわ。

私は、そこで何も急かさなかった。

ご主人は、少し困ったように笑ってから、こう言った。
「もちろんです。佳澄さんは、すごく魅力的な女性
だと思います」

真由は、息を止めた。

すごく魅力的な女性。

夫が、佳澄にそう言った。

五十二歳の佳澄に。

自分より十一歳年上の女に。

けれど、すぐに思った。

これは、お世辞だろう。

恒一は優しい。

目の前で年齢や独身の不安を口にした相手を、傷つけるようなことは言わない。

その場をやわらかくするために、少し強めの言葉を選んだだけ。

そう思おうとした。

佳澄から、次の文が届いた。

私が、

「そんなことを言われると、お世辞でも嬉しいです」

と言ったの。

ご主人は、すぐに首を振った。

「いえ。全然、お世辞なんかじゃないですよ」

真由の身体の奥が、強く震えた。

お世辞なんかじゃない。

夫は、そこで逃げなかった。

佳澄が「お世辞でも嬉しい」と受け取ったなら、そのまゝ曖昧に笑って終わらせることもできた。

なのに夫は、わざわざ否定した。

佳澄が魅力的だという言葉を、自分で残した。

私は、少し笑って言った。

「そういうことを、そんな顔で言わない方がいいですよ」

ご主人は、少し戸惑ったように私を見た。

「そんな顔、ですか」

「はい」

私はそう答えた。

「本当にそう思っているような顔です」

ご主人は、そこで言葉に詰まった。

私は、続けた。

「そんなふうに言われたら、本当に勘違いしてしま
います」

ご主人は、そこで黙った。

ほんの短い沈黙だった。

でも、私はその沈黙でわかった。

ご主人は、すぐに否定しなかった。

「勘違い、ですか」

そう言って、少し視線を伏せた。

私は何も急かさなかった。

ご主人は、しばらくしてから低い声で言った。

「.....勘違い、ということではないと思います」

真由は、その一文で息を止めた。

勘違いということではない。

それは、逃げではなかった。

佳澄が魅力的だと受け取ることを、夫は否定しなかった。

むしろ、それが完全な勘違いではないと認めた。

私が、

「では、少しはそういうふうに見てくださっているんですか」

と聞いた。

ご主人はすぐには答えなかった。

でも、否定もしなかった。

真由の呼吸が浅くなる。

少しして、ご主人は言った。

「.....意識しない方が、難しいと思います」

「こうして二人で向かい合っていると」

真由は、スマホを持つ手に力を込めた。

意識しない方が、難しい。

夫が、そう言った。

佳澄に向かって。

二人きりのカフェで。

写真の相談相手としてではない。

サークルの知人としてでもない。

目の前にいる女として。

私が、

「それは、女性として、ですか」

と聞いた。

ご主人は小さく息を吐いて、

「.....そうですね」

と答えた。

真由は、そこで画面を伏せた。

見られなかった。

でも、すぐにまた開いた。

そうですね。

夫が認めた。

佳澄を女性として意識していると。

好きだと言ったわけではない。

関係を望んだわけでもない。

けれど、もう十分だった。

佳澄は、夫の中に女として入った。

真由はそう思った。

報告は、さらに続いた。

そこで私が、少し笑って言ったの。

「恒一さんみたいな人がいてくれればいいですけど。

もちろん、独身男性で」

真由は息を止めた。

恒一さんみたいな人。

それは夫に向けた言葉だった。

逃げ道はある。

独身男性で、と付け足している。

でも、夫に向けた言葉だった。

ご主人は、

「僕みたいな、ですか」

と聞き返した。

私は、

「はい。今日みたいに、隣にいても無理をしなくて
いい人です」

と答えた。

真由は目を閉じた。

佳澄は、夫の良さを夫に返している。

強くも派手でもない。

でも、人を安心させる。

そばにいる相手を急がせない。

真由がずっと好きだったところ。

そこを、佳澄が言葉にしている。

ご主人は困ったように笑った。

でも、嫌そうではなかった。

「そんなふうに言われたら、男として嬉しいですよ」

男として嬉しい。

真由は、その言葉で息が止まった。

夫が、自分を男として置いた。

夫としてではない。

写真を教える人としてでもない。

サークルの知人としてでもない。

男として。

佳澄の言葉を、男として受け取った。

私が、「男として、ですか」と聞いた。

ご主人は少しだけ言葉に詰まった。

でも、否定はしなかった。

「.....はい」

「そう言われて、何も感じないわけではないです」
と答えた。

真由の身体の奥が、強く震えた。

何も感じないわけではない。

夫が、そう言った。

佳澄に向かって。

二人きりのカフェで。

女としての言葉を向けられて。

何も感じないわけではない、と。

夫は自分から口説いたわけではない。

けれど、佳澄から差し出されたものを受け取った。

その答えには、夫自身の気持ちに乗っていた。

真由には、そう見えた。

佳澄から続けて届いた。

ここで少し、目が変わった。

ご主人はたぶん、私を女として見たわ。

真由は、その文を見つめた。

夫も男なのだ。

誠実で、穏やかで、押しが強くなくても。

妻を大事にしているも。

二人きりのカフェで、目の前の女から「私はまだ女として見えますか」と聞かれれば、何も感じないわけではない。

佳澄は、その問いをただの確認として投げたのではない。

その先を、夫の中に想像させるために置いたのだ。

夫は、それに気づいたのだろうか。

気づいていなかったかもしれない。

けれど、気づかないまま答えた言葉の中に、確かに男としての熱が混ざっていた。

真由には、そう思えた。

少し間を置いて、佳澄からまた届いた。

そのあと、少しだけ私から聞いた。

「奥さまには、私と二人で会っているとは言っていないんですよね」

真由は、画面を見つめたまま息を止めた。

佳澄が、そこを突いた。

夫が真由に隠している場所を。

報告は続く。

ご主人は、一瞬だけ言葉に詰まった。

ほんの短い間だったけれど、私はわかった。

そこには、迷いがあった。

真由はスマホを握る手に力を込めた。

夫が迷った。

その一瞬を、佳澄は見ていた。

ご主人は少し視線を落としてから、言った。
「妻には、サークルの人たちと写真展に行くって言っています」

真由は、その一文で胸の奥が冷たくなった。

サークルの人たち。

自分が聞いたのと同じ言葉。

佳澄と二人で会うことを、夫は妻には言わなかった。

しかも、それを佳澄には話している。

私が、「女性と二人だとは、言いにくかったんですか」と聞いた。

ご主人はすぐには答えなかった。

それから、少し困ったように笑って、

「言いにくいですよ」

「女性と二人で会うなんて言ったら、やっぱり心配するでしょうし」

と言った。

私は、そこで少しだけ頷いた。

「そうですね。なんでもない、ただのサークル仲間だとしても、奥さまからしたら心配になりますよね」

ご主人は、そこで黙った。

真由は、その沈黙を想像して、スマホを握る手に

力を込めた。

なんでもない、ただのサークル仲間。

佳澄は、わざとそう言ったのだ。

夫がそこに引っかかるかどうかを見るために。

少しして、ご主人は低く言った。

「.....いや、そこが少し違うんです」

真由は、画面から目を離せなかった。

違う。

夫は、そう言った。

佳澄からの報告は続く。

私は、何も急かさなかった。

ただ、「違う、というと？」とだけ聞いた。

ご主人は、しばらくカップを見ていた。

それから、ゆっくり言った。

「なんでもない、ただのサークル仲間なら」

「たぶん、女性と二人だったとしても妻に言うと思うんです」

「でも、佳澄さんのことは言えませんでした」

真由は、息を止めた。

胸の奥が、冷たく沈んだ。

佳澄さんのことは言えませんでした。

夫が、自分でそう言った。

佳澄は、ただの女性ではない。

ただのサークル仲間ではない。

妻に言える相手ではなくなっている。

ご主人は、少し慌てたように続けた。

「いや、すみません」

「急にこんなことを言って」

私は何も言わずに待った。

ご主人は、もう一度視線を落としてから、低い声で言った。

「でも、正直に言うと、そういうことです」

真由は、その一文を何度も読んだ。

正直に言うと、そういうことです。

夫は、認めた。

佳澄と二人で会うことを、妻に言えなかった理由。

それは、余計な心配をかけたくなかったからだけではない。

佳澄が、もうただのサークル仲間ではなかったからだ。

佳澄から、続けて届いた。

ご主人は自分で言ったわ。

私が特別だとまでは言っていない。

でも、ただのサークル仲間ではないと認めた。

真由は、その文を見つめた。

ただのサークル仲間ではない。

その言葉が、胸の奥で熱を持った。

夫は、佳澄を妻に言える相手として扱えなかった。

それはもう、夫の中で佳澄が別の場所に置かれ始

めているということだった。

しばらく報告が途切れた。

真由は、隣の夫の寝息を聞きながら、スマホを握っていた。

夫は今、すぐ隣にいる。

何も知らない顔で眠っている。

けれど、その夫は数時間前、佳澄と向かい合い、年齢の話を聞き、独身の話を聞き、女として魅力的だと言い、二人で向かい合っていると意識しない方が難しいと答えた。

男として嬉しいと言った。

何も感じないわけではないと言った。

そして、佳澄のことは妻に言えなかったと認めた。

なんでもない、ただのサークル仲間なら言える。

でも、佳澄のことは言えなかった。

その夫が今、すぐ隣で眠っている。

何も知らない顔で。

真由は、もう終わった時間を読んでいる。

自分がいなかった時間を。

佳澄の言葉で。

それが苦しかった。

リアルタイムで見ていたわけではない。

だからこそ、想像が膨らむ。

佳澄の表情。

夫の間。

言葉を選ぶ時間。

目を逸らさなかった数秒。

すべてが、真由の頭の中で勝手に生々しくなっていく。

スマホがまた震えた。

佳澄からだった。

最後に、ひとつだけ。

真由は息を止めた。

続けて届く。

カップを取る時、指が触れた。

真由は、その一文を見つめた。

指が触れた。

それだけで、身体の奥が冷えた。

いや、熱くなった。

どちらかわからない。

佳澄から、また届く。

私がすぐ離さなかった。

ご主人も、すぐには離さなかった。

真由はスマホを握る手に力を入れた。

佳澄が離さなかった。

夫も、離さなかった。

真由は震える指で返信した。

夫は、気づかなかっただけでは。

すぐに既読がついた。

返事は少し間を置いて届いた。

違うわ。

気づいていなかった、ということはないと思う。

ほんの一瞬なら、そう言えたかもしれない。

でも、あれは一瞬ではなかった。

私が離さなかった。

ご主人も、それをわかっていた。

わかっていて、すぐには離さなかったの。

真由は、息を止めた。

わかっていて、すぐには離さなかった。

その一文が、胸の奥へ沈んでいった。

偶然ではない。

少なくとも佳澄は、そう見ている。

夫は気づいた。

佳澄の指が触れたことに。

佳澄が離さずにいたことに。

そして、自分もそれを許していたことに。

それでも夫は、すぐには手を引かなかった。

真由の胸の奥が冷たくなる。

怖かった。

夫がそこまでしていたことが怖い。

けれど同時に、その数秒を想像しただけで、身体
の奥がじわりと熱を持った。

佳澄の指に触れた夫。

気づいていながら、離さなかった夫。

その夫が、今、自分の隣で何も知らない顔をして

眠っている。

その事実が、真由を深く沈ませた。

不安の底へ。

そして、そこから逃げられない熱の中へ。

今夜、佳澄の指に触れて離さなかったその指で、
家のドアを開け、バッグを置き、グラスを持ち、布
団を引き上げた。

その指が、今、真由のすぐ近くにある。

そのことを考えた瞬間、胸の奥が強く熱を持った。

佳澄から、さらにメッセージが届いた。

やっぱり、二人きりで会うと男は変わるわね。
押しが強いタイプではなくても。

真由は、息を止めた。

ご主人は、展示を見ている間はまだ抑えていたと
思う。

写真を見て、説明して、距離を保っていた。
あなたが知っているご主人に近かったわ。

真由は、画面を見つめた。

あなたが知っているご主人。

その言葉に、胸が少し痛んだ。

でも、それは何もなかったという意味ではないわ。
月曜からのやり取りで、もう下地はできていた。
文字の中で少しずつ私を見て、返して、意識して
いた。だから今日、実際に二人で会った時に、思
ったより早く変わったのだと思う。

真由の喉が詰まる。

文字の中で、もう下地はできていた。

月曜。

火曜。

水曜。

木曜。

佳澄の言葉に夫が返し、佳澄の雰囲気を褒め、佳澄と話せることを嬉しいと認めた数日。

それが、今日の二人きりの時間につながっていた。

佳澄から、さらに続く。

カフェに入ってから、もう写真の相談ではなかった。私の年齢の話、独身の話、女として見られるかという話。

そこでご主人は、私をただのサークル仲間ではないと認めたわ。

真由は、スマホを持つ手に力を込めた。

ただのサークル仲間ではない。

夫が、自分でそう認めた。

佳澄は続ける。

妻に言える相手ではなくなっている。

ただの女性ではない。

そこまで言葉にした時点で、ご主人の中ではもう
線が動いている。

真由は、何も返せなかった。

そこへ、佳澄の次の文が届く。

そして、指が触れた時。

あの時の目で、私ははっきりわかった。

真由は、息を止めた。

目。

夫は、どんな目をしていただろう。

佳澄の指が触れた瞬間。

佳澄が離さなかった瞬間。

そして、自分もすぐには離さなかった瞬間。

その時、夫はどんな顔をしたのだろうか。

佳澄から、続きが届く。

ご主人は、最初は少し驚いていた。

でも、すぐに違う目になったわ。

私の指を見ていた。

ほんの数秒だけど、ちゃんと見ていた。

真由は、スマホを握る手に力を込めた。

佳澄の指を見ていた。

夫が。

その数秒のあいだに。

佳澄の指が、自分に触れていることをわかっていて。

佳澄が離さないこともわかっていて。

それでも、自分から手を引かなかった。

佳澄から、さらに届く。

たぶん、あの時、ご主人は私の指をただの指として見ていなかった。

女の指として見ていたと思う。

触れたままでいたい。

もう少し確かめたい。

そういう目だった。

真由の胸の奥が、冷たく沈んだ。

女の指。

その言葉が、妙に生々しく響いた。

夫は佳澄の指に触れた。

ただ触れただけではない。

その指を、女の身体の一部として見てしまった。

そう思った瞬間、真由の身体の奥がじわりと熱を持った。

佳澄から、最後に短く届く。

あの数秒で、ご主人の中に欲が生まれたと思う。

私に触れたい、という欲が。

真由は、画面から目を離せなかった。

私に触れたい、という欲。

夫の中に。

佳澄へ向かって。

その言葉は、真由の胸を深く刺した。

ただ話したいだけではない。

もっと知りたいだけでもない。

触れたい。

そこまで来たのだと、佳澄は見ている。

夫が本当にそう思ったのかは、真由にはわからない。

けれど、佳澄は見たのだ。

指が触れた瞬間の、夫の目を。

真由が見られなかった夫の目を。

佳澄から、さらに届く。

男の欲が育つのは早いわよ。特に、自分ではまだ大丈夫だと思っている男ほどね。

真由は、その一文を何度も読んだ。

続けて、最後の文が届いた。

ご主人の場合は、もう育ち始めていると思う。
今日、目を見てそう感じた。

真由は、画面から目を離せなかった。

もう育ち始めている。

夫の欲が。

佳澄に向かって。

真由の知っている慎重な夫は、まだ表面には残っている。

穏やかで、丁寧で、距離を間違えない夫。

けれど、その奥で、別のものが動き始めている。

佳澄をただのサークル仲間ではない女として見た。

妻には言えない相手として扱った。

触れた指を、すぐには離さなかった。

その全部が、夫の中で何かが育ち始めている証拠のように思えた。

真由は、胸の奥が冷えるのを感じた。

怖い。

おそろしく怖かった。

けれど、その怖さの底から、どうしようもない熱が広がっていく。

夫は、どんな目をしていたのだろう。

佳澄の指に触れた時。

佳澄を女として見てしまった時。

自分でもまだ認めたくない欲が、目の奥に出てしまった時。

その目を想像するだけで、真由は深く沈んでいった。

不安の中へ。

嫉妬の中へ。

そして、もう逃げられない熱の中へ。

そこで、またスマホが震えた。

佳澄から画像が届いていた。

これが、帰ってからのやり取り。

真由は息を止めた。

スクリーンショットだった。

佳澄

今日はありがとうございました。

少し踏み込んだことまで話してしまって、すみませ

ん。

恒一

いえ。

むしろ、話してくれて嬉しかったです。

佳澄

私は楽しかったです。

写真展も、その後のお茶の時間も。

恒一

僕も楽しかったです。

正直、お茶の時間の方が楽しかったです。

真由は、その一文で息を止めた。

お茶の時間の方が楽しかったです。

夫が、そう送っている。

写真展よりも。

佳澄と向かい合って話した時間の方が。

ただ親切に付き合っただけではない。

疲れたから早く帰りたいかったわけでもない。

義務でお茶をしたわけでもない。

夫は、佳澄とのお茶の時間を楽しかったと言っている。しかも、写真展よりも。

スクリーンショットは続いていた。

佳澄

本当ですか。

少し話しすぎてしまったかと思っていました。

恒一

そんなことないです。

佳澄さんと話している時間、楽しかったです。

落ち着くのに、どこか落ち着かなくて。

正直、久しぶりにドキドキしました。

真由は、スマホを握る手に力を込めた。

久しぶりにドキドキしました。

夫が、佳澄にそう送っている。

穏やかで、押しが強い夫が。

さっきまで普通の顔で帰ってきた夫が。

佳澄とのお茶の時間に、ドキドキしたと言っている。

落ち着くのに、どこか落ち着かない。

その言葉が、真由の胸の奥に深く刺さった。

安心と、女としての意識。

穏やかな会話と、その奥にある熱。

夫は、その両方を佳澄に感じている。

続きがあった。

佳澄

ドキドキ、ですか。

恒一

はい。

自分でも少し驚いています。

こういうことを言うのは変かもしれませんが、
佳澄さんのことを、もっと知りたいと思いました。

真由は、画面から目を離せなかった。

もっと知りたい。

夫が佳澄にそう言っている。

写真のことではない。

サークルのことでもない。

佳澄のことを。

佳澄という女のことを、もっと知りたいと。

さらに続く。

佳澄

そんなふうに言われたら、少し照れてしまいます。

恒一

すみません。

でも、本当にそう思いました。

佳澄

私も、恒一さんのことをもっと知りたいと思っています。

恒一

.....そんなことを言われたら、また誘ってしまいそうです。

佳澄

本当ですか。

誘ってもらえたら、嬉しいです。

恒一

では、急なんですけど。

今度の日曜、サークルのあと少し撮りに行きませんか。

佳澄

撮影、ですか。

恒一

はい。

この前話していた川沿いです。

佳澄さんに似合う場所だと思っていて。

佳澄

私に似合う場所、ですか。

恒一

はい。

落ち着いているのに、少し目を引くところがあって。

佳澄さんの雰囲気に近い気がします。

佳澄

そんなふうに言われると、少し意識してしまいます。

恒一

すみません。

でも、本当にそう思ったので。

佳澄

日曜に、そこへ連れて行ってくださるんですか。

恒一

はい。

サークルの中だけで話すより、
もう少し違う場所で一緒に過ごしてみたいと思いました。

佳澄

違う場所で、ですか。

恒一

はい。

写真を撮りながらなら、自然ですし。

それに、佳澄さんとなら、ゆっくり撮れそうな気がします。

佳澄

私と二人で、ということですよ。

恒一

.....そうなりますね。

佳澄

奥さまには、大丈夫なんですか。

恒一

サークルのあと、少し撮ってくるくらいなら。

たぶん、大丈夫です。

佳澄

少し、悪いことをしているみたいですね。

恒一

.....そうかもしれないです。

でも、佳澄さんとなら、行きたいと思ってしまいました。

真由は、そこでスマホを伏せた。

けれど、もう遅かった。

今度の日曜、サークルのあと少し撮りに行きませんか。

夫が、そう送っている。

佳澄に誘われたからではない。

流れでお茶をただけでもない。

写真展の帰りに、なんとなく時間が延びただけでもない。

佳澄は、誘ってもらえたら嬉しいと差し出した。

そして夫は、その言葉を受けて、自分から次の時間を作った。

日曜のサークルのあと。

二人で、川沿いへ撮りに行く。

それは、ただの撮影の約束に見える。

けれど、真由にはもうそうは思えなかった。

この前話していた川沿いです。

佳澄さんに似合う場所だと思っていて。

夫は、佳澄に似合う場所だと言った。

写真の話をしている。

撮影の話をしている。

でも、その奥で夫は、佳澄という女を見ている。

落ち着いているのに、少し目を引くところがあって。佳澄さんの雰囲気に近い気がします。

その言葉は、もうただの助言ではなかった。

夫が佳澄をどう見ているのか。

どんな女として受け取っているのか。

それが、静かににじんできた。

真由は、隣で眠る夫を見た。

この人が、佳澄を誘った。

さっきまで普通の顔で帰ってきて、普通に風呂に入り、普通に眠っているこの人が、佳澄に向かって、次の時間を差し出していた。

しかも夫は、ただ「また話したい」と言っただけではなかった。

サークルの中だけで話すのは、もう物足りなく感じています。

物足りない。

真由は、その言葉に胸の奥を強く掴まれた。

夫にとって、佳澄はもうサークルで少し話すだけの相手ではなくなっている。

みんながいる場所で、少し言葉を交わすだけでは足りない。

写真の話をするだけでは足りない。

偶然同じ時間にいるだけでは、もう足りない。

夫は、佳澄と二人で過ごす時間を欲しがっている。

でも、それをそのまま言うことはできない。

だから、写真という形を選んだ。

撮影なら自然に見える。

サークルの延長にも見える。

自分にも、まだ言い訳ができる。

けれど、佳澄はそこを逃さなかった。

私と二人で、ということですよね。

その問いに、夫はすぐには強く答えられなかった。

……そうなりますね。

それだけだった。

けれど真由には、その短い返事で十分だった。

夫は否定しなかった。

佳澄と二人で行くことを。

サークルの中ではなく、別の場所で時間を過ごすことを。

そして、それを自分から選んだことを。

さらに、佳澄は自分のことを出していた。

奥さまには、大丈夫なんですか。

その一言に、真由は胸の奥を刺された。

そこに自分がいる。

夫と佳澄の会話の中に。

夫が踏みとどまる理由として。

夫が少しでも罪悪感を覚える場所として。

夫は答えていた。

サークルのあと、少し撮ってくるくらいなら。

たぶん、大丈夫です。

真由は、その文を何度も読んだ。

少し撮ってくるくらいなら。

夫は、そうやって自分の中で整えている。

佳澄と二人で会うことを。

川沿いへ行くことを。

サークルのあとに、妻へ細かく言わずに時間を作ることを。

少し撮ってくるだけ。

そう言えば、まだ大丈夫に見える。

でも、本当にそれだけなら、なぜ言い切れないの
だろう。

なぜ、たぶん、なのだろう。

佳澄は、さらに言っていた。

少し、悪いことをしているみたいですね。

真由の呼吸が浅くなった。

悪いこと。

その言葉が、画面の中で静かに浮いていた。

まだ何もしていない。

ただ写真を撮りに行くだけ。

サークルのあとに少し寄り道をするだけ。

そう言い訳できるはずなのに、佳澄はそれを悪いことみたいだと言った。

そして夫は、否定しなかった。

……そうかもしれないです。

でも、佳澄さんとなら、行きたいと思ってしまいました。

真由は、そこで完全に動けなくなった。

佳澄さんとなら。

夫は、そう言った。

撮影だからではない。

川沿いだからではない。

サークルの延長だからでもない。

佳澄さんとなら。

その一言に、夫の本音がにじんでいた。

真由は、もう一度スマホを開いた。

恒一

サークルの中だけで話すより、
もう少し違う場所で一緒に過ごしてみたいと思いました。

佳澄

違う場所で、ですか。

恒一

はい。

写真を撮りながらなら、自然ですし。

それに、佳澄さんとなら、ゆっくり撮れそうな気がします。

佳澄

私と二人で、ということですよ。

恒一

.....そうなりますね。

佳澄

奥さまには、大丈夫なんですか。

恒一

サークルのあと、少し撮ってくるくらいなら。
たぶん、大丈夫です。

佳澄

少し、悪いことをしているみたいですね。

恒一

.....そうかもしれないです。

でも、佳澄さんとなら、行きたいと思ってしまいました。
た。

何度読んでも、同じだった。

夫が、佳澄と二人で過ごす時間を欲しがっている。
それをそのまま言えないから、写真という形を選

んでいる。

けれど最後には、佳澄となら行きたいと認めている。

真由は、息を整えようとした。

けれど、呼吸は浅いままだった。

嫉妬だった。

でも、それだけではなかった。

夫が自分以外の女に惹かれかけている。

その女とまた会う時間を作ろうとしている。

しかも、それを自分の意思でしている。

その事実が、真由を傷つけた。

そして同時に、真由の中の見てはいけない部分を、
深く揺らした。

日曜。

その言葉が、もうただの曜日ではなくなっていた。

二日後、夫はまた佳澄に会う。

サークルで顔を合わせる。

そして、そのあとに二人で撮影に行く。

今度は、偶然ではない。

流れでもない。

サークルの中で少し話すだけでもない。

夫が、自分から作った時間として。

佳澄から、続けてメッセージが届いた。

ご主人、もう理由を探しているわけではないと思う。

真由は、その文を見つめた。

理由を探しているわけではない。

その言葉に、胸の奥が沈んだ。

佳澄から、さらに届く。

理由はもう見つけているの。

写真。

川沿い。

サークルのあと。

どれも自然に見えるものばかり。

でも、本当に欲しいのは、たぶんそこじゃない。

真由は、画面から目を離せなかった。

本当に欲しいのは、そこじゃない。

佳澄は続ける。

ご主人は、私と二人で過ごす時間が欲しくなって

いる。まだ自分では、写真の延長だと思いたいの
でしょうけど。

真由は、隣で眠る夫の横顔を見た。

この人は、私の夫なのに。

そう思った。

でも、そのあとに別の言葉が浮かんた。

この人も、男なのだ。

真由はその言葉を打ち消せなかった。

夫が佳澄に惹かれかけている。

佳澄の言葉に喜んでいる。

次は自分から、二人で過ごす時間を作った。

その全部を知ってしまった今、真由はもう、ただ佳澄に見せられているだけではなかった。

夫自身が動き始めたところを、見てしまったのだ。

真由は、そっと横を向いた。

夫の手は、布団の上に出ていた。

無防備に、いつもの場所にある。

真由が何度も触れてきた手。

食器を持ち、カメラを持ち、真由の髪を撫でる手。

その手が、今日、佳澄の指に触れた。

一瞬ではなかった。

ただ偶然に触れて、すぐ離れたわけではない。

佳澄が離さなかった。

夫も、それに気づいていた。

そして、すぐには離さなかった。

その数秒のあいだ、夫は佳澄の指を見ていたのだという。

ただの指としてではなく、女の指として。

触れたままでいたい。

もう少し確かめたい。

そんな欲が、その目にあったのだと佳澄は言った。

真由には、その場面を見ることはできなかった。

けれど、見ていないからこそ、想像が勝手に膨らんでいく。

夫の指に触れる佳澄の指。

離れない二人の手。

その数秒の沈黙。

そして、夫の目。

それを思うだけで、真由の胸の奥がきつく締まった。

怖い。

けれど、身体の奥は、もう熱くなっていた。

真由には、もうその手が昨日までと同じものには見えなかった。

触れたいと思った。

その手に。

佳澄が触れ、夫が離さなかった手に。

そう思った自分に、真由は息を呑んだ。

最低だ。

そう思うのに、視線を外せなかった。

夫は眠っている。

何も知らない。

自分の妻が今、何を考えているのかも知らない。

真由はゆっくり手を伸ばした。

夫の指先に触れる。

いつもの温度だった。

それなのに、真由の中では、そこに佳澄の感触が重なっている。

佳澄が離さなかった。

夫も離さなかった。

その数秒を想像しながら、真由は夫の手に自分の指を重ねた。

夫は起きなかった。

静かな寝息だけが続いている。

やっぱり、二人きりで会うと男は変わるわね。

こうなると、一気に崩れるかもしれない。

男の欲は、育つのが早いから。

佳澄の言葉が離れない。

真由は夫の手を握ったまま、目を閉じた。

苦しい。

悔しい。

怖い。

それなのに、身体の奥にまた熱が戻ってくる。

夫の手を握りながら、もう片方の手で自分の熱に触れる。

指先が触れた瞬間、真由は息を詰めた。

自分でも驚くほど、そこはぐっしょりと濡れていた。

嫌だと思うより先に、身体だけが勝手に反応していた。

真由は暗闇の中で声を殺して指を動かした。

夫を起こしてはいけない。

起こしてしまえば、説明できない。

なぜ今、夫の手に触れているのか。

なぜその手を見て、こんなふうになっているのか。

なぜ夫が別の女の指に触れたことを思い出しながら、自分が崩れていくのか。

何も説明できない。

真由は、夫の手を握る指に少しだけ力を込めた。

夫の手は、何も知らないままそこにあった。

夫の指と、佳澄の指。

それらが触れ合っていた時間を思うと、あっという間に限界が近づいた。

「……あ、……いく、っ……」

真由は下半身を細かく震わせ、激しく果てた。

終わったあとも、夫の手を離せなかった。

次は、何を見せられるのだろう。

真由は目を閉じた。

二日後の日曜、またサークルがある。

その時、夫は佳澄をどう見るのだろう。

佳澄は、どんな顔で夫の前に立つのだろう。

そして夫は、あの数秒を覚えているのだろうか。

夫の手を握ったまま、真由は眠れない夜の中で、
その答えを待ち始めていた。

第 6 話

撮影会

土曜日は、何も起きなかった。

それが、かえって真由を落ち着かなくさせた。

夫はいつも通りに起き、いつも通りに朝食を食べ、
午後には少し出かけ、夕方には戻ってきた。

写真展のことも、お茶のことも、指が触れたこと
も、もちろん何も言わなかった。

ただの土曜日だった。

けれど真由の中では、金曜の夜に見せられた言葉
が何度も戻ってきた。

お茶の時間の方が楽しかったです。

久しぶりにドキドキしました。

佳澄さんのことを、もっと知りたいと思いました。

そして。

サークルの中だけで話すのは、もう物足りなく感じています。

佳澄さんと、もう少し二人で過ごしてみたいです。

写真を撮りながらなら、自然かなと思いました。

真由は、夫の横顔を何度も見た。

この人は、昨日、佳澄にそう送った。

妻である自分には何も言わず、佳澄には送った。

ただ話したいだけではない。

ただ親切にしているだけでもない。

夫は、佳澄と二人で過ごす時間を欲しがっている。

そう思うと、胸の奥が冷たくなった。

なのに、その冷たさの底から、また熱が戻ってくる。

夫が自分以外の女に向かっていく。

それを恐れているはずなのに、真由は次に何が起きるのかを待っていた。

夜、夫が隣で眠ったあとも、真由はしばらく目を

閉じられなかった。

日曜が来る。

明日、夫はまた佳澄に会う。

サークルで顔を合わせる。

そして、そのあと二人で川沿いへ撮影に行く。

夫が自分から作った約束として。

真由は暗闇の中で、夫の横顔を見た。

この人は、明日、佳澄の前でどんな顔をするのだろう。

妻には言えない女。

女として魅力を感じている相手。

指が触れても、すぐには離さなかった相手。

そして、自分からまた二人で会う時間を作った相手。

佳澄の前で、夫はどこまで男になるのだろう。

その問いが、胸の奥で静かに熱を持ち続けていた。

日曜の朝、夫はいつも通りだった。

朝食を食べ、カメラバッグを開け、レンズを確認している。

真由はキッチンに立ちながら、その背中を見ていた。何も知らなければ、いつもの日曜に見えた。

夫が趣味のサークルへ出かける。

少し遅く帰ってくるかもしれない。

帰宅したら、撮影の話を少し聞く。

それだけの日曜。

でも、真由は知っている。

今日は、それだけではない。

夫は佳澄と会う。

そしてサークルのあと、佳澄と二人で撮影に行く。

「今日は少し遅くなるかも」

夫がカメラバッグのファスナーを閉めながら言った。

真由は知らないふりをした。

「撮影会？」

「うん。終わったあと、少し撮ってくるかもしれない」

少し撮ってくる。

夫はそう言った。

佳澄とは言わなかった。

二人で、とは言わなかった。

川沿いへ行くとも言わなかった。

真由は、軽くうなずいた。

「わかった」

夫はそれ以上、説明しなかった。

それが、真由には痛かった。

金曜の夜には、自分から佳澄を誘った。

今日の撮影は、もう決まっている。

それなのに、妻には「少し撮ってくるかもしれない」
とだけ言う。

夫の中で、佳澄との時間はもう、妻にそのまま話すものではなくなっている。

そのことを、真由は改めて理解した。

「じゃあ、行ってくる」

「行ってらっしゃい」

ドアが閉まる。

真由は玄関に立ったまま、しばらく動けなかった。

夫は、佳澄に会いに行った。

そう言ってしまうと、もうただの趣味の外出には

見えなかった。

昼過ぎ、佳澄から短いメッセージが届いた。

来たわ。

ご主人、今日は私を見るのが早かった。

真由は画面を見つめた。

私を見るのが早かった。

その一文だけで、胸の奥がざわついた。

夫は佳澄を探したのだろうか。

サークルの部屋に入って、まず佳澄がいるかを見

たのだろうか。

そう考えるだけで、息が浅くなる。

続けて、佳澄から届く。

目が合った時、少しだけ表情が変わった。

嬉しかったのだと思う。

真由はスマホを握る手に力を入れた。

夫が、佳澄を見て嬉しそうにした。

自分がない場所で。

自分には「撮影会」と言って出かけた場所で。

夫は佳澄を見つけ、表情を変えた。

それはほんの小さな変化なのだろう。

他の人なら気づかないくらいの。

夫自身も、自分で気づいていないくらいの。

でも佳澄は見ている。

そして真由に伝えてくる。

サークル中は、まだ普通。

でも、ご主人は私の近くに来る回数が多い。

偶然に見えるようにしているけれど、偶然だけではないと思う。

真由は喉の奥が詰まるのを感じた。

偶然に見えるようにしている。

夫が。

それはもう、ただ親切な人の動きではない。

佳澄の近くへ行きたい。

でも、周囲にそう見えないようにしたい。

自分でもその気持ちを、まだはっきりとは認めたくないのかもしれない。

その曖昧な動きが、生々しかった。

佳澄から、また届いた。

今日は私から急がない。

ご主人がどう出るか見るわ。

真由は、その文を何度も読んだ。

ご主人がどう出るか。

もう、佳澄が無理に引っ張る必要はない。

夫の中に、その時間がすでに置かれている。

真由はスマホを伏せた。

怖かった。

けれど、待っていた。

夕方前、スマホが震えた。

佳澄からだった。

今、終わった。

ご主人が普通に「行きましょうか」と言ったわ。

真由は、ソファに座ったまま動けなくなった。

続けて届く。

迷っている感じではなかった。

周りに不自然に見えないようにしながら、でもちゃんと私を連れて出た。

真由の胸が強く鳴った。

夫が佳澄を連れて出た。

サークルの中から。

他の人たちのいる場所から。

自分の約束した相手として。

そこには、金曜とは違う確かさがあった。

前回は、写真展の帰りに流れでお茶をしたようにも見えた。

でも今日は違う。

最初から、二人で撮影に行くために。

今から川沿いへ行く。

終わったら話すわ。

そこで連絡は切れた。

また、見えない時間が始まる。

けれど、前回とは違う。

金曜は、佳澄が作った流れに夫が乗ったようにも
見えた。

今日は、夫が自分で作った時間の中に佳澄を入
れている。

真由はソファに座ったまま、スマホを握っていた。

夫は今、佳澄と歩いている。

サークルの人たちの中から、佳澄を選んで。

二人で川沿いへ向かっている。

その時間を、自分は待つしかない。

そう思うと、胸が苦しくなる。

それなのに、次の報告を待っている。

自分が壊れていく音が、静かに聞こえる気がした。

夫が帰ってきたのは、夕方遅くなってからだった。

「ただいま」

「おかえり。遅かったね」

「うん、撮影会が少し長引いて」

撮影会。

夫はそう言った。

佳澄とは言わなかった。

川沿いとは言わなかった。

二人で、とは言わなかった。

真由は、夫の顔を見た。

いつもより少し疲れている。

でも、どこか柔らかい。

それは気のせいかもしれない。

けれど真由には、夫が佳澄との時間を隠して帰っ

てきたようにしか見えなかった。

「楽しかった？」

「うん。まあ」

夫は短く答えた。

それ以上は言わない。

真由も聞かなかった。

聞けば、自分が知っていることを隠せなくなる。

夫は手を洗い、着替え、リビングで少し休んだ。

真由は夕食の支度をするふりをしながら、何度も夫の横顔を見た。

この人は、今日も佳澄と二人で過ごした。

自分から作った時間の中で。

そして、それを妻には言わない。

夫の中で、佳澄との時間はもう、隠すものになっている。

その事実が、真由を苦しくさせた。

夜。

夕食の片づけが終わり、夫がリビングでテレビを見ている頃、佳澄からメッセージが来た。

今日のこと、話すわ。

お茶より、ずっと近かった。

真由は、その一文を見つめた。

お茶より、ずっと近かった。

胸の奥が、強く鳴る。

続けて届く。

サークルを出たあと、川沿いまで少し歩いた。

ご主人はずっと普通に話していたわ。

写真の話をして、川の光の話をして、夕方は影が
やわらかいとか、そういうことを。

真由は画面を見つめた。

普通に話していた。

けれど、その普通がもう普通ではないことを、真由は知っている。

妻には言えないまま、佳澄と二人で歩いている。
それだけで、もう十分に違う。

佳澄から続く。

川沿いへ出るには、少しだけ土手を下りる場所があった。

私が足元を見て立ち止まったら、ご主人が先に下りて、手を差し出してくれた。

真由は息を止めた。

手。

夫が、佳澄に手を差し出した。

金曜は、カップを取る時に指が触れた。

けれど今日は違う。

夫が、自分から。

「大丈夫ですか」と言って、手を出してくれた。

佳澄の報告は続く。

私はその手を取った。

土手を下り切るまで、手はつながったままだった。

そこで終わりではなかった。

下り切ったあとも、ご主人はすぐには離さなかった。

ほんの少しだけ、必要な時間を過ぎてても、手が残っていた。

私も、すぐには離さなかった。

ご主人の手の力が強くなったわけではない。

引き寄せられたわけでもない。

ただ、離すタイミングを一拍だけ失ったみたいに、
つながったままだった。

それから、ご主人が先に気づいたように手を離し

た。でも、その離し方が少し名残惜しそうだった。

真由は、スマホを握る手に力を入れた。

土手を下り切るまで。

それだけなら、まだ親切だったかもしれない。

足元が悪いから手を貸した。

危ないから支えた。

それだけで済ませることもできた。

でも、下り切ったあとも、夫はすぐには離さなかった。

必要な時間は終わっていた。

もう手をつないでいる理由はなかった。

それなのに、ほんの少しだけ残った。

その一拍が、真由にはたまらなく生々しかった。

夫は、佳澄の手を離すのを少しだけ遅らせた。

無意識だったのかもしれない。

自分でも気づいていなかったのかもしれない。

でも、名残惜しそうだったと佳澄は言った。

金曜は、触れた指を離さなかった。

日曜は、自分から差し出した手を、少しだけ長く残した。

真由の胸の奥が、冷たく沈んだ。

これはもう、ただの親切ではない。

まだ恋人のように手をつないだわけではない。

はっきり求めたわけでもない。

何かを言葉にしたわけでもない。

それでも、夫の中にあるものは、少しずつ手に出始めている。

夫は明らかに、佳澄に触れたがっている。

そう思った瞬間、真由の身体の奥がじわりと熱を持った。

佳澄から、また届いた。

そのあと、川沿いで何枚か撮った。
最初は本当に写真の話だったわ。

真由は、少しだけ息を吐いた。
けれど、すぐに次が届く。

でも、ご主人は私をよく見ていた。
写真を見るふりをしながら、私の立ち方や、手元
や、横顔を見ていたと思う。

真由の胸がざわつく。

夫が佳澄を見ている。

写真の対象として。

教える相手として。

そして、女として。

佳澄は続ける。

私は何枚か撮ったあと、ご主人が少し笑って、
「少しブレていますね」
と言った。

それで私は、
「やっぱり難しいですね」
と返した。

真由は、次の文を待った。

するとご主人が、私の後ろに回った。

真由の呼吸が浅くなる。

後ろ。

夫が、佳澄の後ろに。

佳澄からの文字は、淡々としていた。

「脇を少し締めると安定します」

そう言って、私の両腕にそっと触れた。

真由は、そこで画面から目を離せなくなった。

両腕に触れた。

夫が、佳澄の後ろから。

写真を教えるために。

構え方を直すために。

でも、触れた。

佳澄の身体に。

たぶん、ご主人ははっきり狙っていたわけではない
と思う。でも、こういう距離になることを、まったく
想像していなかったわけでもないと思う。

写真を教えるというのは、そういうことだから。

真由は、その文を何度も読んだ。

わかったうえで。

夫は、そこまで考えていたのだろうか。

撮影なら自然に話せる。

撮影なら二人で歩ける。

撮影なら近づける。

そして、教えるという形なら、触れることもできる。

もちろん、夫がそこまで露骨に考えていたとは思
いたくなかった。

けれど、まったく想像していなかったとも、もう思
えなかった。

夫は佳澄と二人で過ごす理由を作った。

そしてその理由の中には、近づくことも、触れるこ

とも、自然に含まれていた。

その事実が、真由の胸を深く刺した。

少しして、佳澄から次の報告が届いた。

そのあと、ベンチに座って少し話した。

真由は、息を整えるように画面を見つめた。

私が聞いたの。

「今日のことは、奥さまには言っていないんですよ
ね」

真由の胸がまた強く鳴った。

夫は、すぐには答えなかったらしい。

けれど、佳澄の報告は続く。

ご主人は少しだけ間を置いて、

「言っていません」

と言った。

「サークルのあと、少し撮ってくるかもしれないとは
言いましたけど」

真由は、唇を噛んだ。

佳澄はさらに聞いていた。

「私と二人で、とは言わなかったんですね」

ご主人は、小さく頷いた。

「.....言いませんでした」

真由は、画面を持つ手に力を込めた。

言いませんでした。

その言葉は、金曜の夜とつながっていた。

なんでもない、ただのサークル仲間なら言える。

でも、佳澄のことは言わなかった。

今日も同じだった。

夫は、佳澄との時間を私に言わなかった。

佳澄から続く。

少し沈黙があったあと、ご主人の方から口を開いた。

「こういうの、佳澄さんは大丈夫ですか」

私は、少しだけ聞き返した。

「大丈夫、というと？」

ご主人は視線を落としてから、言った。

「僕が誘っておいて、こんなことを言うのも変なんですけど」

「妻にはちゃんと言わないまま、佳澄さんと会っているので」

「佳澄さんに、負担をかけていないかと思って」

真由は、その文を見つめた。

夫は、わかっている。

自分がしていることが、ただの趣味の延長ではないことを。

妻に言えないまま佳澄と会っていることを。

そして、そのことに佳澄を巻き込んでいるかもしれないことを。

佳澄から、続きが届く。

私は少し間を置いてから答えた。

「負担ではありません」

「でも、心配はあります」

ご主人は、少し顔を上げた。

「心配、ですか」

私は頷いた。

「恒一さんが、無理をしているように見えるからです」

「奥さまに言えないことをしてまで、私と会っている」

「それを嬉しいと思う自分もいます」

「でも、そのままでいいのかと思う自分もいます」

真由は、その文を見つめた。

嬉しいと思う自分もいます。

佳澄は、そう言った。

夫が妻に言えないことをしてまで自分と会っている。

それを嬉しいと思う。

佳澄は、それを隠さなかった。

ご主人は、その言葉に反応したわ。

佳澄から、次が届く。

「.....嬉しいと思ってくれるんですか」

と、ご主人は言った。

真由は、胸の奥が大きく揺れた。

夫は、そこに反応した。

負担ではないか、心配だ、という話の中で。

嬉しいと思ってくれるんですか。

夫はそれを確かめた。

佳澄が、自分との時間を嬉しいと思っているのか。

そこを知りたがった。

佳澄は続ける。

私が、「少しは」と言ったら、

ご主人は、少し困ったように笑って、

「そう言われると、困ります」と言った。

私は、「困るんですか」と聞いた。

ご主人は、「はい」と答えた。

それから少し間を置いて、
「でも、嬉しいです」と言った。

真由は、息を止めた。

でも、嬉しいです。

夫が、そう言った。

佳澄が嬉しいと思ってくれることが、夫も嬉しい。

それはもう、ただの親切ではなかった。

相手の気持ちを欲しがっている。

佳澄に、自分と同じところにいてほしいと思っている。

真由には、そう聞こえた。

さらに、報告は続く。

私が、

「私が、恒一さんを困らせているのかもしれませんがね」と言った。

ご主人は、すぐに首を振った。

「それは違います」と。

私は言った。

「でも、最初に頼ったのは私です」

「写真のことも、展示のことも」

「私が近づいたから、恒一さんを困らせているのかもしれない」

ご主人は、少し強く首を振った。

「それは違います」

「誘ったのは僕です」

「今日も、僕が誘いました」

私はすぐには返さなかった。

ご主人は、自分で言った言葉に少し戸惑ったように見えた。

それでも、目を逸らさずに続けた。

「だから、佳澄さんのせいではないです」

「僕が、自分で来たんです」

真由は、その一文を何度も読んだ。

僕が、自分で来たんです。

夫が、佳澄に会うために。

妻には言わずに。

その先を、佳澄は静かに受けた。

「.....奥さまには、言わずに」

ご主人は、少し視線を落としてから、

「はい」

と答えた。

私は、少しだけ間を置いて聞いた。

「それでも、私と会いたいと思ってくれたんですか」

真由の心臓が大きく鳴った。

その問いは、もう逃げ道を残していなかった。

それでも、私と会いたいと思ってくれたんですか。

妻に言えないとわかっていて。

よくないことだとわかっていて。

それでも。

ご主人は、しばらく黙っていた。

やがて、小さく言った。

「.....会いたかったです」

真由は、画面を見つめたまま、呼吸を忘れた。

会いたかった。

夫が、佳澄にそう言った。

ただ楽しかっただけではない。

話したいだけでもない。

写真を教えたかっただけでもない。

会いたかった。

妻に言わずに、会いたかった。

その事実が、真由を深く傷つけた。

同時に、身体の内を強く熱くした。

忘れられている方が、まだ楽だったのかもしれない。

妻のことなど頭から消えて、ただ佳澄に惹かれているだけなら、怒ることができた。

ひどい、と責めることができた。

裏切りだと、単純に思えたかもしれない。

でも夫は、真由を忘れていない。

忘れていないまま、佳澄に会いたいと思っている。

それが、真由にはたまらなく苦しかった。

そして、たまらなく生々しかった。

佳澄から、さらに届く。

そのあと、ご主人は少しだけ自分から話したわ。

真由は、画面を見つめた。

「佳澄さんといると、楽しいんです」

と、ご主人は言った。

「落ち着くのに、落ち着かない」

「帰らなきゃいけないのに、もう少しいたいと思って
しまう」

真由は、キッチンのカウンターに手をついた。

落ち着くのに、落ち着かない。

それは、金曜のスクショにもあった言葉だった。

夫の中で、その感覚は消えていない。

むしろ深くなっている。

帰らなきゃいけないのに、もう少しいたい。

夫が、佳澄にそう言った。

それはもう、単なるドキドキではなかった。

欲だった。

まだきれいな言葉に包まれている。

まだ誠実そうな迷いの中にある。

でも、確かに欲だった。

佳澄をもっと知りたい。

もっと話したい。

会いたい。

触れる理由があれば触れてしまう。

妻には言えない。

でも、離れたいとは思えない。

夫の中に、その欲が育っている。

真由はそれを、佳澄の言葉で見せられていた。

しばらくして、佳澄から画像が届いた。

これが、そのあと。

スクリーンショットだった。

恒一

今日は、少し話しすぎました。

自分でも驚いています。

佳澄

本音を聞けた気がして、私は嬉しかったです。

恒一

本音.....そうですね。

たぶん、本音だったと思います。

佳澄

後悔していますか。

恒一

後悔はしていません。

でも、困ってはいます。

佳澄

困ってる？

恒一

妻がいるのに、佳澄さんのことを考えてしまうから

です。

こういうのは、よくないですよね。

真由は、最後の一文を見つめた。

妻がいるのに。

夫が、自分のことを出している。

佳澄に向かって。

自分以外の女に向かって。

妻がいるのに、あなたのことを考えてしまう。

それは、ただの罪悪感ではなかった。

妻がいるからこそ、佳澄への気持ちが危ういもの

になる。

夫はもう、それをわかっている。

さらに、スクショが続く。

佳澄

それでも、考えてしまうんですか。

恒一

.....はい。

考えないようにする方が、難しいです。

佳澄

それなら、無理に消そうとしなくてもいいんじゃないな

いですか。

考えてしまうだけなら、誰かを傷つけているわけでは
ありませんから。

恒一

そうですね。

でも、考えてしまうだけで済まなくなったら、よくな
いですよね。

佳澄

済まなくなったら、ですか。

恒一

.....すみません。

また、佳澄さんを不安にさせるようなことを言いま

した。

佳澄

いいえ。

私のことはいいんです。

ただ、恒一さんが苦しくなるのは、私もうつらいです。

恒一

苦しい、というより.....

落ち着かないんです。

佳澄

それでも、私のことを考えてくれているなら。

正直に言えば、嬉しいです。

恒一

.....ずっと考えています。

金曜のことも、今日のことも。

帰ってからも、消えませんでした。

真由は、画面から目を離せなかった。

考えてしまうだけで済まなくなったら、よくない
ですよね。

夫が、自分でそう送っている。

考えるだけで済まなくなったら。

その一文が、真由の胸の奥に深く沈んだ。

夫は、もうわかっているのだ。

佳澄のことを考えてしまう。

金曜のことも、今日のことも消えない。

それだけでは終わらないかもしれない。

その予感を、夫自身が持っている。

真由は、リビングにいる夫の背中を見た。

何でもない顔でテレビを見ている。

いつもの夫の顔をしている。

この家の中にいて、自分のすぐ近くにいる。

それなのに、その夫は佳澄に向かって、

考えるだけで済まなくなったら、よくないですよ
ね。

そう送っている。

真由の指先が冷たくなった。

まだ何も決定的なことは起きていない。

キスをしたわけではない。

抱きしめたわけでもない。

関係を望むと言ったわけでもない。

けれど夫は、自分の中にあるものが、そこへ向か
うかもしれないと感じている。

考えるだけでは済まない。

その先に何があるのか、夫もわかっているのだ。

だから、よくないと言った。

よくない、とわかっている。

まずい、と感じている。

妻がいることもわかっている。

それでも、佳澄を考えている。

真由は息を整えようとした。

けれど、呼吸は浅いままだった。

怖い。

夫が、自分で危うさに気づいていること。

気づいているのに、止められていないこと。

その危うさを、妻ではなく佳澄に打ち明けていること。

それが、真由の胸をえぐった。

佳澄から届いたスクリーンショットを、もう一度見る。

佳澄

済まなくなったら、ですか。

恒一

.....すみません。

また、佳澄さんを不安にさせるようなことを言いま

した。

真由は、その返しにも胸を刺された。

夫は、佳澄を不安にさせたと思っている。

自分の中の欲が、佳澄を怖がらせるかもしれない。
そう気にしている。

妻である真由が傷つくことなく。

佳澄が不安になることを。

そのことが、どうしようもなく苦しかった。

でも、佳澄は逃げていない。

佳澄

いいえ。

私のことはいいんです。

ただ、恒一さんが苦しくなるのは、私もつらいです。

佳澄は、夫の危うさを拒まなかった。

むしろ、受け止めている。

恒一さんが苦しくなるのは、私もつらいです。

その言葉は、優しさのようでいて、真由にはとても残酷だった。

夫が苦しいことを、佳澄が心配している。

夫も、その心配に甘えている。

そして、最後に夫は送っている。

恒一

.....ずっと考えています。

金曜のことも、今日のことも。

帰ってからも、消えませんでした。

真由は、唇を噛んだ。

考えるだけで済まなくなったら。

その言葉のあとに、

ずっと考えています。

と続いている。

つまり夫は、もうその手前にいる。

考えている。

消えない。

そして、考えるだけで済まなくなるかもしれない
と、自分で感じている。

真由の胸の奥が、冷たく沈んだ。

妻がいるから、夫はまだ止まっている。

妻がいるから、よくないと思っている。

妻がいるから、考えるだけで済ませようとしてい
る。

妻がいるから、佳澄に向かう足を止めようとして

いる。

では。

妻がいない夜なら。

夫は、どうするのだろう。

その問いが浮かんだ瞬間、真由の身体の奥に、ぞくりとした熱が走った。

考えるだけで済まなくなったら。

夫自身が、そう言った。

なら、妻がいない夜を与えたら。

夫は本当に、考えるだけで止まれるのだろうか。
それとも、佳澄へ向かってもう一歩進んでしまう
のだろうか。

知りたくなかった。
でも、知りたかった。

その先を見たいと思ってしまった。

そう思った瞬間、真由の指が動いていた。

佳澄さん。

来週の金曜の夜、空いていますか。

送ってから、真由は自分の呼吸が浅くなっていることに気づいた。

少しして、既読がついた。

佳澄からの返事は短かった。

空いているわ。

真由は、胸の奥が冷えるのを感じながら続けた。

その日の夜、私は家を空けます。

飲み会だと夫に言います。

夫がどう出るか、見ていてください。

送信済み。

もう、戻せない。

画面の上で、自分の打った言葉が白く浮かんでいる。

その日の夜、私は家を空けます。

それは、ただの予定ではなかった。

夫の前から、妻である自分を一度消すということだった。

夫が困る理由。

夫が踏みとどまる理由。

夫が「よくない」と思う理由。

その一つを、自分の手で外す。

真由は、胃の奥が沈むような感覚を覚えた。

何をしているのだろう。

そう思った。

けれど、送った言葉を取り消すことはしなかった。

佳澄からの返事は、少し間を置いて届いた。

それは、かなり進めるということよ。

真由は画面を見つめた。

わかっている。

本当にわかっているのか。

そう自分に問いかけた。

自分は、夫と佳澄が二人になる夜を作ろうとして
いる。

しかも、偶然ではなく、意図的に。

飲み会だと嘘をついて、自分のいない時間を夫
に与えようとしている。

その時間を、夫がどう使うかを見るために。

真由は、ゆっくり打った。

わかっています。

佳澄から、すぐに返事が来た。

なら、見ているわ。

ご主人が、妻のいない夜をどう使うか。

その文を読んだ瞬間、真由の胸の奥に重いものが沈んだ。

妻のいない夜。

自分が作る夜。

そこに夫が何を入れるのか。

真由は、それを見ようとしている。

夫はリビングで、何も知らない顔でテレビを見ていた。

真由はキッチンに立ったまま、しばらく背中を向けていた。

言うなら、今しかない。

そう思った。

「来週の金曜なんだけど」

夫が顔を上げた。

「うん？」

「夜、飲み会になった。久しぶりに誘われて」

夫は少しだけ意外そうな顔をした。

「そうなんだ」

「たぶん、遅くなると思う」

「わかった。楽しんできなよ」

あまりにも普通だった。

夫は何も知らない。

この飲み会が嘘だということも。

その夜を空けるためのものだということも。

その情報を、佳澄にもう伝えていることも。

何も知らずに、楽しめなよと言った。

真由はうなずいた。

「うん」

その短い返事の中に、自分がどれだけの嘘を押し込めたのか、夫は気づかない。

夫はまたテレビへ視線を戻した。

いつもの夜だった。

けれど、真由の中ではもう、金曜の夜が始まっていた。

そのあと、しばらく何も来なかった。

夫は風呂に入り、上がると少しだけスマホを見ていた。

真由はその手元を見ないようにした。

見たところで、何もわからない。

でも、夫が佳澄に送るかもしれない。

そのことだけは、もうわかっていた。

妻が金曜の夜にいない。

その情報を、夫はどう使うのか。

真由は待っていた。

待つてはいけないと思いながら、待っていた。

夜が少し深くなった頃、佳澄からメッセージが届いた。

来たわ。

ご主人から。

真由の心臓が大きく跳ねた。

続けて、スクリーンショットが届く。

恒一

時間がたっても、今日の何を何度も思い出しています。

佳澄

私もです。

思っていたより、ずっと楽しかったです。

恒一

そう言ってもらえると嬉しいです。

僕も、まだ話し足りない気がしています。

佳澄

私も、もう少しお話ししたかったです。

恒一

もしよかったら、今度はもう少しゆっくり会えませんか。

佳澄

ゆっくり、ですか。

恒一

はい。

サークルのあとではなくて、別の日に。

食事でもできたら嬉しいです。

佳澄

食事に誘ってくださっているんですか。

恒一

はい。

急にすみません。

でも、ちゃんと誘いたいと思いました。

真由は、そこで息を止めた。

ちゃんと誘いたいと思いました。

その一文だけで、夫がもう受け身ではないことがわかった。

佳澄に誘われたから応じているのではない。

流れで話しているのでもない。

サークルのついででもない。

夫は、自分から佳澄との時間を作ろうとしている。
しかも、今度は食事。

撮影よりも長く、夜に近い時間。

サークルのあとではなく、最初から二人で会う時間。

真由の胸の奥で、先ほどとは違う痛みが広がった。

考えているだけなら、まだ心の中のことだった。

思い出しているだけなら、まだ止められる気がした。

でも、これは違う。

夫は、次の場所を作っている。

佳澄と二人になるための時間を、言葉にして差し

出している。

真由は画面から目を離せなかった。

すぐに、続きが送られてきた。

佳澄

嬉しいです。

いつ頃ならご都合よさそうですか。

恒一

次の金曜の夜とか、空いていませんか。

佳澄

金曜日、大丈夫です。

でも、奥さまとのご予定は大丈夫なんですか。

恒一

その日は妻も出かける予定なので。

たぶん、時間は大丈夫だと思います。

真由は、動けなくなった。

金曜日。

ついさっき、自分が飲み会だと嘘をついた金曜日。

夫に、家を空けると告げたばかりの夜。

その夜を、夫が選んだ。

奥さまとのご予定は大丈夫なんですか。

佳澄が、そこで真由の存在を出した。

奥さま。

その言葉の中に、自分がいる。

けれど夫は、迷わずその予定を使った。

その日は妻も出かける予定なので。

たぶん、時間は大丈夫だと思います。

妻がないから、大丈夫

夫はそう答えた。

真由が作った嘘の予定。

夫の前から、妻である自分を一度消すための夜。

夫は、その空いた場所に佳澄を入れた。

真由はスマホを伏せた。

ここで、ようやく言葉になった。

嫉妬だった。

夫が佳澄を考えていることへの嫉妬。

夫が佳澄を食事に誘ったことへの嫉妬。

そして、自分が作った夜を、夫が別の女のために使ったことへの嫉妬。

でも、ただの嫉妬ではなかった。

苦しい。

怖い。

止めたい。

そう思うのに、身体の奥では熱が引かなかった。

妻がいない夜なら、夫はどうするのか。

その答えを、自分はもう見せられている。

夫は佳澄を選んだ。

まだ決定的なことは何も起きていない。

食事の約束をしただけ。

会う時間を決めただけ。

それでも、線は確実に動いた。

しかもその線を動かしたのは、佳澄だけではない。

夫だけでもない。

真由自身だった。

自分が空けた夜に、夫が佳澄を入れた。

その事実が、真由を傷つけた。

そして、深く揺らした。

佳澄から、メッセージが来た。

あなたが空けた夜に、ご主人が私を入れたわ。

真由は、その文を見つめた。

その通りだった。

自分が空けた夜。

そこに、夫が佳澄を入れた。

真由はスマホを伏せた。

苦しかった。

怖かった。

悔しかった。

止めたいと思った。

けれど、その奥で、身体の熱は激しさを増している。

夫はもう、佳澄に向かっている。

そしてその道を、自分が開けた。

真由はリビングの夫を見た。

夫はスマホをテーブルに置き、何もなかったようにテレビを見ていた。

この人は、私がない夜に、佳澄と食事をする。

その約束を、自分で作った。

それなのに、今はいつもの夫の顔をしている。

真由は、胸の奥が苦しくなった。

今なら、まだ金曜の飲み会を取り消せる。

夫に、予定がなくなったと言えればいい。

そうすれば、少なくとも金曜の夜はなくなる。

けれど、同時に思った。

金曜に、夫はどうなるのだろう。

佳澄と食事をして。

夜の店で、今より長い時間、向かい合って。

妻がいないと知っていて。

夫は、どこまで自分を止められるのだろう。

真由は、その問いを打ち消せなかった。

佳澄から、最後のメッセージが届いた。

金曜、空けておいてね。

あなたも、見る覚悟をしておいた方がいい。

真由は、その文を見つめた。

見る覚悟。

自分が望んだことなのに、そんなものが必要になるところまで来てしまった。

真由はスマホを伏せた。

夫のいるリビングから、テレビの音が小さく聞こえる。その音はいつもと同じだった。

でも、もう同じには聞こえなかった。

金曜の夜。

自分がないことになっている夜。

夫が佳澄と食事をする夜。

夫がどこまで男になるのかを、真由が見る夜。

それはまだ数日先なのに、もう真由の中に入り込んでいた。

月曜が来て、火曜が来て、水曜が来て、木曜が来る。そして金曜が来る。

その夜、夫は佳澄に会う。

真由が作った嘘の夜に。

夫が自分で選んだ女と。

真由はキッチンに立ったまま、静かに息を吐いた。

早く、金曜になってほしい。

それを認めた瞬間、真由は自分がまた一段、戻れない場所へ降りてしまったことを知った。

第 7 話

妻のいない夜

月曜になっても、真由の中から金曜の夜は消えなかった。

まだ来ていない金曜。

それなのに、もう何度もその夜を想像していた。

夫が佳澄と食事をする。

自分がないことになっている夜に。

飲み会だと嘘をついて空けた時間の中で。

ただ食事をするだけ。

そう思えば、まだ何も起きていないと言えるはずだった。

けれど真由は、もうそうは思えなかった。

その日は妻も出かける予定なので。

たぶん、時間は大丈夫だと思います。

夫が佳澄に送ったその一文が、胸の奥にずっと残っていた。

自分が空けた夜に、夫が佳澄を入れた。

それだけで、金曜はもう普通の夜ではなくなっていた。

日曜の川沿いで、夫は佳澄に手を貸した。

土手を下り切ったあとも、必要な時間を過ぎてなお、少しだけその手を残した。

そのあと、カメラの構え方を教えるという形で、佳澄の背後に立ち、両腕に触れた。

写真を教えるため。

そう言えば、すべて自然に見える。

けれど真由には、もうそれだけには思えなかった。

夫は、触れる理由を得た。

そして、その理由の中で佳澄に触れた。

その夫が今度は、金曜の夜に佳澄と食事をする。

サークルのあとではない。

撮影のついででもない。

最初から、二人で会う夜として。

その事実が、真由の中で何度も反復された。

月曜の夜、佳澄からスクリーンショットが届いた。

恒一

金曜のお店、少し見えています。

あまり賑やかすぎないところの方がいいですね。

佳澄

そうですね。

落ち着いて話せるところの方が、私は好きです。

恒一

僕もそう思いました。

前みたいに、周りを気にしながら話す感じにはしたくないので。

佳澄

それは、少し嬉しいです。

恒一

せっかくなら、ゆっくり話せるところにしましょう。

真由は、最後の一文を何度も読んだ。

せっかくなら、ゆっくり話せるところにしましょう。

夫は、そう送っている。

ただ店を探しているだけ。

食事の場所を決めているだけ。

そう見える。

けれど、真由にはもうそうは見えなかった。

夫は、佳澄と二人で向かい合う時間を整えようとしている。

騒がしくない場所。

落ち着いて話せる場所。

周りを気にしなくていい場所。

ゆっくりできる時間。

その一つひとつを選びながら、夫は金曜の夜を具体的に形にしている。

真由はスマホを伏せた。

まだ月曜なのに。

夫の中では、もう金曜が始まっている。

火曜の夜にも、佳澄からスクリーンショットが届いた。

恒一

駅から少し歩くところでも大丈夫ですか。

静かそうな店があって。

佳澄

大丈夫です。

少し歩くくらいの方が、かえって落ち着くかもしれ

ません。

恒一

よかったです。

人が多いところより、その方が話しやすいと思って。

佳澄

恒一さんは、ちゃんと考えてくださるんですね。

恒一

考えすぎかもしれません。

でも、金曜は雑にしたくないので。

真由は、その一文から目を離せなかった。

金曜は雑にしたくない。

夫が、佳澄にそう送っている。

雑にしたくない。

それは、ただ店選びの話ではなかった。

夫は、佳澄との夜を大事にしようとしている。

駅から少し歩く店。

静かな場所。

人が多すぎない場所。

話しやすい距離。

夫は、その一つひとつを考えている。

佳澄と二人で過ごす時間を、きちんとしたものに

しようとしている。

真由は、胸の奥が痛くなった。

夫は、自分との外食でそんなふう到店を選んだことがあっただろうか。

もちろん、あったのかもしれない。

でも今、夫は佳澄のために選んでいる。

それが、嫌だった。

嫌なのに、画面を閉じられなかった。

水曜の夜。

佳澄から届いたスクリーンショットは、短かった。

佳澄

金曜のお店、楽しみにしています。

恒一

そう言ってもらえると安心します。

佳澄

少し緊張もしますけど。

恒一

僕も、少しあります。

でも、悪い緊張ではないです。

佳澄

日曜の撮影の時も、少しそんな感じでした。

恒一

そうですね。

あの日の空気が、まだ少し残っています。

真由は、その最後の文を見つめた。

あの日の空気。

夫は、何を思い出しているのだろう。

日曜の川沿い。

土手を下りる時に佳澄の手を取ったこと。

下り切ったあとも、すぐには離さなかったこと。

背後に立って、佳澄の両腕に触れたこと。

耳の近くで「こうです」と声をかけたこと。

あの日の空気が、まだ少し残っています。

直接的な言葉ではない。

触れたいとも、会いたいとも、欲しいとも書いていない。

けれど、真由にはわかった。

夫は、忘れていない。

あの日、二人の間に生まれた距離を。

佳澄も、たぶんわかっている。

だから、何も聞き返さない。

それ以上、説明を求めない。

ただ、その空気を共有するように、静かに受け取っている。

真由はスマホを握ったまま、しばらく動けなかった。

二人だけにわかる言葉が、画面の中に増えていく。
そのことが、何より苦しかった。

木曜の夜、真由は夕食のあと、夫と向かい合って

座っていた。

夫はいつも通りだった。

箸を置き、お茶を飲み、何でもない話をする。

明日、佳澄と食事をする男には見えなかった。

けれど、真由は知っている。

夫の中で、金曜の夜はもう待たれている。

その夜、佳澄から届いたスクリーンショットは、さらに静かな熱を含んでいた。

恒一

明日ですね。

佳澄

はい。

少し落ち着かないですね。

恒一

僕もです。

でも、明日は急いで帰るつもりはありません。

佳澄

そうなんですか。

恒一

はい。

佳澄さんが大丈夫なら、少し長く一緒にいられたらと思っています。

佳澄

私も、そのつもりでいます。

恒一

ありがとうございます。

そう言ってもらえると、明日を待つ時間まで少し
違って感じます。

真由は、最後まで読んでから、もう一度最初に戻
った。

明日は急いで帰るつもりはありません。

少し長く一緒にいられたらと思っています。

私も、そのつもりでいます。

会いたいとは書いていない。

触れたいとも書いていない。

まして、その先のことなど一言も書かれていない。

それなのに、画面の中にはもう金曜の夜の熱があった。

静かな店。

駅から少し歩く道。

急いで帰らなくていい時間。

日曜の撮影の時の空気。

全部が、二人だけにわかる合図のように並んでいた。

夫は、欲を隠している。

隠しているつもりで、佳澄にはちゃんと伝えている。

そして佳澄も、それを受け取っている。

真由はスマホを伏せた。

怖かった。

でも、もう金曜を止める気にはなれなかった。

金曜の朝、真由は目が覚めた瞬間に、その日が来たのだとわかった。

まだ薄い朝の光が、カーテンの隙間から入ってい

る。

隣では夫が眠っていた。

穏やかな顔だった。

昨日の夜、佳澄に「少し長く一緒にいられたら」と
送った男には見えなかった。

その夫が、今夜、佳澄と会う。

食事をして、長く一緒に過ごす。

自分がないことになっている夜に。

真由は天井を見たまま、しばらく動けなかった。

胸の奥が朝から重い。

期待と不安が混ざって、どちらがどちらかわから

なかった。

早く夜になってほしいような。

永遠に来なければいいような。

そんな落ち着かない気分だけが、身体の底に沈んでいた。

朝食の時、夫は金曜の夜について何も言わなかった。真由も言わなかった。

ただ、出勤前に夫が「飲み会、気をつけてね」と言った。

「うん」

真由はうなずいた。

その飲み会など、どこにもない。

自分でついた嘘だ。

夫が佳澄と会うために。

夫の前から、妻である自分を消すために。

真由はその嘘を、今日、本当に実行する。

仕事中は、時間の流れが異様に遅かった。

午前の確認作業。

昼の社内メール。

午後の打ち合わせ。

どれもちゃんとこなしているはずなのに、頭のどこかでは別の時計が動いている。

夫は今、何を考えているのだろう。

佳澄も、今日の夜を待っているのだろうか。

二人は、どんな顔で会うのだろう。

夕方近くになって、佳澄から通知が来た。

もうすぐ会う。

ご主人、今日はかなり来ていると思う。

目を見ればわかるはず。

真由は、その一文だけで喉が熱くなった。

かなり来てる。

佳澄は、もうそう言い切っている。

少しして、もう一通届いた。

今、会った。

今日は最初から近い。

日曜の続きみたいな顔をしている。

真由は、その短い文を何度も読み返した。

日曜の続き。

夫も、そういう顔をしている。

川沿いの撮影。

土手で触れた手。

背後から腕に触れた時間。

昨日までの LINE。

静かな店。

長く一緒にいる約束。

そのすべてが、今夜につながっている。

真由は、仕事を終えたあと、会社から少し離れた
場所で、ひとりで軽く食事を取った。

何を食べたのか、あとで思い返してもよく覚えて
いない。

味も、量も、ほとんど意識に残らなかった。

ただ、空いたテーブルの向こうに、別の場所で並んで歩いている二人の姿ばかりが頭に浮かぶ。

夫と佳澄。

自分が空けた夜に、二人で食事へ向かっている。

食事のあと、真由は駅前のカフェに入った。

ここで時間をつぶせば、飲み会の帰りのような顔で家へ戻れる。

そう考えた自分が、あまりにも嫌だった。

だが、それでも席を立てなかった。

テーブルの上には、冷めていくコーヒーとスマホだけがある。

今ごろ、夫は佳澄と向かい合っている。

妻のいない夜に。

妻が作った嘘の中で。

しばらくして、佳澄から短いメッセージが来た。

食事に入った。

あとでまとめて話す。

でも、今日はかなり危ない。

それだけだった。

そのあとは、しばらく何も来なかった。

真由は、画面を見つめたまま待った。

対面している最中に、細かく LINE などできない。

それはわかっている。

だからこそ、見えない時間が長かった。

夫は今、何を言っているのだろう。

佳澄のどこを見ているのだろう。

どれくらいの距離で座っているのだろう。

考えたくないのに、考えてしまう。

十九時。

二十時。

二十一時。

時間だけが進んでいく。

真由は、冷めたコーヒーに口をつけた。

味はしなかった。

二十一時を少し過ぎた頃、佳澄からメッセージが届いた。

今、別れた。

順番に送るわ。

真由は、すぐに画面を開いた。

手が少し震えていた。

待ち合わせから店まで、少し狭い路地を歩いた。
人がすれ違うたびに近くなって、何度も肩が触れた。
ご主人、避けなかった。

真由は息を止めた。

肩が触れた。

何度も。

それでも夫は避けなかった。

佳澄から続けて届く。

最初は偶然みたいだった。

でも途中から、近いままでいることに慣れたみたいだった。

私が少し離れようとする、ご主人の方が歩幅を合わせてきた。

真由は、スマホを握る手に力を込めた。

夫が、佳澄の歩幅に合わせる。

離れようとした佳澄の距離に、自分から合わせる。

それは、肩が触れる距離を保つということだった。

さらに届く。

人込みで前から人が来た時、肩に手を回すみた

いにして寄せてくれた。

危ないから、という顔だった。

でも、手の置き方は、それだけではなかった。

真由は画面を見つめた。

肩に手を回すみたいに。

人を避けるため。

そう言い訳できる形で。

でも、実際にはそれ以上の意味を持った触れ方だったのだろう。

佳澄の身体を、少し近くへ寄せるように。

自分の腕の中へ、一瞬でも入れるように。

佳澄から、さらに届く。

いったん寄せられてからは、しばらく肩が触れたままだった。

ちょっと動かせば手をつなげるくらいの距離。

真由の胸の奥は、痛いほど熱を持った。

どれくらいの時間歩いたのかはわからない。

でも、しばらく二人は肩を触れ合わせたままだった。

次のメッセージが届く。

店は、テラス席へ降りる小さな段差があった。

ご主人、先に降りて、私に手を出した。

真由は、画面を見つめたまま動けなかった。

段差。

手を貸した。

それだけなら、ただの気遣いかもしれない。

けれど佳澄の報告は、そこで終わらなかった。

すぐ離すと思ったのに、少し長かった。

下りたあとも、一拍だけ手が残った。

日曜の時より、自然に。

でも、たぶん前よりも迷いなく。

真由は、その文面を何度も読んだ。

日曜の時より、自然に。

前よりも迷いなく。

夫はもう、触れることに少し慣れ始めている。

土手で手を貸した時は、まだ理由が必要だった。

写真を教える時も、構え方という理由があった。

でも今夜の夫は、段差という小さなきっかけだけで手を出した。

そして、すぐには離さなかった。

そこに込められた迷いのなさが、真由にはひどく生々しく思えた。

階段でもない。

大げさな助けが要るような段差でもない。

それなのに、夫は手を出した。

そして、触れたあとも、そのまま少し残した。

それはもう、偶然ではない。

触れたい男の手つきに見えた。

席に着いてからは、写真の話はほとんど出なかった。私のことばかり聞いてきた。

真由は、唇を噛んだ。

佳澄のことばかり。

やはりそうなのだった。

夫はもう、佳澄とただ写真やサークルの話をした
いわけではない。

佳澄がどういう女なのか、もっと知りたい。

その輪郭を、もっと具体的に自分の中へ取り込み
たい。

そういう男の欲が、会話の形をして前へ出ている。

休日のこと。

家での過ごし方。

好きな食べ物。

昔の恋愛のこと。

かなり踏み込んでいたわ。

真由は、ひとつひとつの話題に息が詰まるのを感じた。

夫は、佳澄の生活を知りたがっている。

家でどんなふうに過ごすのか。

休日は何をするのか。

誰を好きになってきたのか。

知りたい。

それはもう、単なる会話ではなかった。

その女の内側へ、少しずつ入っていく行為だった。

佳澄から、さらに届く。

食事の途中から、ご主人の方が少し変わった。
最初は私のことをいろいろ聞いていたのに、途中で急に黙ったの。

真由は、スマホを握る手に力を込めた。

私が「どうしましたか」と聞いたら、
ご主人は少し迷ってから、
「こういう機会もなかなかないので、少しでも正直
に言ってもいいですか」
と言った。

真由は息を止めた。

少しだけ正直に。

夫が、自分からそう言った。

私が「はい」と答えたら、
ご主人は困ったように笑った。

それから、

「佳澄さんとサークルで話している時には、正直、
ここまで意識していませんでした」

と言ったわ。

真由は、画面から目を離せなかった。

佳澄の報告は続く。

「でも、こうして二人でお茶をしたり、撮影に行った

り、今日みたいに食事をしたりすると……」

そこで、ご主人は一度言葉を止めた。

私が黙って待っていたら、

「男としては、少しまずいことになっていると思います」そう言った。

真由の胸が強く鳴った。

男としては、少しまずいことになっている。

夫が、佳澄にそう言った。

それはもう、ただ楽しいという言葉ではなかった。

話しやすい。

落ち着く。

また会いたい。

そういうきれいな言葉の奥にあったものを、夫が自分で認めたということだった。

ご主人は続けた。

「佳澄さんもわかっていると思いますけど、僕は既婚者です」

「本当は、こうしてデートみたいに二人で会うこと自体、よくないことだと思っています」

「でも、正直に言うと……」

真由は、喉の奥が熱くなるのを感じた。

「惹かれているんだと思います」

「ちょっと、では済まないかもしれません」

そう言ったわ。

真由は、スマホを握ったまま動けなくなった。

惹かれている。

夫が、佳澄に。

しかも、ちょっとでは済まないかもしれない、と。

それは、もうほとんど告白に近かった。

ただの好意ではない。

ただの興味でもない。

佳澄を、女として求め始めている。

その言葉を、夫は下品な形ではなく、ぎりぎり整えた言葉の中で差し出した。

私が、

「.....そんなふうに言われたら、正直、嬉しい気持ちがあります」

「でも、同時に、どう受け取っていいのかわからなくなります」

と言った。ご主人は、すぐには答えなかった。

真由は、画面を見つめた。

それから、

「そうですね.....」

「でも、佳澄さんが僕のことをどう思っているのか、
知りたいです」

と言った。

夫は、佳澄の気持ちを聞こうとしている。

自分が惹かれていると告げた上で。

既婚者だとわかっていると言った上で。

それでも、佳澄が自分をどう見ているのか知りたい
と言った。

ご主人は最後に、

「できれば、正直に教えてほしいです」

と言ったわ。

真由は、息をするのを忘れた。

夫が、佳澄に答えを求めている。

自分の気持ちだけを吐き出したのではない。

佳澄が受け取るのか。

拒むのか。

同じように思っているのか。

それを知りたがっている。

夫はもう、自分ひとりの中で熱を持て余している
ではなかった。

佳澄にも、その熱を持ってほしがっている。

佳澄からの報告は、少し間を置いて続いた。

私は少しだけ黙った。

それから、

「正直に言えば、私も恒一さんを男性として見ています」と答えた。

真由は、胸の奥を強く掴まれたような気がした。

佳澄も、夫を男性として見ている。

そう言った。

「でも、奥さまがいる方だということもわかっています」

「だから、簡単に言葉にしていることではないと思

っていました」

そう言ったわ。

佳澄は、すぐには受け入れない。

けれど、拒んでもいない。

夫の言葉を、女として受け取っている。

そのうえで、妻の存在をもう一度、二人の間に置いている。

ご主人は、

「それを聞いて、安心してしまおう自分がいます」

と言った。

私が、

「安心していいんですか」と聞いたら、
ご主人は小さく首を振って、
「よくないと思います」
「でも、嬉しいです」と答えたわ。

よくないと思います。
でも、嬉しいです。

真由は、その二つの言葉を何度も読んだ。

夫は、わかっている。

これはよくないことだと。

妻がいる自分が、別の女にそんなことを言うべき
ではないと。

それでも、嬉しい。

佳澄に男性として見られていることが。

自分の気持ちが一方通行ではなかったことが。

夫は、嬉しい。

真由の胸の奥が痛んだ。

痛いのに、身体の芯は熱くなった。

夫と佳澄は、もう互いの気持ちを確認してしまった。

まだ決定的に何かが起こったわけではない。

けれど、言葉ではもう、かなり深いところまで入っている。

佳澄から、さらに続く。

店を出る時、ご主人は少し静かだった。

でも、距離は近かった。

さっきの言葉をなかったことにはしない、という感じ
だった。

真由は、唇を噛んだ。

なかったことにはしない。

夫は、自分の言葉を引っ込めなかった。

惹かれている。

ちょっとでは済まないかもしれない。

佳澄さんは僕をどう思っているのか知りたい。

その言葉を、なかったことにはしないまま、佳澄の隣を歩いた。

帰り道、駅まで歩いた。

夜は冷えますねって言ったら、

「手、冷えていませんか」

と聞かれた。

それから、包むみたいに握ってきた。

離さなかった。

真由は、画面を見たまま動けなくなった。

手が冷たい。

そのまま包む。

そういう流れなら、どこまでも自然に見える。

でも、その自然さの中にある欲を、真由ははっきり感じた。

触れたい。

繋ぎたい。

離したくない。

それを、気遣いの顔でやっている。

夫はもう、そこまで来ている。

次の通知が来るまでの数秒が、ひどく長かった。

真由は画面を見つめた。

そして、最後の報告が届いた。

そのあと、キスした。

向こうから。

真由は、完全に動けなくなった。

キスした。

向こうから。

たったそれだけの言葉なのに、その中に全部が入っている。

狭い路地で触れた肩。

肩を寄せた手。

段差で差し出された手。

食事の席での告白。

惹かれているという言葉。

包まれた手。

離さなかった時間。

そして、佳澄へ向かって前に出た夫。

夫が、佳澄にキスした。

偶然ではない。

流れでもない。

間違っただけでもない。

向こうから。

夫から。

真由の胸の奥が静かに痛んだ。

痛いのに、その中心からまた熱が広がる。

もう、ただの興味ではない。

もう、ただの会話ではない。

もう、ただの食事でもない。

夫は佳澄を欲しがって、実際に唇を重ねた。

佳澄から、さらに一通届いた。

今日はそこで止めた。

でも、次はたぶん止まらない。

真由は、その文を見たまま動けなかった。

今日はそこで止めた。

止めたということは、止めなければその先があったということだ。

次はたぶん止まらない。

その言葉が、真由の身体の奥へ重く沈んでいく。

怖かった。

でも、もう目を逸らせなかった。

家に着いた時、夫はもう帰っていた。

リビングの灯りがついている。

ドアを開けると、夫がソファから顔を上げた。

「おかえり」

「ただいま。遅くなってごめんね」

真由はコートを脱ぎながら、夫の顔を見た。

いつも通りだった。

少し眠そうにも、少し疲れているようにも見える。

ただ、先に家へ帰ってくつろいでいる夫の顔だった。

だからこそ、その平然とした感じが真由には刺さった。

ついさっきまで、別の女と長く一緒にいた。

食事をして、夜道を歩いて、手を握って、キスまでした。

そのはずなのに、目の前にいる夫は、そんなことを欠片も見せない。

「飲み会、どうだった？」

夫が何でもない顔でそう聞いた。

真由はバッグを置きながら、曖昧に笑った。

「うん、まあ普通かな」

自分も嘘をついている。

そのことが、かえって苦かった。

「恒一さんは？ ご飯食べた？」

なるべく自然な流れの中で、真由はそう聞いた。

夫は一瞬だけ間を置いた。

ほんのわずかだった。

けれど真由には、それで十分だった。

「……うん、まあ」

視線を少し逸らしたまま、夫は曖昧に答えた。

「軽くね。適当に済ませた」

適当に。

その言い方が、真由には妙に生々しかった。

誰と、どこで、何を食べたのか。

本当はちゃんと輪郭があるはずなのに、そこだけ曖昧にしている。

「そっか」

「うん」

短いやり取りのあいだも、夫は何も言わない。

誰と食事をしたのか。

何時まで一緒にいたのか。

帰り道で何をしたのか。

何も言わないまま、ただ普段通りの顔で水を飲んでいる。

それが、真由には前よりずっと自然に見えた。

前なら、もう少しぎこちなさがあったかもしれない。

でも今夜の夫は、黙っていることに少し慣れ始めているようにも見える。

「先に風呂入ってくる」

「うん」

夫は立ち上がり、いつもの足取りで浴室へ向かった。

その背中を見送りながら、真由はソファの端をそっと握った。

胸の奥が、どうしようもなく熱い。

さっき佳澄から届いた文面が、何度も頭の中で繰り返される。

キスした。

向こうから。

今日はそこで止めた。

浴室のドアが閉まり、水の音が始まる。

その音を聞いた瞬間、真由はもうだめだと思った。
家に着くまでのあいだ、どうにか押し込めていた
熱が、そこで一気に形を持ち始める。

佳澄に向かって前へ出た夫。

狭い路地で肩を寄せた夫。

段差で手を取り、前より長く離さなかった夫。

寒い夜道で手を包み、そのまま離さなかった夫。

そして、自分からキスした夫。

その唇で、今さっき「おかえり」と言った。

その口で、飲み会どうだった、と聞いた。

その同じ男が、ほんの少し前には佳澄に触れていた。

苦しい。

でも、その苦しさの中心にある熱が、あまりにも甘かった。

しかも、もう一つの想像が真由の中で勝手に形になった。

いま浴室の向こうにいる夫は、今日キスした佳澄の顔を思い出しているに違いない。

唇が触れた瞬間の感触も、手を包んだ時の冷たさも、もう身体のどこかに残っているはずだった。

湯を浴びながら、あの女の横顔や、近くで見た柔らかい輪郭を思い返しているのかもしれない——いや、きっと思い返している。

そして、その記憶だけで身体を高ぶらせているのかもしれない。

真由は、その想像に強く息を詰めた。

夫は、佳澄を思い出している。

その記憶を持ったまま、この家に帰ってきた。

妻である自分のいる場所へ。

数日前には、自分を抱いていた男。

その同じ男が今は、別の女とのキスを反芻しながら

ら、身体の奥を熱くしている。

もしかしたら、もうその熱だけで、下半身にまで変化が出ているのかもしれない。

そのことが、真由にはたまらなくいやらしかった。

もしこのあと自分を抱くことがあったなら、その瞬間にも夫は佳澄の体を思い出すに違いない。

自分に触れながら、別の女で熱くなった身体のまま、真由を抱くのだ。

その想像は、真由の身体をひどく濡らした。

苦しい。

でも、たまらない。

真由は立ち上がり、急ぐように寝室へ入る。

ワンピースの裾を持ち上げる指先が、もう少し乱れていた。

ベッドの端に腰を下ろす。

浴室からの水音は遠くで続いている。

その音に急かされるように、真由は脚を開いた。

「……っ」

喉の奥はもう熱く、息は最初から浅かった。

頭の中にあるのは、佳澄からの報告だけだ。

帰したくないという言葉。

夜道。

包まれた手。

止まった時間。

そして、キス。

それだけで十分だった。

むしろ、それだけだからこそ強かった。

行為の細かい想像より、もう現実に起きたあの短い事実の方が、真由にはずっと深く刺さる。

「……だめ……っ」

水音の向こうで、夫は今日キスした佳澄のことを思い返しているに違いなかった。

腕の中へ引き寄せた時の体温も、唇を重ねた時のやわらかさも、まだ身体のどこかに濃く残っているはずだった。

湯を浴びながら、その記憶を反芻するたびに熱は下へ落ちていき、男の部分を隠しようもなく変えているに決まっている。

そして自分は、そのことを思い浮かべながら、こんなふうになっている。

夫が他の女を思って身体を硬くしている。

その背徳が、真由の指をさらに止められなくした。

「……っ、……あ、っ……」

キスした。

向こうから。

今日はそこで止めた。

その短い文面を頭の中でなぞるたび、熱が強くなる。

止めた、という言葉までがいやらしい。

止めたということは、止めなければもっと先があったということだ。

その寸止めの感じが、真由の奥をひどく煽った。

「……だめ、っ……もう……」

「……いく、……いく、っ！」

声を押し殺しながら、真由は激しく果てた。

肩が細かく震える。

息が乱れる。

終わったあとも、しばらく動けなかった。

浴室の水音は、まだ続いている。

胸が苦しい。

でも、少しでも軽くもなっていた。

どうしようもなく膨らんだ熱を、ようやくひとつ外へ出せた気がした。

それでも、足りない。

真由は枕元に置いたスマホを引き寄せ、もう一度画面を見る。

次の日曜、サークルは休む流れになった。
たぶん、もう次は止まらない。

真由は、その一文を見たまま目を閉じた。

次の日曜。
もう次は止まらない。

それが、絶頂のあとでなお消えない熱みたいに、
身体の奥へ重く沈んでいった。